

繋いだ手と手が 紡ぐ
もの

雪宮春夏

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が醒めたら子どもになっていた。

現実として、そんな出来事に直面した俺、つりそら 吊空 まくろ 真黒は世間では、フレイアという敵として認知されている。

恩師である先生の頼みで気は進まないながらも仕方なく、敵連合の死柄木に協力しているものの、意識は飛ぶは、知らない内に傷は増えるは、全然納得できないんですけど……！

しかも先生が用意した住処の隣家には何故か雄英生がいて……！

……あれ？

もしかして結構怪しまれてる？

2017/5/19 題名変更しました。更に変更する場合もあるので、しばらく(仮)表示をつけさせて頂きます。

どうぞご了承ください。

2017/5/21 題名確定しました。

題名の方はあるアニメのキャラクターソングを参考に使っています。

2017/5/28 本編に関わるかは未定ですが、幾つか含みはでているので、必須タグとして追加しました。

目次

導入

死んだはずだったのに…… 1

喧嘩を売っていた 4

お母さん 10

USJ襲撃編

USJ 19

フレイア 27

オールマイト 43

「死ぬ気の炎」 51

解決 62

予期せぬ邂逅 72

体育祭編

体育祭開幕 80

第二種目 87

自覚 99

決別 113

職場体験編

職場体験 開始 125

出久と、死柄木と…… 130

保須襲撃 直前 141

火の手は上がる 149

ヒーローの本質 158

一言 168

急転直下 176

ジョットープリーモ 192

I世とIX世と……	211
フレイアの正体	221
番外編	
爆豪の職場体験	241
爆豪の職場体験 その②	245
爆豪の職場体験 その③	251
閑章 一 辿り着こうとする者達	
“大空”のいない世界	256
これからの話	269
明かされる真実	279
世界を渡る方法	304

導入

死んだはずだったのに……

死んだはずなのに、気がつけば、子どもになっていた。

そんな文章で始まる物語は、何も珍しいものではない。

寧ろ、ありきたりと言つても良い設定だが、実際に自分の身に降りかかるとなると、全然笑い事には出来なかつた。

「……何これ」

鏡の前に立つ俺の姿は、昔の俺そのものだ。

重力に逆らうように跳ね上がる赤茶色の髪が、解きほぐすのが容易でないことは簡単に想像がついた。

驚愕に見開かれた瞳も同色のそれで……でも大人だったときに比べれば丸みが強い。

「え？ ……何？ これ……なにが起きてるの？」

状況に置いていくことが出来ずに、俺は頭を抱え込んだ。

時刻はまだ朝早い。

人々の行き交う喧噪もなく、あるのは？ 気な鳥の声のみだ。

「とりあえず、現状だ。えーと……」

敢えて声に出しながら確認する。

そうしないと、己がおかしくなりそうな、そんな感覚さえあった。

記憶は……己の死の瞬間まで、ばっちり。

(うん！ やっぱり俺死んでんだ……)

良かったと、何故か安堵してしまう辺り、俺はおかしいのかもしれない。

死にたいと言う人生だったわけではないが、貪欲に何かを望む人生でも無かったと思う。しいて言うなら、平穩が欲しいとは何度も言った気がする。

大切なものはたくさんあったけれど、そのほとんどに俺はもう必要では無くて、逆に俺という存在が、皆を危険に晒すことは数え切れないくらいだった。

それでも、俺に生きてて欲しいと、傍にいてくれた皆が望んだから、俺はがむしやりに生き続けた。

(けど、死んじやったんだよなあ……あれ?)

そこまで現状をなぞるように思い起こしていた俺は、肝心なものが抜けていることに気づいた。

(俺……何で死んだんだ?)

死んだという、自覚はある。しかしそれに至った背景が上手く理解できずに、首を傾

げた。そこにいたるまでの経路がよくわからないのだ。

(え? ……あれ?)

首を傾げながらも俺は、窓から外を眺めた。

外は雲一つ無い快晴。平和そのものだった。

どうも何か、おかしな気がする。

目が醒めてから、時間が経てば経つほど、俺の中に膨らんでくるのは違和感だった。

俺の名前は吊空(つりそら) 真黒(まくろ) と言うらしい。

因みに死ぬ前の名前は不明。

今生では両親はいなく、親切な「先生」と言う人が、毎月生活費を払ってくれている。

(うん……胡散臭すぎる……!)

改めて知っている事を並べ立てて確信するが、こちらとしても右も左も分からない状態でお世話になっている身の上だ。頼まれている事に否は言えない。

そんな理由で俺は一件のバーに足を踏み入れていた。

……それを今後悔しているわけでは無いが、泣きたくなる心情ではある。

「襲撃って……何それ」

せめて平穩に暮らしたい。

そう願うのは贅沢だろうか。

喧嘩を売っていた

「黒霧……なんだこいつは」

バーのカウンターに座る男は俺を見て一言、疑念の色の濃い声を発した。

カウンターの内側にいる、何とも変わった風貌のバーテンダーに向ける声は心なしか
苛ついている。

いや、正直に言おう。

変わった風貌では無い。おかしな風貌だ。

何せ顔が無い。

……いや、あるのかもしれないが見えないのだ。黒い霧に覆われて。

「仮装ですか？ 貴方といい、この人といい」

取りあえず、不機嫌そうな男の人よりも、まだ表情が読めない霧さんの方が面倒ごと
にならなそうな気がして、霧さんに問いかける。

霧さんはその俺の問いに答えず、なるほどと言葉を漏らした。

「……確かに、先生からお聞きした通りの方の方のようですね」

こちらの分からぬことで納得されるのは気分の良いものではないが、あの先生の紹介

の時点で、いやな予感があった。あの人と同じような人種らしい。

基本自分優先。他人のことは後で良しだ。

(あれ? でもその態度を誤魔化そうって気が無いだけ、先生よりはマシ?)

ふと、その隠蔽の有無に関する差違に思い当たって、頭を悩ませていると、面倒そうという理由で敢えて思考から外していたもう一人……こちらもまあ、靄さんよりはマシだが、何とも変な男の子が、不機嫌を隠しもしない苛立った声で靄さんに尋ねる。

「答えろよ黒霧。何なんだ? こいつは……!」

どうやら靄さんは黒霧というらしい。

「落ち着いてください。死柄木弔」

死柄木、と呼ばれた男は若く見えた。青みがかかった鼠色の髪に赤い瞳、身だしなみを整えれば美丈夫かもしれないが、顔全体に貼り付けている数対の手がいろいろ台無しにしている。

(いや、どんなファッションにするかは個人の自由だ。……あんま追求しない方が良いでしょう。俺! ……ファッション、だよな? あれ……)

考え込む俺をよそに、表情のわかりにくい死柄木は、それでも不機嫌を隠そうともしないで、俺を示した。

「黒霧。今すぐこいつ殺つて良いか? ……俺の大嫌いなものセットで持つてやがる……

!

あまりにも穏やかでない言葉に、俺は眉を寄せるが、俺の反応など知ったことでは無いと言うように、死柄木は続けた。

「ガキで、礼儀知らずだ」

「……………」

その時俺の脳裏を過ぎった感情は、ひと言では言い表せないだろう。

なるほど。確かに今の俺はどう見ても死柄木よりは年下である。

しかし、生前も合わせればその年齢は間違いなく死柄木よりも上なのだ。

第一。

「俺は先生の命令でここに来ただけだ。だからここにいるだけのお前を敬う気なんて無い。そうして欲しければそれ相応のことをしてから言えよ」

気づけば真つ向から喧嘩を売っていた。無意識に唇を吊り上げた俺の姿は、後から思えば確かに、礼儀知らず……を通り越して、憎たらしくも見えたことだろう。

ガリ、ガリりと、死柄木の手が顔を首をひっかく音がやけに大きく聞こえた。

「冗談だろ？ こんな奴を使うのかよ!? ……何でもつとおとなしく出来ない……………!」

苦々しい声音で呟く死柄木を宥めるように、黒霧が彼の耳元に口を寄せる。

その内容は僅かに距離が有るこちらには届くことは無かったが、おそらくそれは折り

込み済みだろう。

(さて……どうしよう。怒らせたよなあ。これ……)

勿論ここで死柄木が怒りのあまり俺を使いたくないとクーリングオフしてくれたら、俺としては万々歳だ。

俺が先生に頼まれたのは「彼に手を貸してくれ」の一言のみ。

逆に言えば彼に断られたと言う言質さえ取れば、俺はそのままお役御免になる可能性が高いだろう。……希望的観測で言えば。

(いや、でもあの事聞かされた時点で、協力するか殺すかの二者択一か?)

入った直後に彼らから聞かされた、ある計画を思い起こし、俺は重く溜息を吐いた。

もしやこれも、彼等は見越していたのか……或いは単なる偶然か。

(雄英襲撃及び、オールマイト殺害計画ねえ……)

それを聞いた瞬間、驚愕よりも呆れが先に立った。

国内でナンバーワンとされる英雄。普通は考えても実行することは無いであろうそれ。

それを実行することをカリスマとるか無謀とるか。

(うん。無謀だな……)

空気を読むならカリスマと言うべき何だろうが、俺は自分に嘘はつけない。

まず、自分以外は霧さん……もとい黒霧さんしかいないのに、何故態々雄英という英雄集団の牙城を狙うのか、社会を混乱に陥れると言うならまだしも、死柄木の話の聞き限り、完全な私怨に近い代物。

彼のオフを狙えば成功率が、グンと上がる。

「……訳でも、無いですね。寧ろ子どもを人質に取った方が勝機はあるのかな？」

……いや、ある意味余計な怒りを買いそうな気がする。

「……それ以前にオールマイトの私生活は一切謎に包まれているのです。よって、彼の弱味は見つからず、オフの過ごし方も謎のままです」

頭の中で考えていただけのつもりがいつの間にかやら声に出していたのか、黒霧さんが丁寧に注釈を入れてくれた。

「その前に、てめえの意見は聞いてねえ。雄英襲撃は決定事項だ。てめえの力を貸して貰う」

俺と黒霧さんが話している間に落ち着きを取り戻したのか、苦々しい顔は隠せていないが、平然を装った声音で、死柄木が口を挟んできた。

「……了解」

ここまで言われてしまったのは俺としては不本意でも頷くしかない。先生との約束がある以上しようがないことだ。

「……………んで？ 詳細は？」

「おつて連絡します。住処の方の連絡先は先生から渡されていますので、そちらへ連絡を」

死柄木の前に黒霧さんが口を開いた。

俺と死柄木をなるべく会話させたくないのか、まあ妥当な処だろう。

（しかし、連絡先まで筒抜けですか……）

面倒などと思うが、予想の範囲内でもある。元々、俺の住処を整えたのは先生だ。

目を覚ましたあの時からずっと世話になっているのだから、今更どうこう言う気はない。

（ずっと？ ……あれ？ いつから俺、あそこにいたんだ？）

フツと頭を過ぎった僅かな違和感に、俺は眉をひそめる。しかし、それが何かの答えに辿り着く前に、その違和感は無くなっていた。

（何だろう……釈然としない）

結果として残ったのは、そんな何とも言えない、消化しきれないもやもやとした感覚だけだった。

お母さん

俺の住処として与えられているのは、独居型のものでは無い。

何故かは知らないが、ファミリー型の団地の一角である。

(もしかして将来、死柄木や黒霧さんと住めつてことなのかな? ……絶対嫌なんだけど)

あり得ないことだろうと断言できない所が、辛いことだ。それ相応の時間を共に過ごしたはずなのに、あの人の考えが分かるとは口が裂けても言えない。

一だけで十を知ると言う言葉があるが、先生は、一だけで、千通りぐらいの可能性を考察する方と言っても過言では無い。

実年齢は怖くて聞けないが、見た目通りの年でも無いのは、接していれば嫌でも分かる。

滅多に胸中を明かさない故に、思考の結果が分かるよりも、分からないことの方が多いのも相まって、あの人の思考回路の解明は既に俺の理解優先度から除外されて久しい。

(だけどやることに、必ず意味があるんだよなあ。あの人)

全てが全て……己のために。

そんな生き方をしている人だ。

俺を死柄木に会わせたのも、そもそも俺の面倒を見ていたことさえも、なんらかの計画の一部だろうと言うことは、いつからか見当はついていた。

そしてそこには、おそらく俺の意志は介在出来ないだろう。

そう言うことだけは聞き入れるように育てられてもいる。

「……面倒な」

呟くその言葉は、そんな風にしか生きられなくされた己に対してか、そこまで分かっているであろうにもならない現状に対してか。

それとも。

「あら？ ……貴方もしかして」

出かけようとして、隣家に住む住人と鉢合わせしてしまった、現在に対してかは……定かではない。

「それでね、三件隣の奥様なんだけど……」

無難な自己紹介は、まあ良い。死柄木達の計画が終わるまでの一時的な住処なのだから、永住するわけでもない。ボロが出る可能性も少ないだろう。

「あそこのおばあちゃんは……」

隣近所の紹介も、適当な合いの手を入れながら続く。

別段、外に出たのとて、用事があつたわけではない。

黒霧さん達からの詳細な説明はまだ無いし、現状は待機が妥当な処だろう。

そう、だからこれは何もおかしな事は無い。そう俺は言い訳を続けながらも、隣家の女主人と連れ添つて、町の中を歩いていた。

彼女は息子と現在二人暮らしで、夫は単身赴任しているらしい。

浮気と思われちゃいますよ？ と茶化したら、貴方みたいな可愛い相手なら、あの人も気にしないわよと、何とも寛大な答えが返つてきた。

ふくよかな身体ながらも、きびきびと動きながら町の中の細かいところまで説明してくれる。

単なる親切と言うにはどこか違和感があつた。

(けど……いやな予感はないんだよなあ)

これが死柄木や黒霧、先生だったら、悪寒の一つでも来していただろうが、彼女相手にはそれが無い。

ただ何かが引つ掛けるようなむずがゆさだけだ。

「……どうしたの？ クロ君」

いつの間にか応答が途切れていたのか、どこか心配そうな顔つきで、彼女は俺の顔を

覗き込んでいた。

最初に真黒君と呼びかけた彼女に、クロと呼んでくれと頼んだのは俺自身だった。道中によそよそしい距離を感じたわけではないが、誰かと町並みを歩くという行為に、前生の何かを思い起こしたのかもしれない。

思い浮かべてみれば、あの頃は何か愛称のようなものがあつた気がする。

「いえ……あの……」

咄嗟に誤魔化そうとしたが、上手く言葉にすることが出来なかつた。

そのまま黙りこんだ俺を不審に思つただらうに、彼女は追求するでもなく、柔らかい笑みを浮かべ……あることを提案した。

「ごめんなさいね。こんなおばさんの我が儘に付き合わせてしまって」

そう言つた彼女が差し出したのは自販機で買つたばかりの缶コーヒーだった。

彼女の奢りという形になつてしまつたそれは、お礼だそうだけだ。

「いえ。俺も楽しかつたです」

お世辞抜きの本音の言葉に、彼女は嬉しそうに笑つてくれた。

考えてみれば、今生の俺にはこんな笑顔を向けてくれた人はいない。

物心着いた時には、既に先生しか身寄りがいなかつたし、他に接する相手と言えば、先生と俺の主治医であつた、ドクター位だ。

「でも一人暮らしなんて、ご両親も心配なさるでしょう? ……寂しくはない?」

俺を覗き込んで発せられた言葉に、俺は目を瞬かせた。

最初に、その言葉を理解するのに時間を要した。

「……寂しい、ですか?」

無論意味なら知っている。しかし、それと己の間で等号を発生させる事が出来なかった。

「クロ君ね。玄関先で会ったとき、迷子の子どもみたいなの、そんな雰囲気があったの」

だから声をかけたのだと続けた女性に、俺は首を傾げた。

どう返せばいいのかわからない。それが本音だった。

迷子の子ども……まずそんな経験が無いからか、その雰囲気というのが、どのような状態を指しているのかは分からない。

ただ己は別に道に迷っているわけではない。やることははっきりと分かっている。

現在は先生の指示通りに死柄木に協力し、雄英を襲撃。そしてオールマイトを殺す。やらなければならぬことはそれだけだ。

迷う要素は何もない。

「ありがとうございます。でも俺は……」

咄嗟に次の言葉が出てこなかった。

俺は大丈夫です。

そう答えればきつとこの人は立ち去るだろう。単なるお節介の延長としての行為ならば、心配ごとが無ければそれで終わりだ。

「あと、もう一つだけ、実はクロ君に声をかけた理由があるの」

缶コーヒを手で包みながら、彼女は誰もいない公園をジツと見つめている。まるで、そこにいた誰かを思い出しているように。

「クロ君ね。……私の息子に似ているのよ」

「息子さん?」

尋ねてきた男の子……吊空^{つりそら} 真黒君^{まぐろ}に、私は頷いて続けた。何となくで話しかけたのにも関わらず、面倒がる様子もなく、相槌を打つ姿は几帳面というよりも疑り深い猫のようにも見える。

ジツと観察しているようと、言うべきなのだろうか。

この人は敵か味方か、見極めようとする眼だ。

彼女の息子は、そんなことをする子では無かったが、あることが分かっていたから、いつも周りに対してどこか身構えるようになってしまった。

この一年はそんな姿は無くなりつつあるが、それは注意深さや、慎重さ、冷静な判断

力という、良い方向へと向きを変えて、そのまま息子の力と変わっていた。

元々、思いやり深い一面はあったのと合わせり、気弱な印象は中々己の中では拭えないのだが。

そんな背景があるためか、周りを良く見て方法を模索し、熟考することに彼は長けている。そんな彼の姿を暖かい目で見守ろうと思えるぐらいには、こちらも余裕を持てるようになった。

「そんな時にね。クロ君と会って……昔のあの子を思い出してね。そうしたら、もうほっとけなかつたの」

そのまま微笑まれた俺は、どんな表情をしていただろう。自覚せざる負えなかつた。俺は彼女の笑みに、魅入っていた。

（何だろう？ さして、珍しいものでもないのに……目が離せない。違う。離れたくないと、思うような……）

見ているだけで、心の中まで暖かくなるような、そんな穏やかな笑みだった。「寂しくは……ないです」

一拍分の間を置いて、俺が吐き出したのは、さっきの問いかけの答だった。

「俺は……大丈夫です」

鉛を吐き出すかのように、口が重い。

何故かそんな気分がした。

あの後、彼女から逃げるように住処へ駆け込んだ俺は、そこで光る留守番電話の通知表示を見つけた。メッセージが入っているようで、点滅を繰り返している。

戸締まりをしつかりと確認して、メッセージを流すと、そこから聞こえてきたのは抑揚の少ない無機質な声だった。

『雄英のカリキュラムを手に入れました』

淡々とした、用件だけを告げる声。

『決行は明日。午後からとなります』

電話の声に合わさるかのよう、外からの笑い声が途切れ途切れに聞こえた。

「それでね。今日学級委員長を決めることになって……」

幼い子供の声。彼女の相槌を打つ声。おそらく彼女の息子だろうか。

暖かい家庭の声を伴奏に、俺の前では無機質な声が淡々と流れ続ける。

『正午にバーの方へ起こし下さい。そこから3人で死柄木の集めた同士達の元へ合流します』

プツツと、連絡が途切れる音。

メッセージの終了を告げるアナウンスと、隣の鍵が開く音は殆ど同じだった。

「ほら出久、入って」

「はあい。ただいまー」

暖かい家族の声を聞きながら、俺は何故か涙がこみ上げてくるのを感じた。

寂しいと思った事は今まで無かった。

そういうものだと思っていたからだ。

『寂しくはない?』

その言葉は思っていた以上に容易く、俺の中に入り込んできた。

何の利益も求めない、含みもない声がただ泣きたくなる位に嬉しかった。

「……お母さんがいたら、こんな感じだったのかなあ」

思わず零してしまった言葉は、どこか現状を詰るようなもので……どうにもならなくなつた過去を悔いるようなものだった。

U S J 襲撃編

U S J

雄英高校ヒーロー科1年、緑谷出久がそれを聞いたのは、夕食の席であった。

「えっ?!お隣の家に人つてもう入ってたの!？」

緑谷家の隣宅に、新しく人が入ると言う話はこの2、3ヶ月前から何度か話されていたことだったが、引越し業者を見かけるでもなく、いつまでも人の出入りしている様子がなかったため、隣接していた出久達もまだ、人が住んでいないのだと思い込んでいた。

その家の住人に遭遇したのだと話した母に、出久はつい興味本位から前のめりになり、聞きたがる。

情報収集は、元々ヒーローになりたいという思いからヒーローに憧れ、その情報を書き出したのがそもそもその始まりだが、今はもう習慣に近い癖となっている。

「名前は吊空真黒君。今は一人暮らしみたいね。ご両親の事は少し聞ける雰囲気じゃ無かったから聞いてないけど、年は出久よりも年下よ。多分……まだ中学生じゃ無いかしら」

「え……う？」

彼女がもたらした情報に、思わず出久も目を丸くした。

ヒーロー鮑和社会と呼ばれる現代だが、それは犯罪が起きないと言うわけではない。ここら辺はそうでもないが、それでも出久よりも年下の子どもが一人暮らしというのは、少し異常な事態だった。

「その子ね。凄く寂しそうな顔をしていたの。どんな事情があるのかは分からないけど、きつと、心に傷を負っているんだと思うわ」

我知らず同情に満ちた目になってしまった母の姿に、出久も未だあったことのない住人に思いを寄せた。

出久の父も海外に出張しているため、ほとんど母子家庭のような環境で育ったが、それでも傍にはいつも母がいてくれた。苦しいときも悲しいときも……：雄英に合格するために努力した一年間は、母が食事の面から十分なサポートをしてくれたからこそ、合格までこぎ着けたのだと思ってる。

そんな存在がいなかったら、自分だったらきつと耐えられないだろう。

「お母さん。これからお氣にかけてみた方が良いよ。……何が出来るかは、分からないけど。氣にしてくれる人がいるだけでもきつと」

そこで出久が思い浮かべたのは現在雄英高校にて教鞭を振るっている、ヒーローとし

ての出久の可能性を、最初に見いだしてくれた人。

今から一年前、幼なじみである少年の危機に、咄嗟に体を動かした己を見て「君はヒーローになれる」といつてくれた恩人だった。

「きつと……違うと思うから」

己の経験も交えた言葉に、母も何やら思うことがあったのか、もちろんと続ける。

「会う機会があれば、出久にも紹介するね。本当に良い子なの。きつと仲良くなれるよ」
しかし彼らはその翌日、思いもしないところで対面することとなるのだが、それはまだ、誰も知る由はない。

翌日、午後一番で始まったヒーロー基礎学に教壇の上に立ったのは、受け持つオールマイトではなく出久達の担任、相澤先生だった。

彼の話によると、本日のヒーロー基礎学はオールマイトと彼を含む三人で見ることになったのだそう。

なつたと言う言葉に、出久はそれが特例として急遽決まったことだと悟った。そこで頭を過ぎったのは昨日の突然昼休み中にマスコミが学校へ侵入してきた出来事だったが、それと今のこの決定を繋げることは出来なかつた。モヤモヤとした物を抱える出久に構わず相澤が続けるには、コスチュームの着用は自由であること。また距離があるた

めバスで移動するという言葉に、皆が各々の用意を整えるために動き始めた。

行われるのは「救助訓練」。

緑谷出久にとっては、憧れのヒーローに近付くための第一歩だった。

嘘の（U）災害と（S）事故（J）ルーム。

数多くの災害規模を模した現場のセットを、まるで遊園地に喻えた男子の期待に応えるかのように、打ち明けられた名前に、思わず全員が突っ込んだ。

図らずもその一幕で、生徒の緊張を解したのは、相澤、オールマイトと同じ、雄英の教師陣にしてヒーロー。スペースヒーロー13号である。

全身を宇宙服を着込んだ外見がコスチュームで、その素顔を見た者はいないらしい。

個性「ブラックホール」でどんな物でも吸い込み、チリにすることでどのような災害からでも人を救ける、紳士的なヒーローともいわれていた。

姿が見えないオールマイトについては小声で何やら話し合っているようだが、その声はこちらにまでは聞こえてこない。

生徒が一所に集まっている前で、13号先生の注意が入るが、それは注意と言うよりも心構えを解く授業の講話に近く、出久を含め、生徒達の心に深く刻まれる言葉だった。話が終わった直後に思わず拍手が巻き起こる中、改めて相澤先生が、指示を出そうとしたその時、施設の電気が僅かに点滅した。

「何だ?」

生徒の一人の誰何に被さるるように、相澤先生の切羽詰まった様子の指示が飛ぶ。

「全員!」かたまりになって動くな!!」

その直後、皆が集まる正面から一段下がった施設内の噴水に、黒い歪みが生まれ、渦を描くように大穴へと変わり、姿を見せた。

そこから出てきたのは、ぎらつき、飛び出さんばかりに迫り上がった赤い瞳。顔面についた人の手がいつそうの不気味さを醸し出していた。

青みがかつた鼠色の髪その男を先頭に、ゾロゾロと黒い穴の中から人が現れてくる。

「何だ何だ?」

「また、入試の時みたいにもう始まっているパターン?」

事情が分からない生徒達が軽口を叩く中、相澤先生の声が、やけに大きく聞こえた。

「動くな!……あれは」

大穴から最初に出てきた男がその場に立ち止まる。だが後ろに続く者達に止まる素振りは無く、また、次々と現れる数にも際限がないように感じられた。

「敵だ!!」
ウイラン

相澤先生の声が続くように、低い男の声が届く。

「13号に、イレイザーヘッドですか」

見ると大穴に、瞳のように2つの空隙がうまれていた。そこから続々と人が出続けていることは何も変わりないのに、横の男もその穴の変化を気にすることなく、辺りを見回している。

「先日頂いた教師側のカリキュラムでは……オールマイトがここにいる筈なのですが」

淡々と事実を確認するような大穴……正確にはその個性の持ち主に、相澤先生は苦虫をかみつぶしたような表情で吐き捨てた。

「やはり先日のはクソ共の仕業だったか」

状況を漸く呑み込み、息を呑む生徒達を背に、相澤先生は完全に戦闘可能状態を整えていた。捕縛用の拘束具を襟巻きのように巻き付け、目の動きを悟られないように付けられたゴーグル。

それ越しに未だに溢れるように現れ続ける敵を睨みつけた。

「どこだよ……せつかくこんな大衆引き連れて来たのにさ」

その様子に気づいているのか否かは定かでは無いが、ガリガリと主犯であろう男は爪で首元を執拗に掻きむしりながら、言葉を零し続ける。

「オールマイト……平和の象徴……いないなんて」

そこでピタッと男の手の動きが止まる。

大穴からは人が出尽くそうとしているのか、数が切れ切れになっていた所だった。

「予想外も良いところだよなあ? 『フレイア』」

フレイアと男が呼びかけたのは、黒いスーツを身に纏った、青年だった。

(こいつらが、主格か……!)

遠目に見ていた出久でさえ分かる。それほどフレイアと言う青年、主犯であろう男、大穴の個性の持ち主。

彼らの纏う空気は他の敵^{ツイン}達と一線をがしていた。

主犯の男と、大穴の個性の持ち主とは違い、フレイアと言う青年について顔で視認できたのは、橙に似た色の瞳を持つことだけ。他は無骨な仮面に覆われていて、近くから見ても詳細な情報を知ることが容易では無いだろう。

尋ねられた筈の青年は何も答えないが、男も気にすることなく相澤先生に、正確にはその背後にいる出久達に目を向けた。

「子どもを殺せば……来るのかなあ?」

そこに宿っていたのは、純粹なる殺意。

この時、出久達は知ることとなった。

……プロが何と戦っているのか。

そして、何と向き合っているのかを。

相澤先生が個性を発動させるための予備動作と見られる、逆立った髪の毛の動きに、ゆつくりと、フレイアと呼ばれていた青年が目を瞬く。

そこには……何の感情も見いだす事が出来なかつた。

分かるのは、その周囲から向けられる、途方のない悪意……！

フレイア

突如U S Jを襲撃してきた者達は、「敵^{ライバル}連合」と名乗った。

すぐさま先陣をきって迎撃に出た相澤先生の指示により、13号先生の引率によって避難をしようとした出久達だったが、大穴の個性の持ち主と思っていた黒霧と呼ばれていた男の個性「ワープ」によって、施設内にバラバラにされてしまう。

その中で水難エリアに飛ばされた出久、峰田実、蛙吹梅雨の三人は、彼らを包囲していた雑魚敵を何とか撃破し、水難エリアから脱出しようとしていた。

「あれで全員だったのは運が良かった……凄い博打をしてしまった……普通なら念のため何人か水中に伏せ解くべきだもの」

個性の発動によって折れた左手の指を右手で押さえながら、反省点を呟き続ける出久に対して、峰田を引っ張りながらついてきていた梅雨は表情の読みにくい顔のまま、苦言を呈した。

「緑谷ちゃん。やめて、怖い」

……尤もである。

「次どうするかじゃないかしら?」

初戦闘にして初勝利を経験したものの、彼女には調子に乗る様子はない。

平常心を保つ彼女の精神を頼もしく思いながらも、出久は考えていることを口にした。

「とりあえず、救けを呼ぶのが最優先だよ。このまま水辺に沿って広場を避けて出口へ向かうのが最善。……だけど」

しかしこの時、梅雨と違い、出久の方が冷静とは言い辛かったのかもしれない。

「敵の数が多すぎる気がする。……先生は制圧するつもりだろうけど、僕らを守るためにムリを通して飛び込んだと思うんだ」

そこまでで出久の言わんとしていることを察したのか、峰田が僅かに慌てた様子で制止をかける。

「待てよ緑谷。拙いって!」

「……ケロ」

梅雨の方もそこに込められた言葉を察したのか、心配そうな様子で二人を見比べた。そんな二人の様子に言葉足らずだったというように、緑谷は慌てて言葉を選ぶ。

「べ……別に、邪魔になるような事は考えてないよ!!」

……なぜなら、錯覚してしまったのだから。

「ただ隙を見て……少しでも先生の負担を減らせたら、つて……」

……自分達の力が敵に通用すると、錯覚してしまったのだから。

USJ内のエリアの一つ、土砂ゾーンは氷原へと姿を変えていた。

そこにいる子どもはたった一人。推薦枠で合格した、「半冷半燃」の個性の持ち主、轟焦凍である。

(オールマイトを殺す。初見じゃあ、精鋭を揃え、数で圧倒するのかと思えば、蓋を開けてみれば生徒用のコマ……チンピラの寄せ集めでしかねえ……)

二つの異なる個性を持つが為に、生まれつきでなってしまったオツドアイを眇めながら思案にふける焦凍だが、決断は早かった。

敵の「ワープ」の個性によって、このエリアに飛ばされた直後、自らの個性の能力の一つである凍結の能力のを広範囲に使い、共に飛ばされてきた敵共々辺り一帯を凍結させたのだ。

その場所にいる敵の一人に近付きながら、徐に焦凍は口を開く。

「このままの状態を保てば体はじわじわと壊死していく。俺もヒーロー志望だ。できればそんなことはなるべくしたくねえ……」

口ではそう言いながらも、その表情には慈愛の色はなく、瞳は冷徹なまでにさめたままだ。

「そこだ。お前らに聞きたいことがある……「オールマイトを殺せる」その根拠って……策って何だ？」

「無理をするなよ。イレイザーヘッド」

捕まれた肘がボロボロと崩れていく様子に、逆側の拳を振り上げ、主犯の男に一撃を与え、相澤は距離を取った。

「動き回るから分かりづらいけど……髪が下がる瞬間がある」

立ち上がって滔々と彼が述べるのは、戦う相澤を観察する中で気づいたことから導き出した己の考えだ。

「「アクシオン終える」とだ。そしてその間隔は……だんだん短くなっている」

相澤の個性の切り替え時は、髪の動きで視認できる。

個性を発動させると、逆立つように髪が上がり、個性の発動を解除すると髪が下がる。

それには早い段階で気づいた。

後は……気づけば簡単だっただろう。それは相澤にも容易に理解できた。

己の優位性を確信したのか、男は勝ち誇るように含み嗤う。

「その「個性」じゃあ……集団との長期決戦は向いてないんじゃないのか？……君が得意なのはあくまで、奇襲からの短期決戦だろう？」

それは男に言われるまでも無く、相澤自身がどうの昔から熟知していたことだ。

己の個性は目に負荷をかけるため、家系図で見てもこの個性を持つ親族は皆生まれながらにドライアイになりやすい。己もその例に漏れることなく、継続的に個性を使い続けることはどうしても出来なかった。

しかし、そのマイナス面も覚悟の上で、ヒーローを志したのは己自身だ。敵を苛つかせる効果もあるかと狙って、敢えて無言を貫くも、相手は気にする風もなく、言葉を零し続ける。

「それでも真つ正面から飛び込んできたのは、生徒に安心を与える為か？」

ふふつと、肩を揺らしながらも、嗤う男の視線は相澤から僅かにズレていた。

それに気づき、相澤がその方向に視線を向けたのと。

「所でヒーロー」

その小柄な手が。

「本命は俺じゃない……！」

相澤の頭を掴み、床に叩きつけたのは……ほぼ同時だった。

倒壊ゾーン。そこには荒く息を吐く、二人の子どもの姿があった。

「これで全部か。……弱いな」

他にいるのは、十人を超える敵達だが、その全ては、床に倒れており、既に意識が無い。

改めてそれを確認した子どもの一人、切島鋭児郎は、共にここにいた、爆豪勝己に声をかける。

「よし！じゃあ早く皆を助けに行こうぜ！攻撃手段が少ねえ奴らが心配だ!!」

爆豪に提案する切島の言葉に、爆豪も黙って耳を傾ける。

その背後に一人、姿を擬態させた敵がいることには気づいていないように見えた。

「俺らが先走ったせいで13号先生が後手にまわった。先生が、あの靄を吸い込んでしまえばこんな状況にはなつてねえ筈なんだ。……責任取らねえと」

悔いている様子を隠すこともせず、言葉を零す切島に対して、同じ行為をしたはずの爆豪はにべもなく言い放つ。

「行きたきや勝手に駆け。俺はあの靄をぶっ飛ばす」

その言葉は切島からすれば、単なる我が儘にしか聞こえなかったのだろう。

しかも相手は靄状の体で、物理攻撃は効かないと言つて良い。

そこを指摘し、思いとどまらせようとするが、「うるせえ！」と一括されていた。

「敵の出入り口だろ。塞いどくに越したことはねえ。あの靄の対策も考えてあんだよ」

そんな二人の言い合いを聞きながら、見潜める敵は思わず笑みを浮かべていた。

ヒーロー志望と言えどもまだ子ども。

擬態した己を見つける事もできず話し込む姿は敵にとってはただ愉快極まりない物

だった。

背後から忍び寄り、敵はその瞬間を思い浮かべ悦に入る。

(これで終わりだ……!!)

「……っうかよ」

手を伸ばした敵が攻撃をしかけるために擬態を解いたのを目視した直後、微かな眩きと共に爆豪の個性が発動していた。

「俺らに当てられてんのがこんな三下なら、大概大丈夫だろ」

後に残るのは、黒焦げになった敵の姿のみ。

(……すっげえ反応速度)

瞬く間に行われた攻撃に、内心賞賛を送りながらも、切島はこの数日間の間に知った爆豪のイメージと、現在の様子に齟齬を感じて、つつい口に出してしまう。

「お前、そんな冷静な感じだっけ？」

「はあっ?!俺はいつでも冷静だ!クソ髪!!」

「ああっ!そう!それだあ!!」

端から見れば、まるでコントのような有様だっただろうが、いつもの爆豪の反応に、切島は柄にもなく安堵していた。

立て続けに予想外の事が起こり、混乱していたせいなのかもしれない。

最も爆豪の方はそれに気づくこと無く、素っ気ない態度で突き放した。

「じゃあな。行つちまえ」

そのまま踵を返そうとする爆豪を慌てて押し止めて、切島は硬化した腕をならす。

「待て待て！ダチを信じる……！男らしいぜ爆豪っ！」

にっと、不敵に笑つた男が下した決断は……。

「お前にのつた!!」

できうることなら相澤先生の負担を少しでも減らそうと、彼の戦っていた噴水付近まで、水辺に沿って移動してきた出久達は、そこで見せられた光景に、一様に言葉を失つていた。

「どうだ？こいつが、対・平和の象徴。「フレイア」だ」

そう自慢そうに相澤先生へ声をかける主犯の男に反応する事も無く、「フレイア」と呼ばれた存在は相澤先生の両手足に手足をかけていた。

先生の顔は出久達からは窥えないが、その両手はどちらも、本来ならばあり得ない方向に折り曲げられている。

「緑谷……もうダメだ。流星に諦めたる？」

涙声で震える峰田に、梅雨も心なしか水に半ば潜った顔が優れない。ケロ……と無く声もか細い物だった。

問われた出久は信じがたい光景に声を失い、ただそこにある情景を眺めることしかできないうでいた。

「個性」を消せる。素敵だけどたいしたことないよね」

出久達に気づいていないのか、相澤先生を見つめながら悦に浸る主犯の男は、まるで玩具を自慢するかのようになり、「フレイア」という存在の事をかたっていた。

「元から個性がない存在には、何の役にも立たない……だつてこいつは単なる無個性だもの」

痛みから何度も遠のきかける意識を必死に保ちながら、相澤は男の言葉に驚愕した。

(無個性だと……！嘘だろ!?)

感情が必死に否定しようとするが、確かに既に何度かこいつの体は視界に入っている。

相澤の個性は体の一部が視界に入るだけでも発動するのだから、現状も個性は消しているはずなのだ。

「……………っ！」

ベキツと、今度は指の関節に痛みが走った。

漏れそうになる声を堪え、相澤は必死に分析を続ける。

(こいつは素の力は大了ことねえ……！だが、それをカバーしてあまり有る、オールマ

イト並のスピードについていくことができねえんだ。しかもこの動き、抑え方……場慣れしてやがる……！人を壊すことに、躊躇いがねえ……！！」

相澤がそう考えている間にも、グツと、頭に浮遊感が襲う。奴が頭を持ち上げたのだ。掌が、体がやけに熱い。それが「フレイア」と呼ばれる存在の特徴の一つだった。

持ち上げられた頭はそのまま床へ、一気に打ち付けられて、口の中から溢れた血が、ポタポタと、床の上をはねる。

「死柄木弔」

掠れかけた意識の中で聞き覚えのある声を拾った。奴らの仲間……ワープの個性の持ち主だ。

「黒霧。13号は仕留めたのか？」

死柄木……と呼ばれた男の言葉から、生徒の避難を一任した同僚の姿を思い浮かべた。

（まさか……やられたのか!?!）

思いもよらないほど切迫してしまった事態に焦燥を覚える相澤だったが、それに気にする様子も見せず、死柄木と黒霧と呼ばれた二名の会話は続く。

「行動不能にはできたものの……散らし損ねた生徒がおりまして、一名、逃げられました」

「……は？」

死柄木が、そう零した途端、周りの空気が変わった。

相澤を抑えていた青年には変化が見られなかったが場の空気の変容に相澤は嫌な予感を感じざるを得ない。

「はあー」

力なく、溜息をつく死柄木からは、微かに何かをかく音が聞こえる。

「はあっー」

再びの溜息。だが、ガリガリと零れる音はさつきより也确实に大きくなっている。

「黒霧。お前……お前がワープゲートじゃ無かったら、粉々にしてたよ」

漸く口を開いた死柄木の様子は明らかにさつきまでとは違う。

「でも流石に何十人ものプロ相手じゃ敵わない。……ゲームオーバーだ。……あーあ」

そこでピタツとひきかいていたのだろう音が止まる。

「帰ろっか」

あまりにもあつさりとした、撤退宣言。まるで掴みづらいその口ぶりに飛びそうな意識の中で、必死に思索しようとした時……その声が聞こえて、血の気が引いた。

「帰る……？帰るつって、言ったのか？今」

「そう聞こえたわ」

その声は、自分が受け持つ生徒の声。

(バカな……!?何故ここにいる?!)

この時、相澤は黒霧という敵の個性によつて、生徒達がバラバラにされていたのだという事を知らなかった。大多数を相手にするのが精一杯で、生徒達が受けたアクションにまで注意が回らなかった。

「気味が悪いわ。緑谷ちゃん。」

緑谷と発した蛙吹梅雨の声で、相澤は入学式の日初めて会った個性の制御も満足に出来なかった子どもを思い出す。

(拙いぞ……ここいつらだけで太刀打ち出来る相手じゃねえ……いー)

危機感を相澤が募らせるのも空しく、声を発した事で気づいたのか、はじめから知っていたのかは定かでは無いが……死柄木が、動いた。

「へし折つて帰ろう」

平和の象徴と謳われる、オールマイトへと見せしめとするために。

「本当に格好いいぜ……イレイザーヘッド」

梅雨の顔に五指を当てた男が、忌々しげに振り向いた先では……相澤先生の個性が発動していた。

触れている部分を僅かに減らし、男はイレイザーヘッドを……彼を押さえつける仲間

を一瞥し、続けた。

「フレイア」

その途端、相澤先生にのつていた青年の掌が、相澤先生の頭に添えられ、床へ押しつけられる。

ミシリと、床の一部にひびが入った。

「……っ！」

（ヤバイ……！）

その瞬間、出久の中を支配したのは焦燥感だった。

（ヤバイヤバイヤバイヤバイ……！！）

水難エリアで戦った敵とは明らかにかけ離れた相手だった。

傍にいる二人を……梅雨を助ける！

その一念のみで出久は拳を振り上げ……。

「手え……離せえ!!」

「フレイア」

smash、のかけ声と共に個性を発動させた拳には、確かに何らかの感触があった。

（当たった!）

感触からそう確信を深めた出久は次の瞬間に目を瞬いた。

……キイイイ……ン

次いで耳鳴りのような何かを感じ、一瞬意識を逸らしかけた出久だったが、何故か個性を発動させたにも関わらず、痛みを感じない拳に目を見開いた。

(まさか……折れてない!? 力の調整が、こんな時に!!)

無意識に浮かんだ歓喜の笑み。

初めて上手く決まったそれは……。

「え……」

己の拳を掌で受け止め、僅かに揺れる空洞のような橙色の瞳で己を射貫く無骨な仮面の青年……フレイアの姿に、言葉を失っていた。

(速っ……いつの間に……というか、受け止めた……!)

そこで脳裏に蘇ったのは、水難エリアで梅雨が口にした言葉。

『……殺せる算段が整っているから、連中こんな無茶してるんじゃないの?』

(……まさか)

固まる出久を嘲うように、死柄木は口を開いた。

「良い動きするなあ……smashって、オールマイトのフォロワーかい?」

しかしそれ以上の興味は示さないのか、死柄木は、「フレイア」と次の指示を出す。

「焼き潰せ」

グツと、出久の個性を直撃したはずの掌で、その拳を捕まれる。

ジリツと感じたそれは、勝己の爆破よりもじつくりとあぶるようで、皮膚から伝わるその温度は更に高温だった。

泣きそうに出久は顔を歪めた。

死柄木に再び顔を捕まれようとした梅雨は身を捻りながら、出久を救おうと舌を伸ばす。

体感時間では、何分、何十分と感じたその時。

バァン……!!!

鋭い音と共に、入口が弾け飛んだ。

「もう大丈夫……私が来た!!!」

そこにいたのは、希望の光。

『……傍にいる二人を、助ける!』

暗闇の中で聞こえた声に俺は僅かに意識を浮上させた。

「たす……ける?」

声に出したその言葉は、何故かとても懐かしい気がした。

(前にも……誰かに同じ事を……言った? ような……)

重くなっていく暇負けて、俺は再び意識をおとしていく。

(いつの……ことだっけ……)

思い出せないまま、意識は途切れた。

オールマイト

胸騒ぎを感じたオールマイトが、同席していた校長を振り切り、向かった先で、現在 USJ で授業を受けている筈のクラスの生徒、飯田天哉と出会った。

そこで大まかなあらましを聞いた彼は、雄英高校へ向かう少年と別れ、USJへ乗り込んだのだ。

「もう大丈夫」

本日の活動限界は既にギリギリの時間となっている。

長期化すればそのまま己の、己が守る生徒達の危険に直結するだろう。

己一人の場合は恐怖などない。

己の生徒達に危機が迫るからこそ、恐怖した。

「私が来た!!」

それでも、その恐怖を見せるわけにはいかないのだ。

私は……平和の象徴なのだから。

「オールマイト。ダメです!あの仮面の敵!!」

間一髪の所で、梅雨と峰田と共に助けられた出久だったが、不安を隠せない様子で、敵

達と戦おうとするオールマイトを押し止めようとしていた。

「ワン……っ！僕の腕が折れないくらい力だったけど、受け止められた！きつとあの
人……」

「緑谷少年」

不安のままに続けようとした言葉は、たった一言の言葉で打ち消された。

「大丈夫！」

向けられた、陽気な笑みに何故か安堵を覚えてしまった。

水辺にいた子ども三人を救けるついでに、オールマイトに殴りつけられた主犯の男、死柄木は、外れた腕を拾い上げながら、思ったほどの力を持たないオールマイトに、光明を見いだしていた。

（先生は言っていた。……オールマイトは弱っていると）

どうやら本当のようだ。確信を抱いた死柄木は、手元にあつたレイザーヘッドを奪われて尚、棒立ちのままの木偶の坊に、命令を与える。

「フレリア。オールマイトをやれ」

簡潔な一言。それしかそいつには必要はない。

先生が死柄木に与えたそれは、この状態ならば死柄木に忠実な人形だった。

自発的に行動できないと言う欠陥はあるが。

その言葉を聞くや否や、フレリアは動いた。オールマイトもそれに気づいたのか、生徒を庇うように自ら前に出る。

「CAROLINA」

攻勢に出たのはオールマイトの方が先だった。

「SMASH」

両手を交差させて振り抜く動作で敵に二撃を与える技。その最中にフレリア、と呼ばれた敵もまた動いた。

超高速で動くオールマイトの動きに同調して、交差してある腕に掌を添え、そのまま跳躍。オールマイトの上を飛び越えたのだ。

「ムッ!!」

視界から消えた相手に、一瞬目線を泳がせたオールマイトの隙を見逃さず、背後から腹部へと貫手を食らわせようとする。

「これは……かなりの」

しかし黙って貫かれるオールマイトでも無かった。

「早さだな!!」

相手の位置を目視するやすぐさま反転し、貫こうとする手首を弾き、もう片手で腹部

へと一撃を入れたのだ。

普通の敵ならそこでオールマイトの拳が繰り出す風圧に負け、吹っ飛ばされるだろう。

その間に態勢を整えるのがオールマイトの作戦だった。

「なに?!」

しかし拳が直撃したはずの敵は、吹き飛ばされること無く、その場に留まりあろう事か、己に一撃入れた筈のこちらの拳を片手で掴んだのだ。

「無駄だよ。オールマイト。そいつに自我は無い。あんたにやられる恐怖なんか、微塵も感じないようできてるんだ」

死柄木の声が自慢げに響き渡る。

「なるほど……それは」

彼の説明に言葉を返したオールマイトに、しかし焦る様子はない。

「やりやすい!」

捕まれた手を逆を利用して、オールマイトは敵にバックドロップを繰り出した。ズドンと、上がる土煙はまるで爆発の後のような様相となっている。

それを見ながら出久達三人は、相澤先生を背負い、入り口へと向かっていた。

「何でバックドロップが爆発みたいになってるんだろうな……やっぱりダンチだぜ!

オールマイト!!」

安堵から饒舌に喋る峰田に、梅雨も同意するように静かに言葉を零す。

「私たちの考えすぎだったのかしら……凄いわ」

しかしその中で、出久だけは不安を拭いきれないでいた。

（『殺す算段があるのかもしれない』……たとえ蛙吹さんの言ったとおりだったとしても、今僕らにできることは何もないんだ）

脳裏に過ぎるのは、オールマイトと今も対峙しているであろう三人の敵。

その内の一人に、出久は手も足も出なかった。それが現実なのだ。

（寧ろ……人質に取られでもしたら足手纏い以下だ。敵への憶測よりも……オールマイトを信じるんだ……!）

それがおそろく、今の出久達に出来る最善。

（でも……!）

脳裏に再び過ぎるのは朝チェックしたニュースの内容。敵の襲撃を受ける前、先生達が隠れるようにして話し合っていたこと。

（あの話し合いの中で、13号先生が、ひっそりと立てた三本指は……!）

『私のヒーローとしての活動限界は、今や一日約三時間ほどのさー!』

約一年前。初めてオールマイトとあった日に、彼が話してくれた秘密。その中で出て

きた言葉。

(きつと、使いすぎたとかの話なんだ……本来ならばもう……!)

生徒達の浮かべる安堵の表情と、嘗てのオールマイトの顔が、この時出久には同時に見えた。

『私が笑うのは、ヒーローの重圧。そして内から湧き出す恐怖から、己を欺くためさ』
それは……出久だけが、知っている秘密。

「くっ……!」

凶らずも起きたそれは、事態の硬直を意味していた。

「そういう感じか……!」

歯噛みしたオールマイトは、完全に動きを封じられていた。

バックドロップは、確かにフレイアと呼ばれる敵に直撃した。

しかし、無骨な仮面に罅こそ入ったものの、彼は空いていた片手をコンクリに押しつけただけで、体へかかるはずだった床への衝撃を防いだのである。しかも。

(なんだこれは……!? 離れん……!!)

オールマイトがバックドロップを決めるために利用した敵に捕まれた掌が、まるで接着剤でも付けられたかのように、敵と接合してしまっていた。

敵自身も一向動く気配がない現状は、結果としてオールマイトの方が、動きを封じられることとなったのである。

「コンクリに深く突き立てて動きを封じるつもりだったか?……でも、それで封じられんのはお前の方だ。……良いね。期せずしてチャンス到来だ」

含み笑う死柄木の声に、オールマイトも己に迫る危機に直面せざる負えない。

(……)まで……なのか……(……つ!)

年若い男の敵を前に、己の無力を噛みしめた、その時。

「オールマイトオ!!!」

その声は、響いた。

(緑谷少年……!!)

あくまでまっすぐに、己を慕う声に。

(君って奴は……っ!!)

絶望的な状況は変わらない。それにも関わらず、笑みがこぼれた。

「退っけ!邪魔だあ!!」

オールマイトに駆け寄ろうとした出久の前に躍り出た黒霧を、爆風と共に押さえつけたのは、爆豪だった。

「デクっ!!」

ドンと、黒霧の体を床へ押しつけたのと同時に、パキパキと音をたてて、フレイアの体が凍っていく。

「てめえらがオールマイト殺しを実行する役とだけ聞いた」

床にも広がる氷結に、ギリと無意識に死柄木が唇を噛む。

「……っ!」

咄嗟に気づいて避けた先では悔しげに切島の顔が歪む。

「くっそ! 良いとこねえ!!」

悔しげな様子も隠そうともしない切島は、個性なのか鋭くなった手を構えて、周囲を警戒する。

「スカシてんじゃねえぞ! モヤモブが!!」

啖呵を切る爆豪の掌は依然、黒霧から離れない。

「平和の象徴はてめえら如きにはやれねえよ」

言い切る轟の声はどこか凜としていて。

「かつちゃん……みんな……!」

出会ってまだ何日も経っていないはずなのに、出久の身を包んだのは安堵だった。泣きたくなくなるほどに、嬉しかったのだ……!

「死ぬ気の炎」

(氷結……轟少年か!!)

轟焦凍の氷結は、オールマイトの凍らないギリギリの範囲で上手く調節されていたが。

「……っ！」

(何なんだ！この掌は！これさえなければ今の内に距離をとれるというのに!!)

オールマイトの掌を仮面の敵と結合させているのがなんなのか、冷静に解析できていたのは焦凍のみだった。

(氷……う？だが、単なる氷結によるものじゃねえ……あの敵の個性か?!)

氷を溶かすことができるのは熱だけだ。だが、そこで敢えて、轟は思考を押しとどめた。

(あれは……あの「個性」は使えねえ……！他に何か方法を考えねえと……!!)

「……出入り口を抑えられた。こりゃあピンチだ」

一方、オールマイトは、未だ封じられているとは言え、計四人の幼いヒーローの卵に囲まれた死柄木は、しばし思案にふけた。

己自身が動くのはリスクが高すぎる。

いくらオールマイトを殺せる絶好の機会と言っても、あの態勢ではフレイア自体も、拘束のみで手傷を負わせることは不可能だろう。それ以前に、氷結によつて、身動きを封じられた以上、溶かさなければほとんど役には立たない。

（溶かしたら、おそらくあの氷も溶ける……。でも、四の五の言つていられない）

オールマイトが来るよりも前に、生徒が一人逃げている。元より時間はあまり残つていないのだ。

（思ったほどじゃない。また捕まえられないほどじゃないんだから。……今は）

「その氷を溶かして出てこい。フレイア。出入り口の奪還だ……爆発小僧を始末しろ」

「……!?!」

その異変に始めに気づいたのは轟だった。

「何だ、ありやあ! あいつの個性か!?!」

次いで切島も声を上げる中。ほぼゼロ距離にいるオールマイトには、はつきりとそれが見えていた。

空気と皮膚の間に揺れる、微かな境界。

陽炎が生み出す蜃気楼のようにそれは、ユラユラとフレイアの体を包むように渦を作っていた。

(突然見えるようになった……!?違う……！まさかあれ……!!)

彼らと同じように、その変化を見つめていた出久は、この敵と接触した時の事を思い出し、目を見開いた。

オールマイトから受け継いだ個性「ワン・フォー・オール」を発動し、受け止められた時感じた、ジリツと感じた熱さ。爆豪の爆破よりもじつくりと炙られるかのような痛みを伴う高温。皮膚からだと思つたそれは……。

「まさか……見えないほどの高温で……ずつと体に纏っていたのか……!あの炎を……!?!」

ジユウ……と、音が立つほどの湯気と共に、水が溶けていく。いみじくも、己と類似する個性の持ち主との邂逅に、爆豪も声無く魅入っていた……その時。

フツと、彼らの視界から、フレイアと言う敵は姿を消した。それと同時に、爆豪が居たはずの場所から強い衝突音と、爆風が吹き上がる。

「かつちゃん!?!」

咄嗟に叫んだ出久に対して。

「うつせえ。バカ……喋んな」

掠れた小さな声。それでも間違いないく、出久の幼なじみである男が傍らにいた。

「か……かつちゃん、避けたの?……凄っ!!」

「違えよー！」

反射的に怒鳴る爆豪とて、全てを理解できていた訳では無かった。

何も……見えなかったのだから。

爆発小僧が居たはずの場所を見ると、腕でガードをしたオールマイトの姿があった。

「……加減をしらんのか」

壁際まで衝撃で踏ん張っていた筈の体を押されながらも、余裕を崩さないその姿に、死柄木は苛立つこと無く、冷静に分析する。

（子どもを庇ったか……）

両者の攻防を見ながら、轟は半ば混乱状態に陥っていた。

「ありえねえ……どういふことだ!? これは……!!」

思わず零した声の切迫した様子を、目敏く見つけた切島が誰何の声を上げる。

「あいつの個性……爆豪の炎だけじゃ無い。オールマイトを捕らえて居たのは俺と同じ氷の個性だ。つまり……」

鉛のような重さを感じる口を必死で動かして、轟は動きを見せない仮面の敵を見据える。仮面の敵は騒がしいこちらに目を向けることもなく、ただ主犯の男の指示を待つかのように、オールマイトを吹っ飛ばした地点から動く様子はない。

その姿は、まるで人形のようなようだった。

「氷と炎の両刀……だと?！」

何だよそれ!と声を上げる切島に、次の言葉を告げられなかった。

対極と言つても良い二つの個性の複合型。

切島の言うように偶発的にできるものではないことは、轟が一番よく知っている。

己が同一の個性を持つからこそ。

「……でも、おかしいよ!それなら相澤先生が消せている筈!……それに、あの主犯の敵、仮面の敵は「無個性」だって……!!」

「アホかテメエ!相手の戯れ言を、真に受けてんじやねえよ!!」

疑問を呈する出久を叱責と共に切つて捨てる爆豪に、主犯の男は堪えきれないと言うかのように、クツクツと、笑みを零す。

「何がおかしい……!」

ギロリと睨むオールライトを気にする様子も無く、主犯の男はまるで己の玩具を自慢する幼児のように、高揚した声音で言葉を紡いだ。

「おかしいさ……!そこの……あ……地味な奴。そいつの言葉に嘘はないぜ?それは無個性だよ!傑作だと思わないか?」

くくつと笑いをこぼすその姿は今までの静かさを知る身ならば、むしろ不気味とさえ言えるものだった。

「この超人社会で！無個性として生まれたとしても、ここまでの力を持てる！！これが世間に明らかにされれば、さぞかし面白い事が起きるだろう！！」

悦に入ったかのように言葉を紡ぐ男の顔は窺えないが、無言を貫く二人の敵と比べれば、その饒舌な様子は異常にも感じられた。

「俺はな！オールマイト！怒っているんだ！敵だの、ヒーローだの。個性だと無個性だので、白黒付けられるこの社会を！！」

大袈裟な身振り手振りを加えながら、まるで演説のように言葉を吐き出す姿に、出久達生徒は息をのんだ。

「平和の象徴？個性の中で強い力を持つ、それだけのお前は所詮抑圧の為の暴力装置でしかない！……個性だけで決められる社会には、力しか尊ばれないのだとお前を殺すことで世の中に知らしめる！」

「……めちやくちやだな。そういう思想犯の目は静かに燃ゆるもの」

饒舌に話す男とは対照的に、あくまで静かにオールマイトは言葉を重ねる。

「自分が楽しみたいだけだろう。嘘つきめ」

「……バレるの。早……っ」

追い詰められている筈なのにも関わらず、薄く笑みを浮かべるその姿は、ただ不気味さをましていた。

平然とする死柄木とは裏腹に、黒霧は焦りを覚えていた。

(オールマイトは確かに弱っている。しかしそれ以上に……こちらも使いすぎている)

黒霧が目を向けたのは、フレイア、そう呼ばれる先生から死柄木に贈られた手駒だ。

黒霧も、彼がどのような経緯を経て、先生の手に渡ったのかは知らない。彼の使う力に関しても、分かっているのは先生の呼称する能力名のみである。

死柄木にはあくまで貸し出されているだけであり、持ち主は先生であるためか、反抗は無いわけでは無いが、それを差し引いても、見せて貰った彼の力は絶大なものだった。(何より……生まれながらに迫害される無個性達無個性にとって彼という存在は良い広告塔になる……！)

人という生き物ものは、得てして希望という蜜に弱い。

生まれながらにそれだけで否定されてきた者達にとってみれば、尚更だ。

自分達でも力を持てる。

個性を持つ者達を超えられる。

フレイアの持つ力……「死ぬ気の炎」にはそれだけの可能性があるのだ。

しかし、それだけの価値がある力の使い手でありながら、フレイアはある欠点を抱えていた。

「死柄木……」

その欠点を頭に入れていた死柄木には、黒霧のその一言で伝わったのだろう。

不本意だと言うように、小さく舌を打ってから、「分かっている」と言葉返す。

「フレイア、黒霧。やれ……俺は子どもを始末する」

死柄木が、目を向ける先には、確かに子供達が固まっている場所だ。

「クリアして帰ろう」

そう言い切る直後、命令を受けたフレイアも、一步踏み出す。

しかしその直後……。

前方から発された生々しい気迫に、黒霧と死柄木の体は後退っていた。

かなりの大きさの差違がある二つの拳が、接触した瞬間、ぶわりと風圧が生じた。

間髪を入れずに再び拳を繰り出したオールマイトの拳を相殺するため、フレイアもまた拳を重ねる。

それが……オールマイトの狙いだっただった。

「真つ正面から、殴り合い……!?!」

(生じた風圧に阻まれる……!近づく……!!)

風圧の強さに手で顔を覆う出久の耳に、オールマイトの声が届く。

「敵共よ！君たちの最も愚かな行為は、この子の自我を失わせたことだろう！……戦い方というものは、一番よく知るのは力を奮う当人以外はいないのだから!!」

突風をも、巻き起こしながら続く連打の中で、出久にはその声はやけに鮮明に聞こえた。

「私並みのスピードがあつたとしても、力は私には及ばない！だからこそ彼は始めから！早さを重視した力の使い方をしているのではないのかい!？」

叫んだ瞬間に、風の流れでオールマイトの顔面に赤いものがこびりつく。血を吐いたのだ。

（血を吐きながら……!!全力で!!ただめつたやたらに打ち込んでるんじゃない!）

我が身を省みること無く力を奮う、自己犠牲という言葉ではとうてい済まないだろう戦い方に、出久が感じたのは紛れもなく畏敬の念だった。

（一発一発が全部!!100%以上の……!!）

「ヒーローとは 常にピンチを ぶちこわしていくもの!」

あまりの迫力に、爆豪、轟、切島の三人は見つめる事しかできないでいた。

「敵よ！こんな言葉を!!知っているか!!」

今まで奮い続けてきた以上の力を、その一発に凝縮して、オールマイトは、迷い無く振り下ろした。

「Plus^{更に}」

振り下ろした拳は、敵の仮面を砕き。

「Ultra!!^{向こうへ}」

施設の天井を割り、場外へ吹き飛ばす……それほどの力だった。だが。

「……何っ!?!」

施設の天井に達するギリギリの部分で、敵は踏みとどまっていた。その背後に莫大な量の炎を放出しながら。

「……っっていうか、空、飛んでねえか?」

呆然と呟いたのは切島だけだったが、生徒達が受けた衝撃はどれも似たり寄ったりだっただろう。

「……っ!」

だが、ここで生徒以外にも、この状況のまずさに青ざめた者達がいた。

一人はオールマイト。

(まずい……もう)

土煙に紛れて、蒸気が零れだしていく。

(時間切れだ……!)

そしてもう一人は、黒霧。

大量に放出される炎に隠れて、オールマイイト達には気づかれてはいないが、フレイアの顔色はどんどん蒼白に近くなっている。

(これは……まずい！)

目線を戻すと、死柄木も気づいているのだろう。コリリと首筋をかく。

「炎が尽きる……時間切れだ」

解決

「あの人……俺に嘘教えたのか?!全然弱つてないじゃないか!!」

せわしなく首筋を掻きむしる死柄杓を視界に収めながらも、オールマイトは空中に浮かぶ敵を警戒していた。

仮面を砕いた敵の表情は相手が空中にいるせいか、今ひとつ窺しれないが、それを抜きにしてもリアクションの一つも無いこの現状は違和感を覚える。

(命令がないから動かないのか……?いや、それにしても何かがおかしい……!)

その事に疑問を抱きながらも、オールマイトは、空中に留まる厄介な敵を操る主犯の男達に狙いを定めて、啖呵をきる。

己のこの姿を保てる時間は既に残り少ないが、飯田少年が呼びに走り、おそらく現在、急いでこちらに向かっているであろう同僚達への時間を少しでも稼ぐ為である。

「どうした?来ないのかな?!私をころすと言っていたが……!」

ギロリと、睨むその気迫に、敵が怖じ気づくのが分かった。

「できるものならしてみろよ!」

一方、事の成り行きをただ見ていることしか出来なかった生徒達も、オールマイトの

優勢に胸を撫で下ろしていた。

「どうやら……俺達の出る幕じゃねえみたいだな」

「緑谷！ここは退いた方がいいぜ！却って人質とかにされたらまじいし……」

懸命に説得しようとしてくる切島の視線が次いで空中……未だに橙色の炎を放出し、空中に留まり続ける得体の知れない敵に向いた。

「あいつも、いつまでもあそこでジツとしてくれるって保証はねえんだ」

「空中を飛ぶって能力だけならそれほど脅威でもねえが……もし大砲みたいにあそこから敵を狙い撃ちできる武器でも持っているんなら、面倒だな」

「いや、空中飛ぶってだけでも十分厄介だろうが!!」

警戒も露わに空中の敵を睨みつける切島に対して、鋭いのかいまいち判断の出来ない轟の注釈に、再び切島が切り返す。

そんな彼らのやりとりを尻目に、緑谷が感じたのは危機感だった。

（違う……あれは、虚勢だ!!）

その根拠は土煙に隠れて目立たないが、オールマイイトから変身が解けるときに出る蒸気が出ている事だ。

その事実は端から見ている出久よりもオールマイイトの方がよほど分かっていた。

（いかん……ぶつちやけ、もう一ミリも動けんぞっ……僅かに身じろぎするだけで、

トウルーフォーム
本當の姿に戻ってしまふ……!!)

そうまで追い詰められた原因は分かっている。あのフレイアという敵が予想以上に強すぎたのだ。

(しかし彼は見たところ、奴らの指示が無ければ身動きすらしない欠陥を持っていると見える！このまま、奴らを足止めする事が出来れば……!!)

「フレイアさえ使えれば……！あいつなら何も感じずに立ち向かえるのに……!!」

苛立ちも露わに首筋を掻きむしるが、死柄木も黒霧も空中にいるフレイアを動かすつもりはなかった。

……いや、出来なかったというのが正しいだろう。

「死柄木弔。落ち着いてください」

傍らに寄り添う黒霧が死柄木を宥め、打開策を示す。

「良く見れば、フレイアが与えたダメージは確実にオールマイトに現れている」

次いで黒霧は少し離れた位置にいる子どもを示した。

「子供らはどうやら棒立ちの様子。あと少して救援は来ますでしょうが、フレイアが使えずとも、死柄木と私ならばまだチャンスはあるかと……」

淀みなく、言葉を紡ぐ黒霧に半ばのせられるように、死柄木は何度も繰り返し、頷いている。

「何より……ここまで追い詰めたフレイアの使い損になる……！」

一氣に広がる黒霧と、それに隠れる様にかける死柄木。

表情には出さずとも、オールマイトは、救援よりも速く動いた敵の手にかかる覚悟を静かに固めかけた……その時。

（僕だけが知っている、秘密………!!!）

無我夢中で、動いたのは出久だった。

「な………緑谷!!」

振り返って遙か後方にいた出久に、切島が声を上げ。

（速い………!）

その速さに、死柄木は目を見開いた。

一方、双方に驚愕を与えた出久は、間に合いかけはしたものの、足に走る激痛に、制御に失敗したことを悟る。

（さっきは上手くいったのに……!それでも……!!）

己の負傷よりも、現状を打開できうる可能性を見いだすことを優先し、それ故に出久は歓喜に震えた。

「オールマイトから………離れろ!!」

この間、僅か数秒にも満たない時間。しかし、その決断はあまりにも早かった。

(させるかよ……!!)

ついこの前まで一般市民だった筈の子ども。

彼らによつて悉く計画を狂わされていく事への苛立ち、怒り。降り積もったそれらをぶつける様に、死柄木はそれを命じた。

「殺せ!! フレイア!!!」

ドズン……!

橙色の炎を散らしながら、堕ちていく敵の姿に、最初に喜色を浮かべたのは誰だったか。

「来たか!!」

オールマイトの言葉に答えるかのように、甲高い声はその場に響き渡った。

「ゴメンよみんな……遅くなったね」

入り口付近にいたお茶子とその面々を見つめ、安堵と共に言葉を零す。

「飯田君……!」

「1-Aクラス委員長。飯田天哉!!」

それは、形勢逆転の合図。

「ただいま戻りました!!」

そこに集う多くのヒーローの姿を視界に収め、死柄木は唇を噛んだ。

あの後、先生達の応戦も空しく、ワープの個性によって、橙色の炎を使う敵を含む、三人の敵は取り逃がしてしまった。

その後すぐに本^{トゥルーフォーム}当の姿に戻ってしまったオールマイトと共に、怪我をしていた出久も保健室行きとなった。

「おそらく、私はまた活動限界が早まっただろう……一時間位はまだ欲しい所だが……」
しかし、それは悔やんでもどうにもならない事という事実は零したオールマイトが一番知っていたのだろう。

心配そうに見つめる出久に、敢えて明るい調子で返し、ベットのの上に身を起こした。

「失礼します」

そんな掛け合いをしている間に、保健室に一人の人物が入ってくる。

帽子を取ったその人物は、オールマイトの秘されている筈の姿を前に、平然と彼と認識した。

「塚内君！君もこっちに來てたのか!!」

本^{トゥルーフォーム}当の姿で平然と会話する彼に思わず出久の方が問いかけていた。

「ああ！大丈夫さ……何故って!？」

その次に重ねられた言葉に、思わず相手の方が笑いながら突っ込んでしまうほどだ。

「彼は最も仲良しの警察、塚内直正くんだからさ!!」

「ははっ、なんだ? その紹介」

そのまま政官の職務として事情を聞こうとする塚内を制し、オールマイトが問うたのは、同僚と生徒達の安否だった。

その様子に慣れているように溜息をついて、塚内はその無事を知らせる。

「三人のヒーローが身を挺していないければ、生徒らも無事じゃあすまなかつただろうな」
そう締めくくる塚内に、オールマイトは、否と返した。

「生徒らもまた戦い、身を挺した!!」

あまりにも早い実戦。それを生き残り、その恐怖を早くに知ったその経験は、必ずやプラスに働くと。

「敵も馬鹿なことをした!!」

オールマイトが浮かべたのは、誇らしげな笑みだった。

「このクラス ーAは強いヒーローになるぞ!」

塚内に向けて、念を押すようにポーキングを決めるオールマイトに、塚内もまた、同意するように微笑んだ。

「私はそう……確信しているよ」

ある一件のバー。そこに広がった黒い穴……ワーブホールから出てきた死柄木は、数

発の銃弾を受けていた。

「両腕打たれた……！完敗だ……！！」

屈辱にか、体を震わす死柄木の傍らに、黒霧は回収したフレイアを横たわらせた。

砕けた仮面のしたはまだ幼さを残す子どもの顔。その息は苦しげに荒く、目の焦点も合ってはいない。小さな燻りに近い炎が、額に灯っているが、それは消え入りそうに掠れている。

「フレイアの注・入・量も足りなかった。手下は瞬殺だ……子どもも強かった……」

ギリと、悔しげに唇を噛みしめ、死柄木が唸った先にあつたのは、テレビ画面だった。「平和の象徴は健在だった……！話が違うぞ！先生……！！」

『違うなよ』

テレビ画面から聞こえてきたのは、年老いた男の声。フレイアの持ち主であり、死柄木にフレイアを貸し与えた先生のものであった。

『ただ……見通しが甘かったね』

『ふむ。嘗めすぎだな。敵連合何ていうチープな団体名で良かったわい』

先生と声をかけ合う存在は、その相手を知る者がいれば、ドクターと呼ばれていただろう男のものだったが、それを死柄木は知る由もない。

ギリギリと歯ぎしりする死柄木をよそに、テレビ画面の向こう側にいる声達は、黒霧

に会話の矛先を変える。

『フレイアの調子は大丈夫そうかい？こちらも他にスペアは手に入らなそうだね。そう簡単に壊して貰っても困るのだが』

それに対して黒霧は淀みなく答えた。

「単なる炎切れです。必要最低量を注入して、薬の効果が切れさえすれば問題ないのでしよう？」

『ああ。それだけなら、何度も実験を重ねているから心配は要らないだろう……しかし、30%も注入しているのに、短時間で切れるとは……平和の象徴を嘗めすぎたかな。もう少し、注入量を増やすべきだろうか……』

黒霧と二人に、画面越しに思案する彼らをさして気にする風もなく聞いていた死柄木がふと、何かを思い出したかのように口を開けた。

「フレイアも、確かに早かったが、もう一人、オールマイト並みの早さを持つ子どもがいたな……」

目障りなガキだったと、思う。ヒーロー達の到着がもう少し遅ければ、フレイアに殺させる事が出来たはずなのに。

「へえ……」

それに対して、先生の言葉は興味を持ったのかさえ分からない曖昧なものだった。

『悔やんだって仕方がない！今回だって無駄ではなかったはずだ。精銳を集めよう！じっくりと時間をかけて……！』

テレビ画面の反対側、死柄木の背後では、黒霧が鉄製の注射器をフレイアの腕に刺しているところだった。

『我々は自由に動けない！だから君のような シンボル が必要なんだ』

注射器のピストンが進むごとに、燻っていた炎が煌々と燃え上がっていく。しかし、それとは逆に、体の方はサラサラと崩れるように形が歪んでいった。

『死柄木弔!! 次こそ君という恐怖を世に知らしめろ!』

テレビ画面越しの声援に答えるかのように、死柄木は歪な笑みを浮かべる。

その背後で、フレイアがいたはずの場所には、彼の青年を更に幼くしたような顔立ちの、中学生ほどの幼い少年が横たわっていた。

その少年、吊空^{つりそら} 真黒^{まぐろ}は己に起きた出来事を何も知ることなく、眠り続けている。

この出来事が後に彼にどのような影響を及ぼすのか、それはまだ誰にも分かるものはなかった。

予期せぬ邂逅

USJ襲撃とオールマイト殺害計画は、失敗に終わったらしい。

形が伝聞なのは、俺はその時のことを覚えていないからという理由に尽きる。

黒霧さん曰く、俺の個性を安定して使えるようにするための副作用なのだと言いたが、どこまで本当なのかはあまり考えないようにしている。

(いや、まあほとんど嘘くさいけど……)

大体、自らの個性を安定して使うために、意識が飛ぶなどどこに聞いても聞いたことのない話だろう。

そんな嘘を垂らすだけの黒霧さんと、何故か不機嫌な死柄木。……しかも両手に銃創を拵え治療中。

雄英襲撃の際の負傷だというそれは、何故か俺の腕にも軽く掠めていて。

(俺の意識が飛んでいる内に、何やらせてたんだろう。この人達……)

ふと、そんな疑念はわくが、いつもの事なので意識的に思考から追い出す。

先生の紹介の時点で、彼らの俺に対する価値観など、分かっているはずだった。

『寂しくはない?』

ふと、隣家の女主人の顔を思い浮かべてしまい、俺は慌てて思考を打ち消して、表情を取り繕った。

俺の挙動不審な一部始終を、黒霧さんが見つめていることに、俺は最後まで気づかなかった。

「……………これ」

手当を終え、住処に戻ってきた俺は、ドアノブの所につり下げられているビニール袋を見つけた。ビニール袋には、料理の入ったタッパーがいくつか入っており、小さな紙切れが添えられている。

《作りすぎてしまった余り物ですが、良ければ食べてください。 緑谷インコ》

緑谷、と言うのは隣の家の表札と同じ名前であり、自分宛だろうそれは、おそらく先日会った女主人からの物だろう。

「……………何でこんな」

思わず零した俺の声に答える者はいない……………そう思っていた。

「君は……………」

……………その声を聞くまでは。

飯田君達と駅で別れてから、電車で最寄り駅まで戻ってきた出久は骨折した腕に苦戦しながら通い慣れた家までの道を戻り……………そこで隣家のドアの前に立つ一人の少年に

気づいて、目を見開いた。

(あの人……！)

癖のついたように逆立った赤茶色の髪、それと同色の丸みを帯びた瞳。母の言ったように、己よりも年下なのだろう、小柄な体。

背丈も、瞳の色も身に纏う空気も違うのに。

(似ている……！)

その髪の色と、感情の乏しい瞳が被った。

敵連合。そう名乗った三人の内の一人、仮面を被ったあの敵に。

「君は……！」

相手に向けて言葉を発した直後、バクバクと爆発したように出久の心臓が鳴り響く。背丈も瞳の色も違うのだ。おそらく別人だろうとは思う。しかし、無関係と言うには似すぎている。

(親族か？それが何で家の隣に!?偶然か……それとも……?!)

グルグルと頭の中で思考が回るが、まともな考えは浮かんでこない。これはあまりにも、出久一人で解決するには大きすぎる問題だった。

「もしかして……雄英生？」

言葉に迷う間に、逆に問われたことで、出久は息をのんだ。

(こちらのことを知らない!? 無関係か?……それとも鎌かけ?)

答えられないで黙った出久の目の前で、ガチャリと扉が開いた。

「あら、出久!……に、クロ君っ!」

扉から出てきた母さんは、その少年を目にした途端、明らかに顔を緩ませた。

(母さん……!?)

予想外の出来事に混乱しつつあった出久はその少年の方へ近寄ろうとした母を咄嗟に引き留めてしまった。

「出久? どうしたの?」

キョトンと、こちらを見る母の顔は、何も分かっていないようだ。いや、正確には出久にとて確証はない。

どころか本人で無い可能性の方が現状では高いだろう。それでも、今不用意に母を近づけさせることは出来なかった。

襲撃で重傷を負った相澤先生や、13号先生。オールマイトの怪我をした姿が目につかんだせいかもしれない。

「その……その人は?」

母を押しとどめる為の時間を稼ぐように、尋ねた質問にまるで疑う事無く母は答えた。

「もう出久ったら、昨日話したでしょう？お隣の子よ。吊空^{つりそら} 真黒君^{まぐろ}。クロ君って、呼んで欲しいんですって」

そう続けて母は次にそこで自分達を呆けて見る少年に対して声を上げた。

「クロ君。息子の出久よ。仲良くしてあげてね」

その言葉に少年は何かを思い出したかのように、持っていたビニール袋を掲げて見せた。

「あのーこれっ……！」

出久には分からなかったが、母には伝わったのだろう。フルフルと首を振りながら、にこやかな顔で母は言った。

「良いのよ。食べて食べて。作り過ぎちゃった私が悪いんだから」

どうやらそのビニール袋は母から彼に送ったものらしい。言葉から察すると、中身はおかずだろうか。

「あら？怪我したの？」

普通の会話に思わず胸を撫で下ろしていると、怪我の具合が気になるのか、母がついに少年の元へ近付いていく。咄嗟に引き戻すことも不自然に思えて出来ずに、出久はのろると二人の方へ近付いていく。

「……大丈夫です。掠っただけなんで」

どこか焦ったような少年の声に母の心配そうな声も被る。

「本当に……大丈夫ですから」

まるで逃げるように、少年は扉の向こうへ消えていった。

その怪我が、雄英教師の一人、スナイプ先生が、敵に撃った銃創場所に近いと気づいたのは、その数分後、自室にてオールマイトに相談の電話を入れた直後の事だった。

先生のすることには何らかの意味がある。

それは分かっていたつもりだったが。

「どうなっているんだ……一体……!」

扉を閉め、出入り口を全て確認してから、俺はベットの上で布団を被っていた。

突然体中に走った悪寒にどうすることも出来ず、俺は両腕で、自らの体を抱きしめるかのように包み込んだ。

「……なんで隣に、雄英生がいるんだよ……!」

雄英生というだけなら良い。注意は必要だが、過度な警戒は逆に違和感を持たれる。

しかし。

(あの人の目……俺を見る目が、鋭かった……!)

明らかに、初対面に向けるものではない。何故か分からないが、そう感じるのだ。

(もしかしたら……知られているのか?)

そんなはずは無いとは、言いきれない。

あの当時の記憶は俺の中には無いんだから。

(でもそんな失敗……死柄木が、黒霧さんが……)

……あり得ない事じゃ無い。

ふと、頭を奥で誰かが俺に囁くように聞こえた。

……彼らにとつて、俺は……。

「落ち着け……まだ証拠は無いはずだ。彼らにとつても、俺の使い勝手が良い限り……」

先生は言った、俺は手駒だと。

死柄木は言うだろう。使い勝手の良い道具だと。

(その通りに生きれば良いんだ……そうすれば死柄木は、先生は俺を守ってくれる……)

自らの利益の為に……!)

グツと体を抱きしめる腕に力を込める。大丈夫、大丈夫と繰り返し、まるで呪文のよ

うに唱えていた。

「隙を見せるな……隙を見せなければ俺は……」

(死なずにすむ……!!)

ふと何故か、この時生前の最後の記憶が俺の脳裏に浮かんだ。

辺り一面に広がる白と黒の服の波。

白髪、白服の男の手の中にある拳銃。

鉛玉が己の体に入る感觸と、怖いぐらいの熱さ。

自分を殺した男は……ただ愉快そうに笑っていた。

……憶えているのは、それだけだった。

体育祭編

体育祭開幕

「オールマイト」

雄英高校の会議室で開かれた教師達も交えた会議を終えてすぐ、塚内直正は知己であるオールマイトに声をかけた。頼まれていたものの結果を伝える為である。

オールマイトも、呼ばれた一声で、その内容を予期していたのか、彼以外はあまり使わない仮眠室へと塚内を導いた。

「ゴメンよ塚内君。内密に調べてくれたなんて」

開口一番に謝意を示すオールマイトに、気にするなと笑いながら、塚内は笑う。

「どうせ例の主犯達を調べるために取り寄せる必要はあつたんだから序でだよ。……それに伝えられた特徴を考えても、全くの無関係とは考えられないだろう？」

彼の言うことは最もだが、それでは優先順位としてはあまり高くはなかつたはずだ。それとも、この情報をも精査しなければいけないほど、情報は少ないのか。

（両方かな……）

そう予想するオールマイトに微笑みながら、塚内は調査の結果を知らせる。

「結果はおそらく黒に近いだろう。死柄木達と同じく、個性登録も戸籍も無い。裏の人間だ。犯罪歴も無いからいきなり逮捕という事は出来ないだろうが、このタイミングは気になる。偶然とは思えない」

「……緑谷少年が狙われている、と言うことか」

自然と口調が重くなるオールマイトに対して、塚内も慎重に言葉を放つ。

「狙われているのが彼個人と断定は出来ない」

少なくとも彼らが、襲撃前にヒーロー科の生徒の情報を持っていたとは考えづらかった。

もしそうならば、USJでも、生徒らの不得意なエリアにそれぞれ転移させることも出来たはずだ。

「君と緑谷くんの関係を知っている者はごく僅かだ。本来ならばその緑谷くんの元にピンポイントで、敵を送り込むことなんて、出来ない筈なんだが……」

現状は起きている可能性がある。

(……彼らの中に裏切り者がいるとは、思いたくないが)

オールマイトは自然と、己の秘密を共有する面々の顔を思い浮かべていた。

塚内もおそらく分かっているのだろう。溜息を零しながら、まだ確証はないさと、続ける。

「監視を置くよ。それと……校長には知らせておいた方が良い」
「分かった」

大事な後継者が、家族を抑えられているかもしれない。その不安で、オールマイトの動きは重い。

「あまり思い詰めすぎるな。それが奴らの作戦と言う可能性もゼロじゃ無いぞ」

そう元気づける親友に、オールマイトは力なく頷いた。

そんな会話から二週間あまり……雄英体育祭は、始まろうとしていた。

「雄英体育祭？」

近頃もしかして俺はこの人に行動を張られているんじゃないだろうか、思うときがある。

実際は学校に行っていないなくても、俺の行動は死柄木達の呼び出しが無い限りほぼパターン化してきているから、分かり易いと言う理由だけかもしれないけれど。

平和の象徴と言われるヒーローオールマイトとその親友が、俺に対してあのような不穏な内容の会話などしていたなど知る由も無く……そもそも、監視を置かれてたことさえも気づかぬまま、俺は代わり映えのしない日常を……言い換えれば平和な平穏の時間を過ごしていた。

「何ですか？それ」

俺の言葉は予想だにしていなかったのか、インコさんは驚いた様子で俺に問いかけてくる。

雄英体育祭を知らないのか、その言葉に俺は迷うこと無く頷いた。

(いや、文面通りならば予想はつくんだけど……)

そう考えて、しかし俺は首を傾げた。

高校の体育祭が、どうしたというのだろうか？

「あ……出久君が出るからですか！」

己の息子の晴れ舞台だからこそ、見に行こうと言うことだろうか。しかし、それなら雄英高校へ向かう必要があるだろう。何故家の中へ上がらないかと言う話になるのが分からない。

「クロ君。本当に知らないのね……」

俺の様子に納得した様子のインコさんが、何故か張り切った様子で、俺の肩を優しく叩いてくる。

「じゃあ、おばさんと一緒に見ましょう！きつと楽しめるはずよー」

確かに、実の息子の活躍を一人で見るのは寂しいのかもしれないが。

(学校行事が……何でテレビ放送されているんだろう……?)

この時俺は本当の意味での、雄英体育祭を理解していなかったのかもしれない。

雄英体育祭。それは個性が発現したことにより、形骸化したオリンピックにかわり、現代日本においては、嘗てのオリンピックと同等とされる、国民的イベントである。

「……でもその実態って、スカウト目的のプロヒーローによる品評会ですよね」

(いや、それ言っちゃあ元も子もないけど)

そう思いながらも、それでも一つの学校の体育祭が、オリンピック扱いされている事にはどうも違和感を覚えてしまう。

(学校行事って言うんならもう少し健全な方法でやれば良いのに……)

現場まで見に来る相手は全て企業若しくはプロヒーロー。まだ親離れしていない筈の子供達が下手をすれば怪我をするかもしれない戦いに歓声を送り、子どもを庇護すべき親はテレビ越しにしか見守る事さえ出来ないと言う現実。

(ヒーローを目指すなら仕方ない、のかなか……)

ふとそんな言葉が浮かんでくるが、出来るのならば同意したくは無い言葉だった。

ヒーローだから、そんな理由で危険に飛び込む人間を黙ってみている事は賛成できない。
い。

(いや、俺の意見なんて、誰にも求められてないんだけどさ)

出来るのならばテレビでさえもあまりみたくはないのだが、乗り気なインコさん相手にやはり帰ります等と、言うことはもう出来そうにない。

溜息を呑み込んでインコさんと並んでテレビの前に座る。

(なることなんて出来やしないけど、なれたとしても、俺はヒーローにはなりたくないな)

広告が明けて、歓声と共に映像が動くのを見ながら、俺が己の内ですら結論を出したとき。

『お前はヒーローになんてなれねー男なんだぞ』

空耳か、誰かの声が聞こえた気がして、俺は辺りを見回した。

「クロ君？」

問いかけてきたインコさんの声で、俺は漸く彼女に視線を戻す。部屋の中にはやはり、俺と彼女以外、誰もいなかった。

《「せんせー。……俺が1位になる」》

テレビからは、何とも不遜な選手宣誓が行われていた。

「……いえ。何でもありません」

慌てて、そう言い繕ってから、改めてその生徒……爆豪勝己と名前が表示されている。……を見ると、ツンツン頭につり目と、何よりもさっきの宣誓のせいかな、優良生徒とは間違つても言えない空気を醸し出している。

(明らかに不良……うーん)

確かにあの見た目でスポーツマンシップに則って云々と言われても、それはそれで嘘くさいだろうが……。

(ああいうの見て子どもが真似するようになったら……つて)

ヒーローでもその危険性はあるのかと、思い至り、あくまでも現場主義なやり方の学校に、実力主義な社会に溜息をつきたくなる。

「絶対ただじゃあ終わらないよなあ……」

再びついたその溜息は、何を思っているものなのか、考える気にもならなかった。

ただ、ああいう感じの目は嫌いじゃない。何故かは分からないがそう思った。

第二種目

本当にただじゃ終わらなかつた……。

雄英体育祭の放送が始まって、数十分弱。悲鳴をあげ、涙を流すインコさんを宥めながら平静を取り繕ってみていた俺だが、流星に叫び出したい衝動に襲われていた。

(あれ? 学校行事って、こんなに危険なものだっけ??)

第一種目。障害物競走で次々と生徒がゴールする映像を見ながら、俺は出てきた障害物という名の危険物の羅列に目頭を抑えた。

巨大ロボット。崖の上の綱渡り。地雷原。

一つ一つは確かに危険度は少ないが、問題はそれにプラス、生徒間でなら個性を使った妨害が可能という点だろう。

いくらプロヒーローが教師として監督していると言っても、いくら治療に特化したリカバリーガールというプロヒーローがいると言っても、甘いとしか言いようがない。

(一人一人が個性を持つ現代では、人を殺すのは考える以上に容易いのに……)

そのような事故が起きたら、どう対処するんだろう。

「いや……入試の時点でそういう危なそうな者はおとすのかな?」

大体本当に危険なものをかぎ分ける鼻は鋭いだろう。でなければ、何を持ってヒーローというのか。

(でも本当に危険な存在って……そういう匂いさえさせないんだけど)

ふと俺の頭を過ぎったのは、数日前に思い出した死の瞬間の記憶……男の愉快そうに笑う顔。

(変だな……。今まで思い出す事なんてなかったのに……)

死の瞬間の記憶はあまり思い出したいと思うものではない。それなのに先日から前触れも無く、断片的とは言え嘗ての記憶が脳裏に思い浮かぶようになっていた。

(その前後に何かあったって言ったら……あれしかないけど)

それは死柄木の計画した襲撃と、その同日の夕方にここにいるインコさんの息子に会ったこと。

(緑谷、出久……)

障害物競走で一位をとった彼の第一印象は、何故か怖いと言うものだった。

あの玄関先でのあの一幕で何故そう思ったのかは俺自身分からなかったけど、今日この体育祭をみて彼の怖さを断片的にはあるが理解できる気がした。

(この子は……己の命を軽視しているのでは無いかと思ってしまうんだ……)

それだけが理由とは言えないが、おそらくそれは理由の一環だろうと思う。

綿密な計算を行っているのだろうかとは分かる。

しかし彼は危険に直面した時の、この年頃の子どもが誰もが持っている筈の迷いというものが極端に無いのだ。

(本当に……何なんだろう)

改めて俺はテレビの上部に映る、彼の姿を見つめていた。

(この子は……とても危うい。とても……)

そこがとてもこわい。心からそう感じた。

第二種目。騎馬戦。一種目目の結果を反映されたポイントを合計した数をそれぞれの騎馬に振り分け、より獲得ポイントの多い上位のチームが第三種目目に出場出来る。そこまでのルールはまだ良いが……。

「第一位……一千万……？」

何という鬼畜。血も涙も無いとはこういうことを言うのかと俺は怖気を感じていた。

雄英の校訓「Plus ^更 Ultra ^向」は伊達では無いということか。

壁を越えた者ほど、大きな壁に迎えられる。それを乗り越えるだけの精神を持つものだけが、在籍を許されるとは。

(人外魔境……！)

心の中でそう毒づく俺の周りには、くしゃくしゃになったティッシュの山がそこらか

しこに出来ている。

そしてその山を今も作り続けている当人は窮地に陥っている息子の活躍に嬉し泣きしていた。

「凄いよ！クロ君!!一位よっ!!出久ううっ!!」

抱きついて来るインコさんに若干引きそうになりながらも、何とか彼女の溢れんばかりの大量の涙を拭っていく。

「さあ、十五分間のチーム編成兼作戦タイムもいよいよ終了!……おい!起きろ!イレイザーヘッド!!」

何とか溢れ続ける涙をせき止め、一息ついた時、どうやら騎馬戦の為のチーム編成の交渉は制限時間を迎えたらしい。

「なかなか……面白いチームが揃ったな」

解説席にいるのは、明らかにそちらが本業だろうと突っ込みたくなる見た目口調すべからく須くラジオマンな男と、何があったのが、体中包帯グルグル状態のミイラ男。

(あれ?あの二人って、どちらも先生なんだよね?)

俺の知っている先生のイメージは、「先生」だけの事も相成り、どうも教師という風には見えない。

(恐ろしさが無いよな……取っつきやすいって感じで)

最もヒーローという職種ならば、それはどちらかと言えば長所になり得るのだろうが。

「今！狼煙を上げる!!」

テレビ画面越しであっても伝わる盛り上がっていく熱に当てられるように、涙声でインコさんも息子の名前を呼んでいる。

皆が心一つにして盛り上がるこの歓声の中で、己だけが置き去りにされているように感じて、俺は僅かに視線を下げた。

しかし胸に去来した感情を理解する前に……。

「スタート!!」

第二種目は始まった。

この競技に歓声が返される理由は分からない。

そして嬉し泣きで浸水を起こしそうなインコさんの心情も間違っても理解できるとは言えない。

「インコさん」

グジグジと涙を拭う彼女に、俺は気づけば問いかけていた。

「何で出久君を、雄英高校に入学させたんですか?」

テレビの向こうでは、十二組の騎馬による激闘が繰り広げられていた。

火花と土煙。異形の個性や、攻撃に特化した個性。様々な力のぶつかり合いにより、フィールドは変形しており、未だ怪我人が出ないのが不思議に思えるほどだった。

「クロ君？」

俺はただならぬ雰囲気でも出していたのか、自覚は無いが、インコさんは驚いたように目を見開いた。

「心配なのに、何でヒーローなんかにしようって、思ったんですか？」

たとえヒーローになりたいと志しても、たとえなれるだけの努力や、なり得るだけの強力な個性を持つていようとも、彼らは子どもだ。

大人である彼女ならば、簡単に阻むことは出来るのである。

学費を入れなければ学校には通えないし、先ず家から出さずに監禁し続ける事も出来るだろう。

片親ならば、それは更に容易い。

(先生ならきつと、迷わずにそうする……)

いやと、俺は意識して思い直した。

(あの人は……そうした)

死の瞬間と同じように近頃思い出すようになったのは、今生の、目が醒めてから今までの記憶だ。最もそれもまた断片としてのものが多いが。

先生とドクターと俺しかいない場所。

現実としては、外へ出ればそれ以上に人はいただろうが、ここへ入れられるまでの俺が見ることの出来る場所には、真実彼らしかいなかった。

彼ら以外の存在を何一つ教えられなかった。

戦う術を学んだわけでは無い。個性の使い方も、そもそも己が個性を持っているか否かも俺は分からない。

あの場所で彼らに教えられたのは、実際の所たった一つしか無い。

「クロ君……!?!」

肩を揺すられる衝撃に、俺は目を開けていた。

いつの間に閉じていたのか。そもそもどれほど思考の中に沈んでいたのかはわからない。

しかし、目の前にはインコさんの心配げな顔がドアップで映っていた。

「そろそろ時間だ！カウント行くぜ！エヴィバディセイヘー！」

テレビからは聞こえるカウントを聞き流しながら、俺達はただ無言で見つめ合っていた。

「タイムアップ!!」

その声でわあつと更に高まる歓声を背景に、インコさんの声が小さく聞こえた。

「クロ君。 出久ね」

「二位！」

テレビ画面の音が被さり聞こえづらくも有る中で、俺の耳は正格にその情報を拾っていた。

「無個性だったの」

「轟チーム!!」

高い調子の解説と観客の歓声とは異なり、インコさんはまるで泣き出しそうな顔で、テレビ画面を見つめていた。そこには今、一位通過を果たした一組の騎馬が映し出されている。

「……無個性って」

言葉としては俺も知っている。

生まれつき、何の個性も持たない常人。

今でも人口の約二割を占める彼らは、現状差別の対象ともなっていると聞く。

個性は現在では、親から子へ受け継がれるものがほとんどであり、その中でも片親の個性をそのまま受け継ぐことが最も多いとされている。

その次に多いのが、両親の個性が合わさって、新たな個性として生まれる複合個性である。

どちらが良いかに関しては甲乙つけがたい所ではあるが、どちらにしろ個性であることには変わりはない。

「あの子はヒーローになるのが夢だったのに……個性が無いと、ヒーローになることは難しい……それでね。私は出久よりも先に、出久の夢を諦めてしまったの……」

まるで懺悔のように続けられたインコさんの言葉の後ろで、場違いとなったテレビの音が騒がしく奏でられている。

「以上四組が最終種目へ……進出だあ〜!!」

一段と激しくなる歓声の画面の中には、俺も数日前にいちどだけ会った、インコさんの息子、緑谷出久が映っていた。

流れる涙の勢いだけで地面をめり込ませている姿は、ここでティツシユの山を次々と作り出していたインコさんの姿と似通う部分があり、確かに二人は家族なのだと確信させられる。

そんな現実逃避じみた考えにぼんやりと浸っていると、インコさんがズズツと、鼻をかむ音が響いた。

コマーシャルに入ったのか、一気にテレビの音量が小さくなる。

「ゴメンね。若い頃から涙もろいの……」

笑い混じりにそう続けた彼女に、俺は何も言えなかった。

「あの……」

「ごめんなさい。もう良いです。そう申し出ようとしたのがニュアンスで伝わったのか、インコさんがそつと俺の肩に手を置いてくる。」

「ごめんなさい。クロ君。……最後まで聞いてくれる?」

そしてインコさんは、俺にこう続けた。

「出久を心配してくれて……ありがとう」

その言葉に俺は息をのんでいた。

(違う……!)

真つ先に脳裏に過ぎったのは、そんな言葉だ。俺は彼の心配をしたわけではない。

しかしそれを否定するよりも前に、インコさんは口を開いていた。

「確かに出久は、見ていて危なっかしい所もあるわ。私もわかつているの。……でもね。止めようとは思わない。だって出久は子どもの時からの夢を、無個性だからって、私が諦めてからもずっと諦めずにここまで来たんだもの。だからこれからは、手放し全力で! 応援しようって決めているの!!」

誓いを立てるように、言い切るインコさんの声は、どこか晴れ晴れしているもので。

「でも私、失格かもしれないわ。保護者としては。止めるのも一つの道かもしれないけ

ど」

しかし、止めたくは無いのだと。言外にそう伝えられた俺には、もう立ち入る術は無
い。

(最初から、お節介だったのかも……)

何であんなことを言ってしまったのか、今となってはわからない。……正直に言え
ば、さして考え無しに言った言葉であつたけれども。

(必要なかつたよな……)

そう考えると、ここにいること自体が場違いな気がして、俺は席を立つた。

「クロ君？」

どうしたのと顔にデカデカと書いているインコさんに、思わず笑みを零しながらも、
辞去の意を告げる。

用事があつたのだと告げると、名残惜しげな様子ながらも、引き留めないでくれた。

「すみません。せっかくの第二種目なのに……ろくに見られなかつたでしょう？」

暗に先刻の事を謝れば、彼女は朗らかに笑みをうかべる。

「大丈夫よ。録画はしてあるから……よければ出かけ先でも見てあげて。家電屋さんと
かだと今日は、どこもこのチャンネルだと思ふから!!」

暗にそれだけ視聴率が稼げるということなのだろうか。

その真偽はわからないまま、俺は自分の住処へと戻っていった。

それに気づいたのはドアを開けた直後だ。

物音は一つもしない。しかし何故かわかった。……空気が違う。

そのまま黙って進むと、開けたリビングルームの場所で……同じ間取りである緑谷家ではちようどテレビが置かれていた部屋で、その探し人は寛いでいた。

「不必要な外出は控えるようには、命令されていませんでしたか？」

そう呟くように尋ねたのは、あの襲撃の日以来の邂逅となる、黒霧さんで。

「……電話で無いとは、珍しいですね」

無断侵入されていたことも加え辛辣に返すと、やれやれと肩を竦める動作を見せてから、微かな笑い声が部屋を満たした。

「傍受をされる可能性が有ったので、直接ここへ転移しました。今から移動を。先生からの要請です」

言われた言葉に俺は黙って頷く。逆らおうとは考えていない。……それが出会ってから今日までの間で、たった一つだけ、教え込まれた事だったからだ。

「ヒーロー殺し。そう呼称される人物を、連合に迎え入れます」

グワリと、俺の体を黒霧さんの個性が包む。そのまま俺は……住処から消えた。

自覚

久しぶりに尋ねたそこにはいると思われた姿は無かった。

「死柄木は？」

思わず俺を連れてきた黒霧さんに尋ねると含み笑いで、「気になりますか？」と尋ねられた。

「黒霧さんを使って俺を呼んでおいて、呼んだ本人は出てこないんだなって、苛ついただけだよ」

わざとらしく顔を顰めて見れば、俺の演技などお見通しなのか、微かな笑い声を上げて、黒霧さんは答えた。

しかしその内容はこちらにとっては思いもしないもので、そもそも俺の欲した答えでも無かったが。

「先ず始めに、貴方を呼んだのは死柄木ではありませんよ」

目を眇める俺を見て、黒霧さんは続ける。

「言ったはずです。先生からの要請だと」

「俺を簡単に動かすための方便じゃなかったんですか？」

諺を交えて、嘘だと思っていたと遠回しに告げると、黒霧さんは苦笑を零したように感じた。……実際に見えることはないが。

「心外ですね。我々は仲間である貴方に嘘はつきません。……たとえ貴方はそうでなかつたとしても」

含みのある黒霧さんの言葉に自然と俺も眉を寄せる。

「俺が先生に逆らうと?」

そんな事は出来ない、彼らも知っていると思っていたが。

「……いえ。ですが、貴方が逆らい、裏切ろうとする自覚が無くても……無自覚にことに及んでいるのではないかと思っただけです。あの……隣家の住人などには特に」

思わせぶりな口調で発せられた言葉に、俺は黒霧さんを鋭く睨みつけた。

「……あそこに雄英生が住んでいたのは俺だつて想定外ですよ。第一俺の住処を整えたのは先生の筈です」

「それは分かっています」

幼子の癩癩を宥めるかのような黒霧さんの口調に俺の苛立ちは増していく。しかしその俺の様子には頓着する事無く、彼は続けた。

「ですが……必要以上になれ合うことなどあつてはならない。現に……貴方の近辺には監視がついているようです」

「監視?」

そこで俺は、ここに来る前に家の中で、傍受云々と黒霧さんが言っていたのを思い出した。ついで、一度会った時の、出久の驚いたような表情を。

「心当たりはありませんか?」

思案する俺に被せるように尋ねる黒霧さんに俺は迷うことなく首を振る。

「あの家の住人とかかわりは単なる近所つきあいだけです……切り捨てると言うならそうしますけど?」

変に疑われるよりは切っておいた方がよっぽどマシだ。そう思つての問いだった。俺からしたその提案は黒霧さんからすれば意外だったのか、興味深そうにこちらに視線を向けてから、フムと一言言葉を零す。

悩む彼の思考は分からないが俺としては別に構わないと言つたところだ。

(成り行きで続いていただけで、喜々として付き合っていた訳じゃ無い……寧ろ、口うるさいとも言えるほどのあれは、少しだけ)

己に対して、言い聞かせるかのように続けた思考は、しかしそこで途切れてしまった。ズキンと、心の奥で何かが痛みを訴えているように感じたからだ。そのほんの僅かな感覚に俺は息を?んでいた。

「……ではおねがいます。こちらとしても、少しでも危険は減らしたいので」

黒霧さんはオレの異変に気づく様子もなく、事務的にそう言いきつてから背を向ける。彼からすれば、ここからが本題なのだろう。

俺としてはもう立ち去りたい所だった。

「……ヒーロー殺しでしたっけ。アテはあるんですか？ どうやって探すんです？」

ここへ連れて来られる直前、黒霧さんが言っていた名前を思い出してオレが尋ねると、黒霧さんは関東近郊の日本地図を広げていた。

「アテはありません。彼は神出鬼没。自らの掲げる理念の為に、彼の意にそぐわないヒーローをその資格無しとして排斥する人物と聞いています」

黒霧さんの説明に、自然と俺の表情は険しくなる。

(なにそのかなりの危険思想……)

彼の理念とやらは、黒霧さん達も詳しくは知らない……死柄木に至っては興味もないらしいが、先生の提案故連合には迎え入れるとのこと。

「それで、具体的にどうやって探すんです？」

再び問いかけた俺に差し出されたのがさっきの地図である。

その日俺は、俺自身も知らなかった俺の中の力の一端を、身をもって実感することとなった。

それが、俺自身の意識を大きく変えたことに気づいたのは、その結果をこの目で見て

しまった後だったけれども。

(クロ君……お泊まりなのかしら?)

体育祭翌日。新聞を取りに玄関先へ出てきたインコは、昨夜隣の家のドアノブにかけておいたビニール袋がそのままになっているのを発見した。

(連絡先も知らないし、聞いたのも用事があるってだけけど……)

それでもここへ越してきてから、知っている限りでは、一度も外泊などしていなかった少年の突然の行動に、インコは僅かな不安を感じていた。

(一人で何かトラブルに巻き込まれたとかで無ければ良いんだけど……)

両親が共に暮らしているのなら、インコもここまで彼を気にする事は無かつただろう。

しかし現実には、彼の面倒を見てくれる両親……それに値する大人は彼の身近にはいないようだった。

それならばせめてと、己が親代わりになろうと思ったのは、以前彼や、出久に打ち明けた気持ち根底にあるのは確かだ。だがそれ以上に、彼の様子を見てみると、どうしても脳裏に「育児放棄」という言葉が過ぎるのだ。

別段お金に困っているわけではないだろう。家の中を見たことは無いが、綺麗な服を毎日着ていることから、必要な家電用品も揃えられてはいる筈だ。

しかしインコはそれ以上に、人の温もりが彼には必要だと思っている。

始めにあつた時のあの目は息子である出久に似ていて……それを口実にして、彼に関わってきたが、時折彼はこちらのやることにどう反応すれば良いのか分からない。そんな素振りをするところがある。

本来なら両親や友達、周囲の者達との交流の中で自然と身につくはずの知識が、彼には圧倒的に不足していた。

(いけない！そろそろ朝ご飯の支度してしまわないと……！)

新聞を持ったままの格好で物思いに耽っていたインコは慌てた様子で玄関を閉めようとした。

昨日雄英高校が体育祭だった影響で息子の出久は振替休日である。

しかし去年から始めたトレーニングの影響で休日でも早起きの癖がついたのか、出久の朝は普段通りだ。

体育祭の第三種目中に負った怪我が原因で、出久は利き腕が不自由になっているので早めに支度をして手伝った方が良いかもしれない。

(……あー昨日かけておいたビニール袋、どうすれば良いかしら?)

インコが知らなかっただけで知り合いの家が近くにあるというのなら、おそらくそこで朝食まで食べてきている可能性はある。そうでなくても、あのビニール袋は昨日の夜

からずつとあそこに置いたままになっていく代物なのだ。

中身とて、すっかりきめていくだろう。

(朝)飯はそんなに手の込んだ物を作るつもりはないし、作ってからも一度外へ出た方が良いわね。もしかしたら、その頃にはクロ君も帰ってきているかもしれないし……)

そう心に決め、インコは心なしか早足で台所へ向かう。

出久が起きてくるまで、後数分と言った所だった。

「……これは」

掠れた声で漏れ出た呟きに、答える者などいない。

平日とはいえ、まだ日は早い。寝ている者も多い時間だろう。

ドアノブにかかっていたビニール袋の中を覗くと、いつものように食料の入ったタツパーと、紙切れが一枚。

昨夜の内に、かけたのだろうか。

「何でこんな……」

その時、俺が呟いた言葉は、何の因果か、最初にこのような贈り物を貰った日……死柄木達と、USJという施設を襲撃し、出久と玄関先で鉢合わせた日と同じものだった。

それに気づいて俺は、堪えきれなくなった涙を溢していた。

「っ……うっ……!!」

ぐしゃっと袋を握りしめた場所から、歪なしわができあがっている。だが俺にそれに構う余裕はなく、ただ声をたてないように唇を噛みしめるのが精一杯だった。

胸に迫り上がってくるこの感情が何なのか、俺にはよくは分からない。……いや、本当は分かっているのかもしれない。

『必要以上になれ合うことなどあつてはならない』

そう俺に喚起した黒霧さんの言葉の意味は、今なら分かる。

(少なくとも、俺は……彼らからすれば大事な手駒で)

『何故、俺がここにいと分かった……?』

ギリリと目を向けた殺人鬼……ヒーロー殺しの言葉が、俺が黒霧さんに言われて行った、荒唐無稽なやり方が実際に彼の所在地を割り出してしまったのだというこの上ない証左だった。

(これからの行動には欠かせない……重要な道具だ)

俺のこの力は、黒霧さん曰く「個性」ではないのだと言う。

ならば一体何なのかという俺の問いかけに、黒霧さんは答えなかった。彼も答えられなかったのかもしれない。

自分の住処を見破られたヒーロー殺しは、こちらの話に興味を持ったのか、時間をお

いてから改めて落ち合うことを選択した。次は死柄木も交えて。

黒霧さんからすればあれは自分達の自己保身から出た言葉なのだろうが、俺からすればこの言葉の意味合いは大きく変わる。

『必要以上になれ合うことなどあつてはならない』

そうだ。なぜなら。

(緑谷出久はヒーローで、俺は敵だから)

たとえ俺が否定しようとも、俺の目の前にいるヒーロー志望をいつまでも野放しにしてくれるほど、先生は甘くない。

それは俺と積極的に関わろうとするインコさんにも言えること。

(先生に目をつけられたら殺される……いや、あの人のことだから、最初から出久達を殺すために俺をここへ入れたのかもしれない)

普通ならば、どうやってというだろう。少なくとも契約当初は、まだ雄英高校の結果は出ていなかった筈だ。未来の雄英高校の一年生の特定など出来るはずはない。……俺の力が無ければ。

「……っ！」

ギリツと、唇を噛みしめた。先生がいつ俺の力を使ったのかは知らない。いつ知ったのかも。

分かるのは今日俺が知った力……その効果のこと。

広げられた地図の上で、指を這わせた瞬間、気になった町の名前と、ヒーロー殺しが
出た町が同じだった。それだけなら単なる偶然で済ませられた筈なのに、次の黒霧さん
の要求は時間で。

何時に事件は起きるか。分からないとしか答えようのない情報だと思っていた筈だ
が、時計を睨んでいた俺の口は自然と一つの時刻を口ずさみ……その事件はその時間
に起きた。

「予知能力、なんですか……？」

その俺の問いに、黒霧さんは含み笑いだけで、答えてはくれなかった。

そのまま、俺はこの建物の付近までワープで戻された。

「必要となったらまた部屋まで飛びますので」

暗に部屋の中で待機しろと言う黒霧さんの言葉に、俺は苦笑した。

(言われなくても……あそこを尋ねることなんて、もうしないのに……出来るわけない
のに……!!)

子どもの泣き声を聞いた気がして、出久は目を見開いた。この家には子どもはいない
筈なのに、耳元で泣かれたかのように、やけにはつきりとしていた。首を傾げながらも
起き上がると、良い匂いが漂っていることに気づく。

(母さんかな?)

ふと、そう考えながらもゆっくりと着替えを済ませ、台所へ向かおうとすると……ピニール袋を持つて玄関を出ようとする母さんの姿が目に入った。

(……また、か)

それを認めた出久は、自然と溜息を溢していた。

「あら出久。おはよう」

玄関を出る前に廊下へ出た己に気づいて、母さんが笑顔を向ける。

だがその顔には幾ばくか疲れが見えていた。

(もしかして、寝てない?)

その事に目敏く気づいた出久は、彼にしては珍しい僅かに苦い顔となる。

気の小さい母の今回の不眠の原因は、出久にも分かっていた。隣の部屋に住む、吊空

真黒が昨夜から帰っていないことだ。

母さんが最後に彼と会っていたのはちょうど出久が体育祭に出場していた時だという。出久の活躍を第二種目まで共に見たと言っていた母の、彼に対する警戒心の無さには、思わず出久は目を覆いたくなった。

(母さんが気にすることじゃないのに……!)

今回のことに関しては内心どこか腹立たしい思いで出久は母を見つめていた。

出久からすればこの事はそこまで心配にすることではない。寧ろ、警戒すべき行動ではないかとさえ思う。

なぜなら相手は、敵連合と、ひいてはオールマイトを殺そうと企んでいたあの敵達と？がつているかもしれない超危険人物なのだ。

報告を聞いたオールマイトが、すぐさま警察に相談することを決めるほどの、すぐさま監視が敷かれるほどの、超危険人物。

その事を心の中で再度思い起こし、警戒を強める出久ではあるが、その考察は少しばかり、行動を起こしているオールマイトや塚内の思惑とはズレていた。

彼らが動く理由は吊空真黒個人の危険度と言うよりも、未だに尻尾を掴ませない敵連合に？がるかもしれない重要性や、敵連合に対する危険度からなのだ。

しかし、それを知らされることのない出久は愚直に彼への警戒心を強めていた。

そんな出久は昨夜の内に、吊空真黒が帰っていないことをオールマイトに報告した。しかし彼らが動いた様子はない。

オールマイトの話では証拠が無いから捕まえる事は出来ないのだという。

冤罪を防ぐためにも、敵は基本実行犯で無ければ逮捕は難しいという不文律がある。現状はそれを上手く利用されていると言っても良かった。

(注意しなくちゃ……また敵連合が動くようなことになったら……)

クラスの誰にも明かすことは出来ないものの、出久の中の危惧は消えることは無い。そんなもやもやとした心地でいた出久は玄関先から聞こえた母の声で意識を取り戻した。

「クロ君！出てきて!!ちゃんと話ししましょう!」

焦りを含んだ声音の中に出てきた名前に、出久は一も二も無く駆けつけていた。

玄関を開けた先には声を殺して泣く子どもがいた。

思いがけない姿に、取りあえず話を聞かなければと駆け寄ったインコに向けられたのは拒絶だった。

気を高ぶらせる子どもを落ち着けようと声を落とそうとしたインコの横に駆け寄ってきたのは息子の出久で。

「……っ！待って！クロ君っ!」

彼を認めるや否や駆けだした彼は、己の部屋へ駆け込み、そのまま扉を閉ざしてしまっただのである。

「クロ君！ねえっ!」

声を上げるインコに、子どもは鋭い声で言い放っていた。

「おねがいますー……もうっ……!!」

その声に、背後にいた出久が息を？んだことを、扉に継るインコも、その言葉を発した子どもも、気づく事は無かった。

「もう俺に……関わらないで下さい……!!」

その涙声を、出久は知っていた。

(どういう、ことだ……!?)

それはまるで、既視感のように、出久の中に存在していた。

(なんで……!)

洗脳では無い。それは、己の意志には何の変化も及ぼしていなかった。

(この声は……!)

しかしこの声は、出久の耳に、しっかりと残っていたものだった。それは……子ども
の泣き声。

出久が今朝、目を覚ます直前に耳元で聞いたものと、全く同じ声だった。

決別

洗脳系の個性として出久が真つ先に上げるとしたら、雄英高校普通科、心操人使だろう。昨日の雄英体育祭の第三種目第一回戦で戦った相手である彼は、操ろうと言う意志を持って話しかけた相手が、その応答に答えると、洗脳のスイツチが入り、それ以降は本人が解こうと思うか、若しくは一定以上の衝撃が外部から加えられない限り、洗脳を解くことは出来ない。心操自身の話術が長けていれば、更に強力になったであろうと言うのが出久の考察だった。

さて、何故今出久がそんなことを考えているかと言えば、己が洗脳系の個性にかかっている可能性を吟味する為である。そう言っても、前述の通りに当てはまる個性は心操の一例だけ。そして現在意識を失うわけではなく、移動や細かい動きも己の意志で出きるため、洗脳系という可能性は低い。

(これで洗脳系となれば、心操君以上に、洗脳開始のON、OFFも自由に出来るって事になつちやうけど……もしそうなら、条件は何だ?)

漏れそうになる声を抑えて、思考する出久だが、それは洗脳に限らず個性全般に言えること。

(飯田君のエンジンや、かっちゃんの爆破はわかりにくいけど、無いわけじゃない。麗日さんの個性なんて、触れなきや発動できないってかなりの条件が求められる。僕と彼がしたのは精々玄関先で話す程度なもの。それで発動するんなら毎日話し込んでいる母さんの方がよっぽど発動するリスクは高いはず……)

考えられるとすれば何らかの意図を持って出久のみに発動させた場合だ。しかし洗脳系で無いのなら……洗脳系だとしても操る時間が余りに短かったことを考えると、ここで発動させる意図がわからない。

(一度違和感を与えれば、警戒されるとわかるはず……まさか、させるために発動させた……!?)

せわしく巡らせる思案の中で糸口を掴んだように感じて、更に深く出久は己の意識の中に潜っていく。

(警戒させる為にわざと……? 囷か!?)

頭の中に浮かぶのはUSJで見た三人の敵。

(何のために……!?)

次いで思い浮かぶのは、今日の前の扉の向こうにいるであろう少年で。

母さんの話だけを聞くなら、物静かで口べたな所はありそうだが、悪い人では無いと思おうだろう。

しかし始めからこちらを欺く事が目的だったのならおそらく演技はかなりのもの
筈。表情などいくらでも、取り繕えるような。

(でも……!)

疑ってかかるのがヒーローとしての有り様なのかと、己の中で問いかける己がいる。
彼の個性が洗脳系である確証も、敵という確証も無いのに。

(だけど……!!)

敵の一人とよく似た面差し。どうすれば良いのか。明らかに出久だけで判断できる
事では無かった。

その絡みすぎる思案を弄んでいた時だ。

「出久だって俺を……怖がってるの!!」

その悲鳴を聞いたのは。

己が放ってしまった言葉に、俺は息を?んでいた。

「……………」

インコさんに向けて、言うつもりは無かったのだ。これは誰に言っても、どうにもな
らないことだと分かっていた。彼が怖がるのは道理が敵っている。

体育祭の映像で、彼がヒーロー科の一年A組だと知った。そのクラスはちょうどあの
日、死柄木達が襲撃したあの時間に、標的としていた施設に入っていたはずのクラスで。

(怪我してた……あの日)

簡単に思い出せる。あの日の彼は、骨折をしていたのか腕を吊っていた。その原因はおそらく。

(死柄木達……その中にもし、俺も入っていたら……!?)

いや、はつきりと断じることが出来ないが、あの日の様子からもしかしたら彼と俺は接触していた可能性もあったのだ。つまり……あの怪我を負わせたのが俺である可能性も。

(第一印象だけで怖がっていた俺と違って、出久には俺を怖がる動機がしつかりとあったのかもしれないに！)

確かめることはしていないが……実際確かめることなど不可能だろう。出来るとしたらそれは俺や死柄木達の犯罪が明るみに出て、俺が刑務所に入れられてからに違いない。

(いつそのこと、そうなった方が楽かもしれない……)

そこまで考えるものの、それは俺の立場では許されない。死柄木がオールマイトを殺すその日まで、俺もまた、立ち止まる事は許されないのだから。

(俺がこう考えることまで予測して俺を死柄木に宛がったんなら、やっぱり先生は凄い) 現状に似合わない何とも気の抜けた思考を遊ばせていた俺に、僅かな間を置いて耳に

届いたのは聞き慣れない、しかし聞いた覚えのある声だった。

「僕の……せい？」

扉の向こうから聞こえた言葉に、出久は雷に撃たれたかのような奴な衝撃を受けた。

（僕は一体……何をしていた！）

次いで生まれたのは、恐怖に負けて彼の本質を見ようとさえしなかった己に対する不甲斐なさだった。

（証拠なんて……何もなかったのに！）

そう。オールナイトでさえ、確たる証拠は無いと言っていた。警察の方とて、監視をつけただけだと。

実行犯の一人と似ている。そんな先入観だけで怖がって、遠巻きに距離をおいた。事情を知らない彼からすれば理由さえ知らされずに避けられているのと同じだ。

母が言っていたことを思い出す。

頼れる身内がないのでは無いかと言っていた。寂しそうな目をしていたとも。

彼と母がどのように関わり、時間を過ごしてきたのか、出久はほとんど知らなかった。彼に会ってからは話を聞くことさえ乗り気では無く、話を聞こうともしなかった。

「僕の……せい？」

気づけば、母の後ろから、出久は問いかけていた。

今更問うた所で何も出来ないかもしれない。しかしこれ以上、己のやったことに目を背けることはしたくなかった。

『僕は……貴方みたいになりたいんだ……貴方みたいな最高のヒーローに……』

海浜公園で、憧れのヒーローに向けたあの気持ちから、向き合えなくなりそうな気がしたからだ。

「僕が怖がっているから、母さんと距離を置こうとしているの？ 関わらないでいようとするの？」

その問いかけに、扉の向こうからの返答は無かった。

母が落ち着かない様子で手に持つビニール袋と出久を見比べているけれど、出久もそんな母に対して何も言うことは出来ない。

扉の向こうは曲がりなりにも一つの住居である分、外に比べれば防音設備は整っている。しかし、扉越しならば大声を出せばはつきりと聞こえる筈だった。

「……違う」

かなりの間が空き、もしかしたら扉から離れてしまったのでは無いかと思い始めたとき、否定の言葉が返ってきた。

「出久のせいじゃない……インコさんのせいじゃない……!!俺の……せいだから……!!」

続けられたその言葉の意味が掴めずに、出久は目を見開いた。

放った言葉の続きは、零すことが出来なかった。

「……………」

咽が引きつるように痛い。息を吐き出すことに、重さを感じた。

(やつぱり……………言えない……………！)

悲しいという感情は、ごく僅かだ。この症状はあくまで、俺が言おうとするから起るもの。言わないように口を噤み、扉から離れれば、この症状は治まることは知っている。

(……………でも、「発作」が起きたことは分かれば、この場所からは連れ出されるかもな)

内心、俺はそうなることを望んでいたのかもしれない。

黒霧さんの言うように、監視を受けているのなら、転居は既に確定だろう。だがどこかの町でこのような暮らしを繰り返す事に、俺は耐えられそうになかった。

(また同じような事が起きるなら……………また、こんな思いをするのなら)

ここに来た当初は、一人で過ごす時間が出来ることが単純に嬉しかった。先生やドクターのいない生活がどんなものか、興味もあつた。だけれど。

(自由なんて無くて良い……………どうせ束の間の、偽りのものでしか無いのなら)

知ってしまった今は、逆に辛さばかりが増えていくのだ。

誰かと並んで何かを楽しむことも、誰かと必要以上に喋ることも……ただすれ違うだけでも、チラリとこちらに向けられる視線が、己を一人の存在として……モノではない何かとして、認識してくれていたから。

「クロ君？」

恐る恐ると眩かれたインコさんの言葉が、別の何かと被った気がした。

(そう言えば、前生の時にも……こんなことがあつた気がする)

ふと、浮かんだ断片的な記憶。誰が言ったのかも、何と言ったのかも良く思い出せない。

考えてみればおかしなものだ。自分自身の事は漠然とでも分かるのに、他の人や物の記憶は、瞬く間に曖昧になっていく。

『「君」』

「クロ君！」

思い出そうとして昔の記憶に意識を集中していた俺の耳に届いたその声は、インコさんでは無かった。

「君のせいな訳ない！君は何もしてないじゃないか!!」

続けられた言葉は、知らないからこそ言える言葉だ。

昨日の体育祭でもかなり消耗しているだろうに、疲れを見せる様子も無く、出久は続

けた。

「理由があるならちゃんと言え！だから……だから、ちゃんと!!」

その先の言葉に、俺は頷く事は出来なかった。

「何も君たちと話すことはないよ……さよなら」

そのまま俺は踵を返した。

動揺が悟られていなければ良い。泣きそうな声音だったことに気づかないで欲しい。口元を覆った掌に次から次へと涙が零れていく寝るためだけに整えられた奥の部屋へ入った途端、俺は狂ったように泣き叫んでいた。

(攻撃を受けている訳でも無いのに……!!)

体中が、燃えるように熱かった。

(傷がある訳でも無いのに……!!)

ズキズキと、酷く胸が痛んだ。

監視されているのなら、おかしい様子など見せてはいけない。頭では分かっている、涙を止める方法を俺は知らなかった。

泣き疲れた俺は酷くウトウトとしながら夢を見ていた。その中で誰かが声を上げて泣いている。聞こえる声は今の俺のように、たくさん泣き続けた後なのか、泣き疲れているかのようにとてもか細い。途切れ途切れに嗚咽としゃつくりを繰り返し、それでも

まだ己を苛むかのように泣き続けようとする声は聞いていただけで痛々しい程に思えた。

（誰だろう？なんでそんなに泣いているんだ……？）

首を傾げながらその泣き声の本人を探そうと辺りを見回すが、声とは裏腹にその夢の中には俺以外の人間は出てこない。不審に思つて首を傾げると、現実の世界と同じように、夢の中でも俺の手が何かで濡れているのを感じて、目線を移し……そこで頬から手に、何かが落ちるのを感じて、目を瞬き、気がついた。

…俺の頬からこぼれ落ちたのは、大粒の涙だった。

（ああ。……そっかあ）

どこかホツとしたような、呆れたような気持ちで、俺は泣き濡れた顔のまま、微笑んでいた。

（泣いてるのは……ここでも、俺なのか）

「本当に……嫌になる」

俺の意識とは関係なく開いた口から、嗚咽と共に言葉が漏れた。夢の中だとここにいる俺と話す俺は別の存在なのかと、どこか感心したような気持ちでその言葉に耳を傾けた。それなのにおかしなものだ。理由は分からないのに、まるでここで話す夢の中の俺の悲しみが、俺にも乗り移ったかのように、再び泣きたくなるような感情の奔流が襲い

かかつてきた。

「……酷い奴だな。俺は……。本当……マフィアらしい」

単なる夢の中の筈なのに、その声はどこまでも己を責めていた。必死で堪えようとする俺の頬に、次から次へと涙がこぼれ落ちていく。……止めることは出来なかった。

『関係の無い相手を巻き込み、己の利益を得ようとする。……僕はそう言うマフィアらしい相手が、一番嫌いなのですよ』

何故かこの時、耳元に聞こえた声に俺は無意識に謝っていた。死柄木の声でも、黒霧さんの声でも、先生でもドクターでも無い声。

（聞いたことの無い声なのに……なんだろう。知っているような、懐かしいような、そんな変な感じがする……）

思考の片隅で、冷静な俺が夢だからかなと結論を出す。

（変な夢だな……これ……）

己を嘲うような笑みを浮かべて、俺は目を閉じていた。

何で夢の中で再び眠りにつこうと思ったのか、それは俺自身にも定かでは無かった。

（でも、なんだろう?）

目を閉じたまま考えるのは微かに覚える違和感で。

いつもよりずっと低い声音。

夢の中で喋る俺はまるで俺が今の意識のまま、体だけが数年間年を老いたような……
そんな声をしていた。

(やっぱり……変な夢)

職場体験編

職場体験 開始

「……これが、僕のヒーロー名です」

来る職場体験の為にヒーロー名の考案で、出久が考えた名前は、嘗ての彼には蔑称でしかないものだった。

けれど、麗日さんの一言で意味が変わって、その言葉に出久自身も何度も己を鼓舞されてきた。

（それに……僕がこの言葉の意味を今送りたいのは僕だけじゃ無い……い）

麗日さんには、「頑張れって感じー」と称された言葉。それを今の出久は、昨日拒絶の言葉を投げかけられた子どもに送れたかった。

まだ、自分は彼の抱えている悩みや苦しみは知らない。その上でこの言葉は無責任かも知れないとも思った。しかし。

（僕も頑張るから……だから、君も……!!）

もし今会えるのなら、出久はそう彼に伝えたかった。

（あんな終わり方で、終わりたいくないんだ……!!）

敵連合の一角、あのフレイアという敵と彼が無関係とは言えない。オールマイトですら断言できない事を出久程度が断言はできない。それどころかあの容貌の相似を考えれば、何らかの関係性はある可能性の方が遙かに高いだろう。

(だけど……そんな可能性だけの理由で拒絶なんかしたくない……!!)

それは昨日の一件を経て、出久が定めた覚悟だった。

カタカナでホワイトボードに書いた少しばかり歪な二文字。それを改めて見つめて、出久は笑顔を浮かべた。

「君に指名が来ている」

放課後、教室のドアを開けた先で、お辞儀のような姿勢を保ったままのオールマイトが現れたことに驚いた出久だったが、その後更に送られた言葉に、俄然言葉は弾んだ。指名の無いものは受け入れ可能な事務所から選ぶシステムで有るため、職場体験が出来ないと言うわけでは無いが、不特定多数誰でもなものと、己の存在に目をかけて選んでくれた場所では俄然受ける気分に影響は出ると言うものである。最も、たとえばどこであろうか、出久としてはやることを変える気は無いが。

オールマイトの話によれば出久を指名してきた相手はグラントリノ。一年だけ、雄英高校の教師を務め、にオールマイトの担任にもなった相手で、出久がオールマイトから受け継いだ個性、「ワン・フォー・オール」のことも知っているらしい。

「私の指導不足を見かねての指名か……あえて嘗ての名を出して指名をしてきたということは……怖え……怖えよ……！」

ブルブルと足を震わせる普段ならあり得ないオールマイトの動揺ぶりに、自然と出久も戦きを感じてしまう。

(「ただだけ凄いなんだ……！」)

いい機会だからもしっかりもまれてくるようにと言ったオールマイトは、本当に震えていた。

職場体験初日、体育祭の影響か、未だに僅かな人々の視点を感じながらも、一年A組の生徒達はそれぞれの受け入れ先へ行く為、バラバラに行動していく。受け入れ先自体が全国に散らばる分、彼らの行き先も北から南へ様々だった。

その中でも、東京の保須へ向かう飯田君に、出久と麗日は心配そうな表情を浮かべていた。

保須にて飯田君のお兄さん、プロヒーローのインゲニウムは、ヒーロー殺しと呼ばれる凶悪な犯罪者に襲われている。そしてその犯罪者は未だに捕まってはいなかった。

「本当にどうしようも無くなったら言っただけ？……友達だろ？」

コクコクと頷く麗日さんと共に、出久が飯田君に贈れたのは、そんなありきたりな言葉だけだった。

それに頷く飯田君を信じて、出久もまた、グラントリノの事務所へ向かうために行動を始める。

……職場体験の始まりだった。

「なるほどなあ……お前らが雄英襲撃犯……！」

舌舐めずりを隠しもせず言い放った男は素早くそのバーにいる者達に目を走らせた。カウンターの内側、バーテンダーの立ち位置にいる、黒い靄で顔を覆うワンピースの個性の持ち主、カウンターの椅子に座る、おそらくここでのリーダー格となっている薄鼠色の髪の青年。しかし彼らよりも、ヒーロー殺しと呼ばれる男が興味を寄せる存在が、青年の後方、テレビの傍らに立って俯く、十代半ばの赤茶色の髪の少年だった。

テレビやマスコミでも神出鬼没と謳われ、今まで警察でさえ嗅ぎつけもしなかった己のアジトを探り当てた存在。

もしヒーロー側にいればこれ以上無い厄介な存在になっていただろう少年。

そんな彼が所属している組織と聞いてみたから、どれほどのものかと興味を抱いて会ってみたが、第一印象として感じたのは失望だった。

その度合いは、青年の目的を聴いて更に膨れ上がる。なまじ興味を抱いていただけに、失望も大きい。

「興味を持った俺が浅はかだった……おまえは……俺が最も嫌悪する人種だ……」

鋭い眼差しで死柄木を射貫く男が次いで目を向けたのは、周囲の言動など気にもしないと言うように俯くままの子どもの姿。

己を殺し、殻に隠るその姿には、いつそ哀れみさえも覚えてしまうほどだ。

「子どもの痲癩につきあえと？」

腕を伸ばし、腰に差した二つの刃物をゆっくりと抜き取る。その音は当然聞こえているはずなのに、子どもにはやはり動く気配は無い。戦意さえ持たないその姿に、「見込み違い」かと、男は思考を青年に戻した。

「信念無き殺意に、何の意義がある……!!」

後ろにいるワープ系の個性の男が、テレビの向こうの何ものかと何かを話している。しかしそれすら、男にはどうでもいいことだった。

男は自らの責任を知っている。

何故自らの力を奮うのか。

そのたった一つの信念^{おもい}の為に、多くの血に染まったとしても、男はそれをなさなければならぬと己に課したのだ。

そう出なければ、変わらないこの世界の為にも。

(それほどまでの信念^{おもい}があるのか、試させて貰うぞ……!!)

心の内で静かに囁き、男は動いた。

出久と、死柄木と……

「これが……僕っ……です!!」

「違うぞー大丈夫か!」

悩みの中に見いだした一筋の光につき、必要な説明を前略してしまった出久に、親切にもグラントリノは口を挟んでくれた。

端的すぎる己の言葉に気づいて、慌てて謝りながらも、僕は己自身で確認する意味も込めて、考えていた事を言語化していく。

昨日の組み合いでグラントリノに指摘された出久の欠点。

生まれつき個性を扱うほとんどの人達が、呼吸をするかのように自然に扱う個性の一つ一つの動きを、まだ意識しなければ使えないこと。

たったオールマイトの五%の力でも、それを己の手足のように、自由自在に使いこなす事が出来れば、出来ることの幅は比べものにならない所まで引き上げられる。

それを目標に昨日は反復練習を行ったが、中々効率の良い方法を思いつかず途方に暮れていた出久は朝食にグラントリノが食べると言ったたい焼きを暖めて……今に至った。

『バツカおまえ!!でかい皿でそのまま突っ込んだな!』

今し方の、グラントリノの声が出久の脳裏に蘇る。

『無理に入れると中でしか回転しねえから一部しか熱くならんのだ!!』

(一部しか……!)

電子レンジを指さして注意するグラントリノを思い出しながら、出久は言葉を口にした。

「今まで僕は、力を「使う」事に固執していた!必要な時に、必要な部分に……!」

脳裏に思い浮かべる、一部だけが暖まった、カチカチのたい焼き。それが今までの出久だった。

「でもそれだと、スイッチの切り替えて、二手目、三手目で反応に遅れが出て来る!!」

その結果が、思うように扱えない現実……それならば。

「始めからスイッチを全てつけておけば良かったんだ……!!」

それが、出久の辿り着いた答え。

「一部にしか伝わってなかった熱が……万編無く伝わるイメージ……!!」

バリバリバリと、体から電流が流れるような音が響く。それでも体のどこにも怪我は無い。

「その状態で、動けるか……試してみるか?」

含み笑うグラントリノに、出久も微かな笑みで答えた。

「お願いします!!」

三分間。その間に一撃入れること。それがグラントリノが課してきた条件だった。結果は失敗。

「保つだけで……難しい……これ。まだまだだ……」

沈んだ声音が出久の本心だった。無論最初から全てが上手く行くとは思わない。しかし一撃の蹴りだけで集中力を乱し、あの状態が解けること……そして再びスイッチを全てつけるには、僅かばかり時間を要すること。ヒーローとして活動するためには、そんな負荷をどうにか軽減させる必要がある。それが次の課題だろう。

「いや……」

そんな出久に対して、グラントリノが漏らしたのは小さな否定。

しかしそれを続ける事無く、グラントリノは言葉を入れ替えてきた。

「よし、後は慣れるー!ガンガン行くぞ!!……の前に朝食食べてないな?」

思い出したかのように首を傾げるグラントリノに、出久も己が何も食わずに修行を始めようとしていた事に気付いた。

「食べ……って、ません!」

(滅茶苦茶だろ……)

心の中で毒づいた俺はただどうにもならない現状にため息をついた。

インコさんとその息子、出久を拒んで数日。あれ以来ずっと部屋に閉じ籠もったまま生活していた俺が、久しぶりにみた他人は黒霧さんだった。彼の命令に従って、バーハ足を踏み入れたが、何故かそこでは次に訪れたヒーロー殺しと、ここでの実質的なトップ、死柄木の喧嘩に巻き込まれ、見事に床に倒れ込んでいた。

(……………つて言うか俺、何もしてないよな?)

俺は耳半分で聞いていた彼らのやりとりを思い出して、再び確信を深める。

ヒーロー殺しに応答する死柄木の声を聞きながら、俺は俯いていただけだ。死柄木の支持もヒーロー殺しの非難もしていなければ、その逆もしかり。自分でも感心するほど必死になって背景になっていたのに、何故こんな仕打ちを受けるのか、理不尽極まりない。

何をされたのかは分からないが、体を動かすことが出来ない。しかし、目を軽く向ける程度の動きには支障がなかった。

(指先一つ動かないのに、目や耳の働きには影響が無い……………!五感を封じている訳じゃないという事か?単に動きを封じているだけ……………)

何事かの会話を続けている彼ら三人の姿を視界に写しながらも、思考は回るのに身動き一つ出来ない俺は、内心うんざりとしながらも考え続ける。

混乱したり、思考停止状態にならないのは先生の元にいた経験があるからだろうか。(なんだろいな。何か……何が起きてもおかしくないと考えているような……)

目が覚めてから彼らに引き合わされる迄の間に、手に入れた個性を試すための実験台とされていた時期もあつたので、そのせいかもしれないが。

(あれ?……あつたよな?)

ふと、感じたそれが何なのか。何となく、深く考えてはいけないような気がして、思考を打ち切る。

そもそもどんなに考えたとしても、この現状は彼らの間の問題が片付かない限り、どうにもならないのだから。

「ちよつと待て待て……この掌は……駄目だ」

息も詰まりそうな……:比喩では無く、無自覚ではあつたが呼吸数は上がっている現状に終止符を打つたのはヒーロー殺しと対話していた死柄木の発した言葉だった。

「殺すぞ」

たつた一言。

大声を出したわけでも、高らかに言い放つた訳でも無い。

いつも通りの低音で、呟きに近いだろうそれを、しかし俺の耳は正確に捉え……俺は体中が総毛立つのを感じた。

(なん……だ!?)

この時の俺は、具体的に俺自身も何を感じていたのかはよく分からなかった。

ただ、静まり返った室内の中で滔々と続けられた死柄木の言葉に引きつけられたといっても良い。

「あんなゴミが祀り上げられているこの社会を……滅茶苦茶にぶつ潰したいなあとは思っているよ」

(この社会を……ぶつ潰す……か)

言われた言葉を咀嚼して、俺が覚えたのは妙な納得、そして、何とも云えない虚しさだった。

死柄木と俺は馬が合わない。先生の頼みだから従ってはいるが、そうでなければ一秒だって同じ場所にはいられないだろう。

それなのに、今俺は死柄木の言葉に引きつけられた。敵対するオールマイトとは言え、人をゴミ呼ばわりする扱いや、それ以外の言動、危ないという解釈無しに平然と子どもを巻き込み傷つける危険性。……馬など合わない。たった、一点を除けば。

(そうだな……俺も)

圧倒的に数の少ないヒーロー達に全てを押しつけて、何が起ころうと我が身可愛さに無関心を装うこの世界は……そこに住まう人々は。

(……好きじゃない、けど)

けれどそれだけだった。

悲しむべきか、喜ぶべきか皮肉な事に、死柄木の気持ちには、その憎悪は理解できないのに、心のどこかで「ぶつ潰したい」という衝動だけは、理性が否定する。

「今を壊す。その一点のみにおいて俺達の意志は共通している」

そう言い放ったヒーロー殺しに、気付けば俺はぎこちなく口元を歪ませていた。

その根拠はきつと、俺にあつて死柄木には無い、前生の記憶。

はつきりとした言葉は無い。ただ漠然と感じる物の中に、今と同じ虚しさがある。

(壊したところで……空しいだけだろ)

すくと胸中に落ちる感覚に、僅かなやるせなさが宿る。

(前生の記憶が無ければ、漠然としたこんな感情が無ければきつと、俺は死柄木と同じ選択をしている……)

それができる死柄木に、何故か、少しだけ羨ましいと思つてしまつていた。

「……おまえはどうなんだ」

死柄木の言葉に納得したらしいヒーロー殺しが振り返つたのは、道具である一人の少年の方だった。

その意味を理解した死柄木が、気に入らないと言うように声を荒立てる。

「おい。待て……こいつは関係ないだろ」

死柄木の言葉に、ヒーロー殺しは目もくれず、言葉を続ける。

「貴様の立場は知らない。ここにいる奴らとの関係も。しかしおまえは唯一、潜伏していた俺を捜し当てた。それだけは間違いはない」

並べ立てられるヒーロー殺しの言葉に、道具である少年からの答は無い。俯く表情は窺えず、反応も無い姿に、先刻の様子から反応の予想は出来ていたとはいえ、遺憾の念は消えない。

「あの時俺を探り当てたのは偶然か？それとも力を隠しているのか？……俺と手を組みたいと言うのなら、俺にはそれを知る権利があるはずだ……!!」

首筋に交差するように押し当てた2本の刃物をジリジリと、肌に食い込ませる。

大抵のヒーローならばこの時点で何らかの反応を示すにも関わらず、ヒーロー殺しの目の前にいる子どもはただ表情を変えることなくこちらを見つめる。

ツウ……と刃物の先から血が球となっ流れた時、漸く子どもが顔を顰め、囁いた。

「どうでも……いこ」

目を眇めるヒーロー殺しに気付きながらも目線を合わせることも無く、子どもは言葉を吐き出した。

「おまえがどれほどの事情を抱えていようが、どれほどの覚悟を持つていようが……俺には関係ない」

首筋に食い込んだままの刃物に動揺する様子もなく、子どもはヒーロー殺しに漸く視線を向ける。

その眼は死柄木以上の嫌悪……憎悪に近いものを湛えていた。

「立派な理想を掲げることは勝手だが……それを俺に押しつけるな……!」

以前見た赤茶色の瞳は常人と変わらないように見えた。

しかし今日の前にいる子どもの目の中には、僅かな揺らめきがある。

「俺はお前とも、死柄木とも違う……! ヒーローなんて欲しくない! そんな、誰かの犠牲の上にはか成り立たない世界なら……滅んでしまえば良いんだ……!!」

息を? んだヒーロー殺しを見て、俺は自分の迂闊さにため息をついた。

たとえ求められたとしても、道具に徹するのであれば己の意見など、言うべきではない。言ったとしても死柄木と同じ言葉を言うべきだったのだ。

しかしあの時、背景に徹していた俺は会話というものを何も聞いていなく、当然死柄木が何と言ったかなどしらない。

それならばあのまま黙って切られていれば良かったのではないかとも言えるだろうがあのままであれば、間違いなくヒーロー殺しは俺を絶命させていただろう。

それぐらいのことは分かる。

だからこそ、俺は俺自身の考えを言うしかなかったのだ。

(でも……先生ならそれなら死ねって言いそうだから笑い事に来ないんだよなあ)

一時的に送り返されるだろうか。

死柄木達と離れられるのと、先生の再教育を受けるのを天秤にかけるなど、どちらも御免被りたいと言うのが正直な所だが、そんな贅沢を言える身分では無いのは俺も分かっている。

どうなるかと起き上がりながら考えていた俺はそこで周りの三人を見渡して、漸く彼らの様子がおかしいことに気付いた。

「おい。先生……どうなっている?」

画面を見ながら苛立たしげに問いかけているのは死柄木である。

「あれは……薬を撃たなきや発動しないんじゃないやなかったのか? 今、一瞬だけどなったよな!」

死柄木の言葉に、画面の向こう側……先生本人の声が抑揚も少なく答えた。しかしその声は、どこか弾んでいるようにも見える。

「あの薬は、その状態に入りやすくするように促進するだけだよ。彼自身の力だ。論理的にはこの姿で使えたとしても不思議では無いが……」

その直後、画面越しにこちらを見られたような気がした。彼らの話題が自分であることは分かるが、俺の何に対して話しているかは分からない以上、どう反応すれば良いのかは分からないのだが。

「中々に……良い傾向だ」

その言葉の中には、怒りのようななどす黒い感情はみられない。

しかし、その言葉を聞いた途端、俺の体は震え上がった。死柄木よりも遙かに強く、こちらを魅入らせるような絶対的な王者の声。

こちらへ来てから聞いてなかったそれに息を？むことさえ出来ずに固まる。

「なるほどな……お前がどうか。」

苛立つ死柄木を気にも止めずに、沈黙を保っていたヒーロー殺しが、漸く動いた。死柄木と黒霧に目を向け、ほくそ笑む。

「用件は済んだだろう？ 保須 へ戻せ！ あそこにはまだ成すべき事が残っている」

保須襲撃 直前

あの一瞬、子どもの額に灯った橙の炎は、たとえ発火系の個性でも、本来ならありえはしない代物だろう。ヒーロー殺しと称される彼、赤黒あかぐろ 血染ちぞめでも、そんな個性を見たのは動画の中だけだった。

(なるほどな……もしこの子供が彼らの血縁ならば、その敵連合への在籍がヒーロー社会に与える影響は計り知れない……！)

彼が見た動画は、彼が憧れたオールマイト、その登場以前、超常黎明期と呼ばれ、まだヒーローが公的職務とされていなかった時代に出回ったものだった。かなり昔の話であったため、ネットの中では話題として上がるものの、動画の中で彼がその姿を目に出来たのはほとんど奇跡に近いものだっただろう。

『大丈夫だ……助けに来た』

荒い画像の中でもはつきりと分かる、薄い微笑。

それは彼にとってはオールマイトと同質のものと言っても良かった。二人寄り添う姿は人が見れば比翼連理と呼ばれただろう。

その一方が、この子供と同じように、額に炎を宿していたのだ。

(いや……色素こそ、目の前の子どもの方が濃い、容貌に、もう一方の面影がある) 時代が時代なら、オールマイトと同じように漑えられたであろうヒーロー。しかし、全ての人間に個性の使用が須く禁じられていたあの時代では、個性を扱う者は誰であろうと犯罪者とされ、個性を持つ者こそが、圧倒的少数であったあの時代では、彼らは犯罪者であった。

動画の見出しにも、まるで人の目を憚るかのように彼らの名は記載されていなかった。その見出しだけで、その当時の個性を発現した者達の立場がいかに保証されないものだったのか、それが目に見えると言うものだろう。しかし彼らの成した偉業は、はつきりとヒーローの歴史として、現在に語り継がれている。公式には、立派な志を持った有志たち等と名を伏せ、誤魔化されていることは腹立たしい限りだが。

(……「始まりのヒーロー」。そう称された、ワイジランテ自警団の創設者)

心の中で、静かに思いを馳せる彼の眼前に映るのは、そんな先人達の思いも空しく、私利私欲に走る贗物にせものがはこびる明るい町並みが広がっていた。

「……へえ思いの外栄えているんだなあ」

己が潜った黒い霧のゲートから次いで出てきたこの組織の主格、死柄木という男が、皮肉るような口調で言葉を零す。

その様子を気にする事無く、町に目線を向けたまま、己は自らの表情を歪ませていた。

「町の大小は関係は無い。俺がやるべきはこの街を正すことそれにはまだ……犠牲が要る」

ふと、先ほど聞いた、子どもの言葉が蘇った。

その性根は眩いほどに綺麗で、吐き出した言葉は反吐が出るほど綺麗事だった。

この世界はそこまで甘くは無く、滅ぼすことを願って容易に滅ぼせるものでも無い。それ以上に、いざそれを成そうとした時、子どもの行動に牙をむくのは他ならぬ子ども自身の感情だろう。

己を目に映した途端に子どもに過ぎった明確な恐怖。明らかに彼は争い事に不慣れのようにだった。背後をそれとなく窺えば、この場にも居合わせていないようである。

おそらく人を傷つけた経験さえ無いに違いない。何故死柄木のような輩と連んでいるのかは知らないが、その場しのぎの言葉であろうそれを、実行できるだけの覚悟を備えているとは思えなかった。そこまで考えた上で不可解なのが、何故己が態々死柄木同様あの少年を見逃したかだ。

死柄木はまだ分かる。

己とはまるで対極な思想だが、唯一重なった現状への怒り。

その思想の芽がどれほどの脅威を産むのか、それが世界にどのような影響を与えるのか、それが己に興味を抱かせた。

しかし、あの子どもにそれは当てはまらない。滅ぼすと言うのが口先だけならばなおのことだ。

(あの炎をみたからか?……いや、たとえ彼の者達の血縁だとしても、俺には関係の無い話。俺が求めるのは……ヒーロー足るべく資格を持つ者のみ)

そこまで自らの考えを纏めて、漸く彼は己の中にある変わらない真理に辿り着く。

(そう、必要なのは資格だ。どのような生まれだろうとも、関係は無い)

「ヒーローとは偉業を成した者のみに許される 称号 〴〵……多すぎるんだよ。英雄気取りの拝金主義者が……!」

高ぶりのままに言葉を紡ぐが、その時間さえも無駄に思える。己の時間は有限だ。数多くの目を覚まさせるために、無駄な時間を浪費するつもりは無かった。

「この世が自ら誤りに気付くまで……俺は現れ続ける」

そう。己の影に怯えるのであれば、それにヒーローの資格は無い。

刻一刻と新たなニュースが入り、古いものを風化させる社会で、人々に思考させるには、風化させなくするには、今の出来事にしなければならぬのである。

現状に、起きても不思議ではないということ。

そう思わせることこそが、ヒーロー殺しの目的だった。

(その資格無しと判断すれば殺す……それだけだ……!)

一人悦に入り、ヒーロー殺しとしてその責を果たすべく、男は街の中に消えた。

「あれだけ偉そうな事言っておいて、やることは草の根運動かよ。……健気で泣けちゃうね」

黒霧と二人、その場に残された死柄木は、ガリガリと首筋をかきながら、街の中に消えた同盟者を思い、顔を顰めた。

その表情は、黒霧が次に話した話題によって、更に歪む。

「やっぱり合わないんだよ。根本的に……ムカつくしな」

死柄木にとって、それが何よりも重要な事だった。

先生からの指示とはいえ、何故ムカつく相手と行動を共にしなければならない。何故己が謙らなければならぬ。総てのことに、納得が出来なかった。

「黒霧……あいつらを出せ」

何か面白い企てを思いついた子どものように、僅かに声を弾ませて、死柄木は続ける。「上である筈の俺に刃あ突き立てて、ただで済むかって話だ。……ぶっ壊したいならばぶっ壊せば良いって話……」

狂ったように笑い声を上げながら、死柄木は静かな町並みを眺める。

忌々しいという感情を隠しもせず。

「大暴れ競争だ」

その一言で、黒霧は死柄木の要求するものを悟ったのだろう。事前に用意していたそれらが収納されている場所へと、空間を繋いだ。

「加減は如何ですか？フレイア」

義理のように、最初に出てきた相手にそう問いかけるが、応答がないのはわかりきっている。繋いだ空間の向こうにいる先生の話では、前回の戦いを参考にいくつかの改良を加えたと言っていたが、詳しいことはこちらにも教えられていない。

「大丈夫かよ。こいつも入れて」

先生から事情は聞いてはいるものの、やはり不満なのだろう死柄木は、氣にくわなという様子を隠すことも無く、無表情に佇む子どもを姿を睨みつけた。

「前の時みたいに、炎切れは冗談じゃ無いぞ!?!他の奴らだけでも何で十分に出来ないんだよ!」

先生から事情を聞き、納得の返事はしたものの、内心では納得出来てなかったであろう。

苛立つ死柄木を宥めながら、黒霧は死柄木とてわかりきっているであろう事を繰り返す。

「彼らは力を与えられた影響で判断能力が極端に低下しています。無差別の破壊や殺戮にはもってこいですが、こちらにまで攻撃を加えることのないよう、手綱を多少はとれ

る相手は必要なのですよ」

最も死柄木の方も、既に繰り返した問答を再発させる気は無いらしく、黒霧の説明に舌打ち一つで頷いた。

「……フレイア。奴らを派手に暴れさせろ。お前は必要以上に暴れるなよ」

呼びかけに対して反応しないことは死柄木とてわかりきっているので気にしない。従順な道具となった青年は虚ろな目で、提示された奴ら。自らが従える同行者達を映した。

ある者は翼を、ある者は鋭利な爪を、ある者は巨大な牙を持つ、黒衣の装束を纏った大人達。

その共通点は大きく二つ。

彼らは皆、両目が一樣に機能していないということ。

そして彼らの体から見える異形の個性……そこに色とりどりの炎が燃えているという事だった。

「フレイズ……ってのはどうだ？中々に、良いネーミングだろう？」

黒霧にそう尋ねる死柄木は、フレイアに見向きもせず、新しい玩具を愛でるかのよう
に、異形の怪物達を見つめ言葉を続けていた。

「さて……あんたの面子と矜持、潰してやるぜ？大先輩……！」

それは、どこまでも一方的な、
宣戦布告。

火の手は上がる

(飯田君……どうしたんだろう?)

甲府から新宿行きの新幹線の座席にて、出久はスマホを片手に首を傾げていた。今出久が見ているのは、自分が飯田天哉宛に出したメッセージの発着信の一覧画面。

飯田君宛に出したメッセージは既読がついているにも関わらず、その返信は書かれていない。

(飯田君……いつもは既読から三分以内には返事くれるのに……)

常とは違う彼の行為を疑問に思いつつも、ここで出久が出来ることは何も無い。スマホをしまい、一息つこうとした時、ゴンと何かと車体がぶつかるかのような、鈍い衝撃音が伝わり……。

『お客様、座席にお捕まり下さい。……緊急停止します』

機械音と共に、新幹線が急停止した。……その時だった。

視界に映ったのは数席前の窓ガラスが砕け散る景色。

窓を砕いて新幹線の中に転がり込んだのは、一人のヒーローのようだった。

「ヒーロー!?!」

「きやああああ!!」

つい数分前までは静寂に包まれていた筈の車内が、あつという間に、騒乱に包まれる。しかし騒ぎはそれだけに留まらなかった。

「危険だ!下がって!!」

ヒーローの切羽詰まった声に一般市民達が距離をとるのとほぼ同時に、ヒーローの激突によって割れてしまった窓ガラス、そしてその窓ガラスがはめ込まれていた壁ごと、ざつくりと、鋭利な爪で貫かれたのだ。

しかし、出久が目を見開いたのは、その後の光景だった。

本来ならば、砕け散るはずの壁は、破片一つ出さず、塵のように細かい粒になって、消えていったのだ。

ただの「爪」の個性ならばあり得ない事象に言葉を失う出久の目は、爪の先に煌々と灯る赤い炎を映していた。

(何だあれ!「爪」の個性じゃない!?あの炎……まさか……?!)

その時、出久の頭を過ぎったのは、U S Jを襲撃した敵連合。その中にいた、炎を両手に灯す青年。そして……それと容貌がよく似た、隣家の少年。

「小僧!お前は座つとけ!!」

突然の事に反応が遅れた出久の横を通り過ぎたグラントリノの声が遅れて響いた。

「グラントリノッ!?」

グラントリノは、出久が気付いた時には既に、大きな爪を炎で燃やす敵を連れて、車外へと飛びだしていた。

「グラントリノオ!!」

咄嗟に声を上げ、車内から外を確かめた出久が見たのは、あちらこちらから火の手が上がる街の様子で。

(この街……「保須」か!)

標識からそこが飯田君の職場体験先と気づき、出久の中にはいやな予感が広がっていく。

(飯田君……!)

いてもたってもいられず、出久は新幹線から飛びだしていた。

出久の乗る新幹線が謎の敵によって襲撃された頃、飯田天哉と、その受け入れ先となっていた、プロのヒーロー、ノーマルヒーロー「マニユアル」の元にも、騒ぎの音は届いていた。

「誰だ一体……こんな時期に馬鹿な奴だな」

この街一帯のヒーロー達は、現在皆ヒーロー殺しの登場により、厳戒態勢をとつてい

ると、言つて良い。

それを考慮することもせず、ことに及んだのだろう敵を揶揄しながらも、マニュアルは、自らの役目を果たすために、騒ぎの元へと向かおうとした。

「天哉君！現場行くよ!!」

背後を確認しなかった彼は、目の前の路地裏を鋭い視線で見つめる飯田天哉の姿に、最後まで気付くことは無かった。

新幹線から降りた出久は逃げる人の波に逆らう形で、騒ぎの中心に向かって進んでいった。

（炎の色は違っていたけど、あんな個性の持ち主がそう何人も一時期に何の関係性もなく現れるなんて考えづらい……!）

進むにつれて目尻していく人の数に現場がそう遠くないことを否が応でも意識する。

（その一人一人がもしあの青年と……「フレリア」と同じくらいの実力を持っているなら……）

出久の脳裏に蘇るのは、オールマイトの連撃で吹き飛ばされてさえ、炎の力で押し留まった敵の姿で。

（グラントリノどころか……この街が危ない!）

次いで脳裏を過ぎったのは、ここで職場体験をしているはずの友達の顔で。

(飯田君だって……!)

おそらく現場には既にこの街を拠点としている相当数のヒーローが集まっているだろう。土地勘も無く、力も無い出久では、まともにいたところで役に立つとは言いがたいかもしれない。

(僕はどう動けば良い?……どう動くのが最善だ!?)

「天哉くん!!」

細い小道から開け、視界が一気に鮮明になった出久の耳に、知った名前を呼ぶ声が聞こえた。

見るとそこには、飯田の受け入れ先となっているはずのノーマルヒーロー、マニユールの姿が。

しかし出久の足を止めさせたのはそれだけが理由では無い。目の前に広がる本来ならばあり得ない光景に、出久は声を失った。

(何だ……!これは……!?)

横転した大型バス。強い衝撃によってねじ切れたようなガードレール。ある者は血を流し、ある者は昏倒し、倒れるプロヒーローの人々。

そして、彼らをなぎ倒し、眩いばかりの炎を迸らせる二匹の敵。

「何でこんな時に限ってどっか行っちゃうんだよ!!」

困惑した様子で、飯田君を探しているのは、マニユアルだった。

「ほら邪魔だよ！下がって!!警察の避難誘導に従いな!!」

一匹の敵を相手取っている女のヒーローが、出久の姿に気付いて声を上げる。それに反射的に謝り、出久は思考を回し続けた。

(飯田君がどこかへ行った? おかしいだろ!? こんな事件を目の前にして……)

幾つもの可能性が出久の頭の中で浮かんでは消える。

「保須」。そこに現れた敵連合と? がる「フレイア」に酷似した敵。飯田君。

それから出久はある可能性に行き着いてしまった。

(まさか……!)

その真偽を確かめるため、出久はその場を離れ、一人走り出した。

虚ろな瞳で眼下に広がる火の手の上がりつつある街を「フレイア」と呼ばれる青年は一人、見下ろしていた。

死柄木達に伝えられていない先生による改良点。その大きな変化には「フレイア」という個体に存在する自我を僅かに残してあるというのが上げられる。

その理由は今回のような外の有象無象を牽引する立場にこれからつく機会が増えるであろうと言う可能性。

更にオールマイトのような単体で強いヒーローを相手取る場合、彼の中に眠る本来の

才能を生かす為には、多少の自我があつた方がその力を発動させやすいと言つた点にある。最もそれには相応のリスクも生まれることは考慮すべきだろう。

小さな変化で言えば、彼に注入する炎を更に30%の増加……つまり、前回の三割増の注入を受けたことだ。つまりは「真黒」と呼ばれる子どもが常時持つ炎から更に60%の割合に相当する量の炎を上乗せして注入されているという事である。

これは単純に炎切れを起こさない十分な量を検討した結果と言つても良い。

今回の指示ではヒーローとの戦闘は命じてはいないが、もしもということもある。今回あえて仮面をつけずに容貌を曝させたのはいくつかの理由があるが、それもここで話すほど重要な事では無いだろう。

さてここまで説明したものの、今ここで虚ろな視線を揺らしながら上空にいる彼にとつては、実はその総てが問題にはならないものだ。

なぜなら彼が注視すべきはただ、この街で起きる騒ぎが、彼の向こう……そこにいる死柄木達に届かないようにすること、そのみであるからである。

そうまで断言できるのは、偏に今の彼にはそこまで深く……具体的な思考能力が無いからだ。

「自我が僅かに残っている」ことと、完全な思考能力を持つことは全く次元の異なる問題と言つて良い。

与えられた命令を疑わず、自らの意志で実行する。

それだけが敵連合に今の彼が求められている事だった。

その眼下では今、一つの戦いに決着がつけられようとしていた。

「じゃあな……正しき社会のための、供物……」

相手の個性によつて動きを封じられた体の上に馬乗りになされ、飯田天哉はヒーロー殺しに刀で貫かれようとしていた。

「黙れ……黙れ、黙れ！だまれえっ!!」

あたかも最後の悪あがきのように、志半ばで倒れた兄の、そして兄の仇を討てずに倒れた己の悔いを言葉とするように、飯田は叫んでいた。

「何を言つたつて！お前はっ!!」

それは唯一の事実。

「兄を傷つけた犯罪者だっ!!!」

その言葉に相手は応えなかつた。

己の首が胴体から離れる。

それを覚悟し目を閉ざした飯田の頬に、僅かに風が当たった気がした。

不自然に錘が消えた感覚に、恐る恐ると目を開けた飯田は、そこで数日前に別れた級友を見た。

「緑谷……君？」

都合の良い幻でも見ているのかと思った。平気なふりをして、彼らに何も言うことが出来なかった己を悔いていてからこそ尚更に。しかしこちらの囁くような問いかけに、
彼……緑谷出久は不敵な笑みで答えてくれた。

「^{たす}救けに来たよ。飯田君！」

ヒーローの本質

あちらこちらで火の手が上がり続ける街並みを眺めながら、死柄木は満足げな笑みを浮かべた。

「良いね……最高じゃないか。フレイズは」

与えられた新しい玩具の性能を喜ぶ子どももの歓声に耳を傾けながら、黒霧は言葉を投げかけた。

「貴方も参加なさっても構わないのですよ？ 死柄木弔」

炎が切れば動けなくなるフレイアと異なり、死柄木の行動は何の制限をされていないわけではない。

先生は何よりも死柄木の意向を尊重するからだ。

それは当然本人も知っている事実。故に前回のように、自ら成すことを好む死柄木ならば、真つ先に飛び出すだろうと思っていたから黒霧は言葉を投げかけたのだが、それを死柄木は鼻で笑った。

「馬鹿か。俺は怪我してんだぜ？ だから奴らを持ってきたんだよ」

そう。死柄木が先生に強請ったのはまだ実験段階だった数体のフレイズと呼ばれる

戦闘兵器だった。

それを使ってヒーロー殺しのやろうとしていることを滅茶苦茶に壊そうとしているのだ。

『気に入らないものはぶっ壊しても良いんだろ!』

嘗て他ならぬ先生自身が死柄木に対して教えてくれた言葉を引き合いに出せば、僅かな間を置いたものの、先生は概ね了承し、実験段階だったフレイズを死柄木に与えてくれた。ただし……。

「けど、あいつがセットつてところだけは気に入らないけどな」

先生は、あいつを貴重と称したが、死柄木にはあの生意気な子どものどこにそこまでの価値があるのかは理解できない。

先生の調整を受ければ動くことの出来る道具だが、逆に言えば時間制限という欠点を抱える欠陥品でもあるのだ。

死柄木としては使い捨てであっても使い勝手の良いフレイズの方がよっぽど重宝で
きる存在である。

フレイアの使う「死ぬ気の炎」と、フレイズの体内から放出される炎の関係性は先生から教えられてはいないが、そんな原理もは死柄木にはどうでも良いものだった。肝心なのは彼らが使えること。そして……。

「夜が明ければ、世間はあんたのことなんて忘れるぜ……!」
笑いながら死柄杓が見渡す街並みは次々とボロボロに崩れ去っていく。

「ヒーロー殺し……!!」

そして、己が愉しめれば、それで良いのだ。

回転し続ける思考の中で出久が辿り着いた可能性には、何も確証などなかった。

(考えすぎかもしれない……でも、動かすにはいられない!!)

本職のヒーローでは無い出久には、目の前の現実しか分かることは無い。

それは、ヒーロー殺しの現れた街で、フレイアのような力を持った者達が暴れているという事実だけ。

(この街でおそらく……僕だけが考えられる不安……敵連合とヒーロー殺しが、?がつて居るんじゃないかと言うこと!!)

雄英の施設内に敵の一派が侵入してきた事は大々的にニュースとして取り上げられたものの、被害が施設一つのみであったこと。また、襲われた雄英生に大事が無かったこと。その上、襲われた場所自体が雄英高校というヒーローの集まる独立した組織のみであったことから、敵そのものの情報はほとんど出てきていない。当然……取り逃がした敵連合の一角が、橙色の炎の使い手であることも、彼がオールマイトと互角の立ち回りを演じたことも。

(模倣犯とは考えにくい!? がつていなきや! 情報がなきや出来ることじゃない!!)

そこから導き出される可能性。

(この街に今、ヒーロー殺しもいて)

そしてその中で、飯田君が来ない、来られない可能性……それは。

(ヒーロー殺しを見つけてしまったからじゃないのか!?)

そして出久の、その予想は当たってしまった。

「緑谷君……何故……!?!」

飯田君の声を背に、出久はヒーロー殺しから視線を外すことは出来なかった。

飯田に刀を向けるヒーロー殺しを視認した直後、壁を蹴り、最短距離で彼らの争う路地裏へ飛び込んだ出久は、そのまま地面に足を着ける前に拳で一撃、ヒーロー殺しに入っていた。

その衝撃で両者に空いた僅かな空隙を縮められないように警戒しながらも、飯田の質問に答えるため、また、ヒーロー殺しとやり合う時間を稼ぐ為にも、出久は言葉を紡ぎ始める。

ワイドショーでやっていた内容。ヒーロー殺しが、襲撃に使う場所の傾向。そして

あの現場から飯田君が通ったであろう路地裏の場所。

後はグラントリノの教えによって習得したばかりの方法で強化した体で、虱潰しに探

していたのだ。

「動ける!? 大通りへ出よう!! プロの応援が必要だ!!」

相手が離れたにも関わらず、起き上がる様子の見せない飯田の姿に、出久の思考は以前見たワイドショーの内容に飛ぶ。

彼が抱いた予感は的中した。相手の個性によつて、飯田は身動きがとれないのだと言うのだ。

(飯田君だけじゃ無い! もう一人……!? あれは、プロのヒーローか!?)

思った以上にこちらに不利な現状ではあったが、ヒーロー殺しが眼前にいるという意識が強かったお陰か、出久は辛うじて表情を変えること無く、相手に対峙できていた。

これは訓練ではない。目の前にいるのは既に何人もの人間に手をかけた犯罪者なのだ。僅かな気の緩みそのまま、出久達の危険に直結するだろう。

「手を出すな……緑谷君!」

ヒーロー殺しが動きを見せず、それを警戒する出久もまた、無闇に動けない状況の中で、飯田が放った予想外の言葉に、出久は次の言葉を失った。

「……何を、言っているんだよ?」

僅かな空隙の後に、出久が絞り出した声には、困惑の色が隠せずに現れている。

あそこで手を出していなければ、飯田は間違いなく目の前の相手に殺されていた筈

だ。彼の相手に兄を傷つけられた事は知っているが、まさかその相手に、殺して欲しいなどと思った訳では無いはずだ。

疑惑を色濃くする出久に続けて飯田が発した言葉は、この非常時にも関わらず出久の思考を止めるには十分な力を持っていた。

「君には関係ないだろう……!!」

このまま出久が立ち去れば、待つのは死のみという状況だ。それが分からないはずが無いにも関わらず、飯田は顔を歪ませて呟いたので。

「仲間が、「助けたすけに来た」良い台詞じゃないか」

僅かな笑い声と共に言葉を紡いだヒーロー殺しは、乱入してきた少年に声をかける。

助けようとした筈の少年に拒まれた彼は、それでも、ここから離れようとする素振りは見せない。恐怖に足が竦んだのか、それとも。

「……だが俺には、こいつらを殺す義務がある。ぶつかり合えば当然」

まるで見定めるように、少年に向けて鋭い殺気を当てる。

「弱い方が淘汰される訳だが……どうする?」

背を向けた瞬間に、ヒーロー殺しは残りの二人の息の根を止めるつもりだった。ヒーロー殺しの処罰対象はあくまでヒーローを騙る贗物にせもののみ。

ヒーローに憧れるだけの子どもはその対象外だ。

「逃げる！緑谷君!!言ったらろう!?君には関係ない!!」

こちらの殺気は感じ取れたのか、焦ったような声で標的の子どもが声を上げる。自らの可能性を捨て、仇討ちという私怨にてヒーロー殺しに挑んだ愚かな子どもだ。他の存在におかしな影響を与える前に贖物にせもののヒーロー共々葬らなければならぬ。

選別の邪魔をしようとする子どもに、不快感を抱き、先に息の根を止めてしまおうかと考えかけたヒーロー殺しの意識に、割りこんできたのは子どもの叫び声だった。

「そんなことを言っていたら、ヒーローは何も出来ないじゃないか!!」

その言葉は、一方の子どもを責めるようでも、己を鼓舞するかのようにも感じられた。……それに、オールマイトが言っていたんだ」

向けられた少年の口角が僅かに上がっていた。

ファイティングポーズを構えて、子どもは明確な意志をこちらに向けている。

「余計なお世話は、ヒーローの本質なんだって!」

「くくっ……あはははははっ……!!」

出久の言葉に、突然ヒーロー殺しは笑い声を上げていた。

そんな反応をされる理由が分からず、彼の一挙一動から目をそらせない出久に考慮することなく、ヒーロー殺しはまるで独白のように言葉を零していく。

「面白いな。お前達は、対極の立ち位置にいるはずなのにその本質だけはよく似ている」

誰と出久を比較しての言葉なのか、それは出久にはよく分からない。ヒーロー殺しはそんな当惑を気にすることもなく、言葉を続ける。

「皮肉だな。あの方がこの事を知ればどのように思うか、俺には計り知れない。一方は血の繋がりがありませんながら、その遺志を継がず、もう一方は全く血を継がない他人でありながら、自らが遺した遺志を紡いでいく……！」

天を仰ぐかのように刀を振り上げ、ヒーロー殺しは獰猛な笑みを浮かべた。

「お前は良い。お前は生かす価値がある……！」

目の前で起きたことは、飯田天哉には俄に信じられない事だった。

距離を詰めるヒーロー殺しに出久は一気に懐へ入り、ヒーロー殺しに彼の脇差しによつて切りつけられるよりも早く、視界から外れ……彼に拳の一撃入れたのだ。

緑谷出久の個性は未だに不明瞭な部分が多いが、その能力は決して高いものではないというのが、今までの飯田の感想であった。

(だがこれは何だ!?!……あの動きは……まるで、爆豪君のような……!!)

だが僅かに見えた光明は、より強い絶望によつてかき消された。

出久の動きが突然止まったのだ。

飯田からでは何をされたのかは分からない。

しかし、ヒーロー殺しの放った次の言葉で否が応でも状況は分かった。

「お前は……生かす価値がある。……こいつらとは、違う」

淡々とした声音。それでも、自分達が殺されるのだという事を疑うことは出来なかった。

「ちくしょう!!やめろお!!」

出久の叫び声はつきりと耳に届く。それでも人を殺めることになれたヒーロー殺しの刀はぶれる事は無い。

「……………うう!!」

眼前に刀を向けられる飯田には、最早見ていることしか出来なかった。せめて、目を逸らすことだけはしてはいけなと思った。

恐怖に目を逸らすことだけはしてはいけなと思った。

「……………?!?!」

何かを感じたヒーロー殺しが、上に跳躍した。その時。

飯田と出久。それとヒーロー殺しを分離するように、一直線に氷と炎が迸ったのだ。
「……………次から次へと、今日は良く、邪魔が入る……………」

心なしか、苛ついたかのようなヒーロー殺しの独白に被さった声はしかし、その独白とは逆に、落ち着いた涼やかなものだった。

「緑谷。ここのうのはもつと……………詳しく書くべきだ」

それは、出久が敵の目に隠れて、飯田とのやりとりの中ではなかった、救援要請に応えたもの。

「遅くなっちゃまっただろ」
轟焦凍とじろあきしやうとが、そこにいた。

一言

緑谷出久の復活によって見えてきたヒーロー殺しの個性。それは血液型の差違に影響を受けるという、ヒーロー殺し自身にも予期できない要素フアクターを含んだ使い方の難しいものだった。

「相当危ねえ橋だが……そうだな」

出久の提案に同意する形で領きながら、焦凍は出久と連れ立ち、ヒーロー殺しを見据える。

「二人で……守るぞ」

出久の送信した位置情報だけを頼りに駆けつけた焦凍は体育祭以降、密かに飯田のこゝとを気にしていた。

それは焦凍自身の経験から、今の彼が恨み、辛みで動いている人間だと分かったからだ。

（そういう顔をした人間の視野が……どれほど狭まってしまふのかも知っていた……！）

それは、他ならない焦凍自身がそうだったからだ。体育祭の折、緑谷出久にあの言葉

をかけられるまで。

『君の力じゃないか!!』

……そのたった一言。

「止めてくれ……もう、僕は……」

涙を流しながら呟く飯田に、今の焦凍が言えることは、たった一言しかなかった。

それは、己自身が父親への復讐に捕らわれ、見えなくなっていたからこそ、言うことが出来る、一言。

「止めて欲しけりやあ、立て!!」

張った氷の防壁を破り、ヒーロー殺しが向かってくる。それから目を逸らすことなく、焦凍は続けていた。

「なりてえもんちゃんに見ろ!!!」

「……やるじゃないか。ご老人」

足の裏から空気を噴出する個性で、相手取っていた敵を一撃で鎮めた高齢のヒーローを見ながら、エンデヴァーは、不満そうに鼻をならした。

彼が本来ならば管轄外であるはずの保須へ足を運んだのは、ヒーロー殺しを追った結果だった。

今までヒーロー殺しは必ず一つの街で複数の事件を起こしている。その傾向から、保

須ではまだ犯行が起きる可能性がある」と判断したエンデヴァーが保須への出張という形をとったのだ。

しかし、目的のヒーロー殺しを探している間に、この正体不明の敵による街への襲撃を受け、その解決へと乗り出していたのである。

敵が完全に沈黙したのを確認し、さて拘束して引き渡すかと動こうとしたところで、エンデヴァーの目に向こうの建物、その更に向こう側から火の手が上がるのが感じられた。

あそこの方向には自分が行かない分、多めに相棒^{サイドキック}を配置した地点に近い。

それにも関わらず苦戦している様な状況にエンデヴァーは顔を顰めた。

「揃いも揃って……ったくー！」

舌打ち混じりにぼやくものの、それを予想もしていたのか、怒りの感情は少ない。

「全くせわしないな！取りあえずこいつを早く拘束して、警察に引き渡すぞ!!」

向こう側から派手な爆発があることもあってか、向こうの被害を気にしているらしい高齢のヒーローがこちらを急かしてくる。

それに対してエンデヴァーは、しばし考え込み……数十分前まで行動を共にしていた息子の様子を思い出した。

『江向通り四の二の十の細道。そっちが済むか、手の空いたプロがいたら応援頼む』

エンデヴァーの声を振り切った息子が残した言葉。

『友達がピンチかもしれないねえ』

子どもの単なる戯れ言で聞き流す事は現状では良策とは言えなかった。

現に一向に件の息子が戻ってこない状況も、疑惑に拍車をかけていた。

「そいつはうちの相棒サイドキックに任せろ。ご老人は今から言うアドレスへ向かってくれ」

笑みを浮かべることもなく、言い切るそれは、油断の欠片もない証で。

「あちらへの加勢はこのエンデヴァー一人で……事足りる」

絶対的な自信があるが故の提言だった。

「確認しろ！負傷者何人だ!?!」

同時刻、火の手の上がる現場では、切羽詰まった女のヒーローの声が響いていた。

「ザ・フライを含め、五人近くが行動不能。敵はまだ二名とも健全だ!」

付近にいたヒーローの一人が現状を分析した声に、彼らは一様に顔を歪める。

「どんな化け物だ……!こいつらは!!」

圧倒的にヒーロー側が不利と思われる報告に、毒づいた所で現状が変わるわけではないと分かっている、その言葉を止めることは出来なかった。

「負傷者は離れろ!またあの敵の攻撃が来るぞ!!」

大柄な緑色の炎を纏った敵の傍にいた男のヒーローが声を上げる。腕が二、三倍ほど

の長さのある彼は大柄な敵の攻撃を受け流すように四方八方へ衝撃を逸らしているようだった。

目をアイマスクの様な布で覆われた敵は、唸り声を上げながら苛ついてくるかのように足踏みを繰り返して、その度に地面が地響きを立てている。

「離れて下さい！俺の個性なら閉じ込められるかもしれない！」

水かきの様な形状の手から液体を出現させながら呼びかけるマニュアルの声に、そのヒーローは首を振る。

「危険だ！あいつの炎は鉄骨やコンクリートでも貫いてる!!」

「しかしこのままでは街に被害が広がる一方ですよ!？」

意見の対立で、つい声を荒らげている中、更に二人、コスチュームの似通った二人のヒーローが、援軍として駆けつけた。

「争っている場合か！来るぞ!？」

一方近い場所にいたもう一人の敵は、大きな翼を羽ばたかせながら、青い炎を振りまいていた。

「取り囲め！いいか、決して一人になるなよ!!」

数人の男達で連携して相手にしているようだが、飛行能力を有しているせいだ、中々一所に追い込む事が出来ない。

(どちらも八方塞がりか……他に打開策は無いのか……?)

正体不明の二人の敵には連携と呼ばれるものが見られないのが救いだが、弱点らしきものもよく分からない個性にやりにくい事この上ない。

(ここにいるヒーローだけでは手に負えないか……援軍がくるのを待つしか無い!!)

援軍、そう考えながらも彼らが思い浮かべた相手は一樣に、自分達のヒーロー事務所
の所長にして、日本ではオールマイトに次ぐNo. 2と呼ばれる男の姿だった。

保須は首都と比べては榮えているとはいえ、ヒーローは少ない。粗方のヒーローは既
にこの敵の相手に出尽くしているといってもいい現状だろう。

「エンデヴァーさんが来るまで時間を稼げ! 誰もやられるなよ!!」

誰からとも無く、そんな激励を発していた。

それが彼らの限界だった。

ヒーロー達による奮闘が続く現場を漫然とした様子で眺めていた一人の青年がいた。

(エン……デヴァー……)

耳にした言葉に意識を向けると、まるで最初から知っていたかのように答えが浮かび
上がる。国内の中でNo. 2の実力を持つヒーロー。死柄木達が殺そうとする、オール
マイトの次に強い相手。

(あいつらじゃ……勝てない)

己の意識の中にあるエンデヴァアの戦闘データと、フレイズと命名された戦闘兵器の戦闘データを比較して、青年はそう結論づけ、困惑した。

(このままではフレイズが暴れられない。……それは死柄木の命令に反する。しかし俺が暴れてはならない。それは死柄木の命令に反する)

そこまで思考した結果、青年は途方に暮れたと言っても良かった。

彼自身には自覚は無いだろうが、彼の主である先生は、彼の自我こそ残したが、その判断能力はあくまで死柄木の命令によって左右されるといふもの。

言うなればこの状況は、命令の中に抜け道を作ってしまった死柄木の落ち度と言っても良かった。

己の思考が不完全である自覚も無いまま、青年の思考は続く。

(エンデヴァアをフレイズの元へ行かせるわけには行かない。しかし俺がエンデヴァアの相手をするのもできない。ならば……どうする……どう……)

深く、深く、深く……思案の中へ潜り続けていた青年の頭に、ふとそれは過ぎった。

言葉にするのは難しい感覚。

エンデヴァアや、フレイズの戦闘データを見つけた時とは似て非なるもの。

文字か、映像か。それさえも判断できないまま、青年はそれを声に出していた。

「……………ヒーロー殺し」

出した言葉を、その人物を認識するかのように、二度、三度と目を瞬かせる。

（そうだ。ヒーロー殺しとエンデヴァーを当ててしまえば良い。ヒーロー殺しの言う真贋のどちらかはともかく、足止めぐらいの役には立つはずだ）

次いで暴れているフレイズ達から目を離し、保須の街全体を見渡すように目線を流し、青年は頷いた。

（どちらも……分かる）

エンデヴァーとヒーロー殺し。

青年にも分らないが、何故か二人がどこにいるのか、漠然とした方向が分かった。ならば後は、二人が鉢合うように誘導すれば良い……。

（ここからなら……エンデヴァーが近い……）

一先ずの方針を定め、青年はフワリと、たっていた建物から跳躍した。

無意識に、体中に薄く炎を巡らせる。

誰にも気付かれる事無く、青年……「フレイア」はエンデヴァーの元へ向かっていった。

急転直下

「何でお前がそこにいる!？」

大通りに出てきた出久達は、逆方向の裏道から大通りへ出たグラントリノと鉢合っていた。

出久の受け入れ先であるグラントリノは出久の姿を確認するや否や、彼が身動きがとれず、プロヒーローネイティブさんに背負われている事さえ気にしていないように、軽い蹴りが出久の顔面に当てられた。

「座つてろつて言つたら!!」

しかしその後、彼らの雰囲気から大事には至っていない（一概にそうとも言いきれないが……）とは理解したのか、「まあ無事なら良いが……」と、小声でぼやかれる。

心配されるような事をしてしまったという自覚はあるから、出久も謝罪の言葉を口にしていた。

その様子に触発されたように、一番後ろを歩いていた飯田が静かに頭を下げる。

「皆……俺のせいだ、本当に済まなかった」

思わず飯田を見やる轟と出久の顔も見られないまま、飯田は悔恨の涙を流していた。

「何も……見られなくなってしまうっていた」

轟に言われた一言。出久と轟の目の前で見せられた決意。

この戦いは彼らにとっては、多くのものを得られた戦いだった。

そして、多くのことをそれぞれに考えさせられる戦いでもあった。

「僕こそゴメンね。君が追い詰めていること、まるで気付かなかった」

気付く機会は、いくらでもあったのに……。

言葉の裏に自らを責める言葉は隠して、まっすぐに飯田の目を見つめる。

「しつかりしろよ。委員長だろ？」

ぶつきらぼうな轟の励ましに頷きながら、飯田は涙を拭った。

時間としてはその戦いは5分から十分程度のものだっただろう。

しかし、何もかもが初めてであった出久達にはその何倍も長く感じられる戦いだった。

一件落着。そうとも言える結果に、彼らが互いに笑い合おうとした時……。

「誰だっ!？」

グラントリノの激しい声が響いた。

「え……?？」

「……………!」

「……………!？」

三人の子供達は誰一人気配など感じてはいなかった。

だが、グラントリノが出てきた反対側の方向。

その道路を挟んで出久達と反対側にある道からヒラリと一つの影が舞った。

「予想外だな」

抑揚の無い、涼やかな声音。

「まさかヒーロー殺しがやられるとは思わなかった」

ぶわりと、風に煽られて、火の粉が舞う。

「……………嘘だろ」

無意識に、そう呟いたのは誰だったか。

しかし、USJでその姿を目の当たりにしていた三人の子どもは一樣に言葉を失っていた。

敵連合とヒーロー殺しの繋がりを予期していた出久でさえ、その姿に反応できなかった。

ヒーロー殺しを眼前にした時とは、明らかに違う威圧感。

言葉を発することさえ躊躇われるような空気がそこにあつた。

以前の戦いの中で両手に灯していたものと同じ煌々と燃えさかる額の炎と、それと同

色の両眼は、辺りの薄暗さも相まって、彼がまるで三ツ目を持つかのような錯覚を与えてくる。

……人外。

逢魔が時に近い時間帯の今、その言葉こそがその姿には相応しく感じられた。

「フレイア……!」

誰も声を発せられない空間の中で、その言葉と共に息を?んだ出久は、その嚙下の音さえやけにはつきりと聞こえていた。

「嘘だろう……ありやあ」

初めて対峙するはずのグラントリノも、その反応は鈍い。しかし彼の理由は、フレイアに脅威を抱いたのでは無く、その容貌に関係があった。

(似ている……どういふことだ……?)

それはいみじくも、ヒーロー殺しが彼に抱いたのと同じ、懐古のような感情。

「……ジョット……!?!」

ヴィジランテ
自警団。嘗てそれを作った片割れの名を気付けばグラントリノは呟いていた。

真つ暗な空間の中で、俺は何かを聞いた気がした。

(なんだ……?)

しかしそれは、以前聞いた声とは違う。

ひんやりと、体の芯を冷やすような声で。

(なに……?)

ざわりと、体中の毛が逆立つような、変な感覚がした。
まるで。

(まるで……体中が、嫌がっているかのような)

漠然とした、おかしな感覚に俺は頻りに周囲を見渡す。

しかし周りには何も無い。ただ……真つ黒な闇が広がるだけだ。

(真つ黒な、闇……)

「まくろ」

耳元で囁かれたように、その呟きははつきりとしていた。

息遣いさえ聞こえるほどに、それは近い。

「せん……せい?」

紡いだ言葉に、微かな違和感を覚える。

何だろう。そう思うまもなく、言葉は思考の中に流れ込んだ。周りの景色はさつきと
変わらないはずなのに震えが走る。何かが違う。そう俺の中の何かが囁いてくる。

「吊り上げられた空。真黒な闇まぐろ。それがお前だ。その意味は分かっているね?」

断じられた言葉の意味は俺には分からない。いや、この人の教授においては分かる必

要など無いのだ。彼に教えられたのは、絶対的な命令の遵守。総ての肯定。……俺がしなければいけないことは、ただ受け入れる事だけ。

「まくろ。お前という「空」には何も無い。朝も昼も夜も、全ては存在しない。ただ闇があるだけだ」

先生の言葉はまるで心地の良い音のように、俺の中に流れ込んでいく。何故俺を「空」と称するかは分からなかったが、質問など許されないことだ。静かに俺は頷いた。

「嵐も雨も雷も太陽も、霧も雲も虹も大地も、天を照らす星でさえ……お前という闇には不要だ」

ねつとりとした声。しかし同時に、ここにいる限り俺が聞くことの出来る唯一の声でもある。

それに聞き入る俺の頭はまるで耳障りの良い音を聴かされているようにボンヤリとしていた。

「お前はそれを……知っているだろう？」

「はい……勿論です」

反射のように返すと、何故か俺自身も、あたかもそれが当然のことのように感じられる。

（そうだ。俺は、真黒な闇。だからこそ、そう名付けられた……）

……だから。

ふと頭に浮かんだ言葉。それを言うよりも先に。

「……………?!」

左手に走った熱に、俺は目を見開いていた。

「よせっ！轟っ！」

咄嗟のグラントリノの制止も空しく、炎が地を撫でていた。後方から伸びた炎に気付いたのか、ふるりと僅かに揺らいだ眼が、轟炎司……エンデヴァアの姿を認める。

視認されたエンデヴァアは、その瞬間凄まじいまでのプレッシャーを感じていた。

(なんだ……………こいつは……………!?)

反射的に臆したエンデヴァアは次の瞬間にそれを自覚して、ギリツと唇を噛みしめる。

湧いて出るのは臆した己への怒り。そして臆した事への憤り。そして己を恐れさせたものへの怒り。

その斜線上に子供達がいることさえも気付かないまま、エンデヴァアは再び高火力の炎を放っていた。

眼前に迫るエンデヴァアの炎から目を逸らして一瞬、背後にいる相手に目線を流した。

高齢のプロヒーローに、三人の子ども。

そして彼らの後ろにはヒーロー殺し。

ヒーロー殺しとエンデヴアーをつぶし合わせるつもりだったが、ヒーロー殺しは三人の子どもにやられてしまったようだった。

実力差を考えれば本来はあり得ない。

おそらく油断か何か……負の要因でもあったのだろう。

(このままじゃ、フレイズが暴れられなくなる……！)

再び思案をすること一瞬、弾かれた答えに従って、青年は両手から僅かに噴射した炎で、空中へ飛んだ。

「何?！」

驚愕に歪んだエンデヴアーの顔。最後まで己の背後にいた者達に気付かなかった所は愚かとしか言いようが無いだろう。

(ヒーロー候補生、そう思われる子どもを……誤って殺してしまったとなれば、これ以上は現場にいることは出来ないはず。上手くいけば、ヒーローの資格を失うかもしれない)

一瞬ではじき出したその答は、適切のように感じた。

死柄木弔の殺害対象はオールライトだけだが、障害は少ないに越したことはないはずだ。

(間違つて、ない……)

そう思われる。それが正しい筈なのに、青年の頭の中を過ぎつたのは焦燥感だった。
(焦っている?……何故……?!)

ズキツ。

次いで頭に感じたのは僅かな疼痛。

(な……に……?)

その直後、頭の中に響いた声に、強い痛みを感じて、青年は固くを閉ざしていた。

“目を覚ませ!”

その声を聞いた瞬間、ざわりと体に広がったものが何かは分からない。

(熱い何か……何かの毒物?……違う。エンデヴァーはそんなものを使うという情報は無いし、この場にいる他の面々には一方的に話しかけただけだ。仕込めるような要素は無かったはず……)

しかし死柄木や先生にしてはこのタイミングはおかしい。グルグルと空回りする思考の中で、しかし青年はその場から逃げることはしなかった。いや、逃げることは出来なかつたと言う方が正確だろう。ヒーロー殺しが使えない以上、暴れないまま、己はここに彼を引きつける必要がある。

(どうする……どうすれば……!)

明確な指針は全くと言っても良いほど定まっていない。眼前の向こう……子供達を嘗めようとする炎を眺めながら忙しなくその先へと青年の思考は移っていく。あの子供達はここで死ぬだろう。それが、青年の理性が訴える結論だった。

引きつる彼らの恐怖に怯える顔を見るのが恐くなり、瞬間目を瞑った。そこに一瞬だけ……ふくよかな女性が見える。

「……っ!!」

その瞬間青年を襲った痛みの理由は、青年には最後まで分からなかった。

眉間に皺を寄せ、覚えた嘔吐感を堪えるが、苦痛が自我を持ち、居座るかのように消えない。声にならない悲鳴を零した瞬間……その声は届いた。

「関係の無い子どもを殺す……それはお前が最も望まなかったことのはずだ……違うのか? デーチモ」

凜と響いたその声には、僅かな怒りのような物が込められているように感じられた。こちらに向けられた橙色の瞳が、青年の中の何かを刺激する。

エンデヴァーから発された炎が薙ぎ払われる。

見ると息絶えると思われるいた三人の子供達が、顔を青ざめながらも息を留めていて。……三人の子どもの左端、その真ん前に一人の男がたっていた。

「なんだ……お前は……っ!!」

声音を震わせた青年は、その男の瞳に言い知れない何かを感じていた。

あの瞳は……嫌いだ。

それだけは……断言できた。

迫り来るエンデヴァアの炎に、子供達は声を上げることさえ出来なかった。No. 2 と呼ばれる力は伊達では無く、ヒーロー殺しと対峙した時と同等の、死の気配を肌で感じた。

その中にいた出久には迫る炎がやけにゆっくりと感じられた。正確にはゆっくりなのでは無く、それ以上に己の思考能力が上がっているのかもしれない。俗にいう走馬灯と言うものもこのようなものなのだろうか。

(もう……ダメ……！)

肌感じる痛みに似た熱の熱さに、目を閉じようとした時、それを見た。

炎の中に見えた幾つもの影。それは体育祭の最終種目のトーナメント、その初戦に見た、ワン・フォー・オールを受け継いできた者達の面影によく似ていた。

(誰……だ?)

ただ、その時見た面影と違うのは、彼らが皆一様に、エンデヴァアのような炎の仮面を被っていることだ。

ある者は目元を、ある者は顔面を、その形は多々あれども、皆が示し合わせたかのよ

うに。

(あれ?色も、皆同じ……橙色?)

その色は、何度も見たものだ。

フレリアと同じ橙の炎。だが、痛みさえ感じるほどに、鋭利な形状をする彼の炎と異なり、彼らの炎は皆どこか丸みを帯びている。

何か関係があるのだろうか。そう明後日に行きかけた思考に、その声は響いた。

“つながりましたね”

“ギリギリといったところですがの”

“本当に行かれるおつもりですか”

頭に響くその声達には、一様に不安の色がある。

その中の一人が僅かに動いたのが見えた。頷いたのだろうか。以前見たワン・フォー・オールの個性に染みついたと言う面影は誰一人身動きなどしなかったのに。それが出久の中に妙な印象を植えつけた。

(そうだ。まるで……まだ生きているみたいって言うのかな?)

こんな絶望的な状況で考える内容では無いだろうが、これも一種の現実逃避行動だろうか。

出久の思考は止まらない。最も彼らはそれつきり誰も動く様子は無いので、出久に分

かるのは誰かが何かをしようとしている。それだけだ。

“……皆、後は頼むぞ”

最後に聞こえたその声は何故か出久の耳元で。出久が振り向くよりも前に、再びその声が出久の頭に鳴り響いた。

“済まない。勝手なのは分かるが……お前の炎を……少し借りるぞ。この世界のIX世よ”

その直後、己の眼前に映ったのは、黒いマントで。

「……へ？」

直後に開けた視界に、炎が消えた事実だけは分かった。

「関係の無い子どもを殺す……それはお前が最も望まなかったことのはずだ……違うのか？ X世」
デーヂモ

耳に届いた声は、頭の中に響いた声と全く同じもので。

「なんだ……！ お前は……っ!!」

空中に留まるフレイアの声は、心なしか震えているように感じた。

（何が……起きているんだ……？）

自分の知らない間に進んでしまった事態に対応出来ている訳では無かったが、体を包み込む奇妙な倦怠感に浸りつつも、出久は懸命に思考を回していた。しかし考えようと

すればするほど、その出所がいまいち明確にならない倦怠感の影響か、思考自体に切れがない。

周りからは何一つ音がしない異様な状況下で、出久はただ、その場の流れに身を任せ、事しか出来なかつたのである。

左手に感じた熱は、一瞬で消えた。

何だつたのだろうか？

首を傾げて漸く俺は、さつきまで俺と話していた先生がいないことに気が付く。

誰もいない、一人の空間。今し方の先生との会話が、何故か頭を過ぎつた。

『嵐も雨も雷も太陽も、霧も雲も虹も大地も、天を照らす星でさえ……お前という闇には不要だ』

改めて思い返して見ても、訳が分からない。

先生は無駄なことなど言わないのだから、単に俺の理解力が乏しいだけだろう。

闇の中に何も無いのは当たり前だ。

星が照らせば、それは夜空であつて闇じゃない。

(そうだ。……俺にはそんなものは不要なんだ。先生がそう臨むんだから……)

まるで己に言い聞かせるかのように心の中で呟いた言葉は、声になど出ていない筈だった。なのに。

「本当に……？」

その声は、何も見えない空間の中から聞こえた。思わず顔をあげるが、そこには誰もいない。

「本当にそう？俺はそれを望んでいるの？」

更に聞こえた声に、俺は耐えきれずに声を上げた。

「なんだ……！お前は……っ!!」

この時俺の頭を占めたのは、明確な怒りだ。それと同時に、胸の中にグルグルとした何かが渦巻く。

(ここは俺の中なのに！俺はそれを望んでいるのに……！お前は!!)

何も見えない真黒の世界。それが己の世界なのに、誰かが無遠慮にそこにいる。

まるで己の心の中に入り込まれたかのような苛立ちで荒らげようとした声は次の言葉で止まってしまった。

「本当に俺が望んでいるなら……何で俺達は泣いているの？」

そこにいたのは、俺と瓜二つの男の子。その子は大粒の涙を浮かべたまま、へにやりとこちらに笑いかけた。

「ねえ？……」

何事かを言った、その言葉は聞き取れない。

ただ雑音だけが耳障りに響いた。

ジヨットープリーモ一

(いや………違うっ……!!?)

目の当たりになっているだけで身動きが出来ない程の威圧感の中で、グラントリノは確信していた。

(これは……ジヨットじゃねえ……!!)

まるで双子かドツペルゲンガーのように、酷似した容姿。全く同じと言って良い声音。しかし、口を開く度に発せられる空気には、彼女が持っていた筈の暖かみが無い。

(第一………生きているわけはねえんだ! あいつらは、あの男に殺された!!)

市民の声によつて、ヒーローが公的職務となり、無個性と個性の軋轢が無くなるに連れて、彼女達自警団ツイジランテは姿を消した。

ヒーローの増加に伴い、自ら解体したのだ。

その素性は紛れもなく犯罪者であつたが故に、活動を停止しても彼らは敵予備軍として扱われ、警察からは監視を受けていたが、彼女は「そんなものは、気にしななければいいのとかわりないさ。置物とでも思えば良い」と、軽く微笑むだけだった。その様子は神経質そうに監視の人間の数を確認する夫であり、相棒である彼の方が余程苦勞してい

るのでは無いかというのが良く見て取れ、盟友であり、同じ故郷で、彼らに憧れてヒーローを志した志村と顔を合わせ、良く笑っていた物である。

(そう。全ては過去の話だ……そして、あの事件から、志村は己の受け継いだ力……ワン・フォー・オールの宿命と向き合うことを選んだ……！)

グラントリノの目には、あの時の記憶がまざまざと思い起こされる。自分達が訪れた時は、全てが手遅れだった。外見はまるで変わらないのに、散々に荒らされた内部。所々に飛び散る血飛沫。四肢を方々に散らばされ、夫であり、「G」と呼ばれた彼女の相棒は息絶えていた。

そんな状況下で、体の内部まで蹂躪されていたジョットに意識があつたのは彼女の「個性」による所が大きかったのだろう。戦闘には不向きだと笑っていた彼女の個性が、皮肉にも彼女に言葉を発する力を僅かでも残していたのだ。

「おし……ええ、だろ、なな」

言葉を発する度に口から溢れる血の塊。視力はほとんど無かった。ガラス玉のように、その瞳は虚ろだった。それでも……彼女は言った。

「りふじんな、この……せかいで、……つよい……のは」

ガハツと咳き込む音と共に、ピクンと体が痙攣する。弱々しい声と、体の反応は、如実に彼女の命の終わりを語っていた。

それでも、グラントリノも、言葉をかけられる盟友も、彼女の言葉を遮れ無かった。……そんなことをしても、助けられないと分かってしまったからだ。

「わらい……つづけた、やつだ……！」

……それが、彼女の最期の言葉だった。

『世の中、笑っている奴が一番強いからな』

そして彼女から志村に与えられた教えは、その弟子、オールマイトにも確実に受け継がれた。

（彼女は……ジョットは確かに死んだ！それだけは間違いねえ……！俺と、志村が看取ったのだから……!!）

混乱しかける思考の中で、グラントリノが放った問いかけが、事態の硬直を解くこととなった。

「お前は……一体何者だ？」

それは、いみじくも目の前にいる彼女によく似た敵と同じ問いかけ。

彼女に酷似した容姿の男は、俺をジツと見つめたまま、口を開いた。

「俺もジョットだ。だが……貴様の知るこの世界のジョットでは無い」

「お前は……一体何者だ？」

ジョットが炎を使っている影響か、脱力したまま動けなくなってしまったのだろうか

の世界の区世クセの近くにいた、彼とは年の離れたご老人の問いには、いくつかの思いが混じり合ったかのような複雑な色があった。

顔を見つめると、その表情からも多くのことが読み取れる。

不安、疑念、歓喜、否定、絶望、悲しみ……。

年を重ねただけあって、些細な言葉では表せない、何重にも意味が重なる重みがある。だからだろう。答えられる範囲であっても、答えてやりたいと気まぐれを起こしたのは。

「俺もジョットだ。だが……貴様の知るこの世界のジョットでは無い」

そして、視線を上に向けると、眉間に皺を寄せ、こちらを嫌悪の姿で見据える、変わり果てた子孫の姿が映った。

『いつも眉間にシワを寄せ……祈るように拳をふるう……』

フツと、ジョットの思考を掠めたのは、つい先日、彼の世界から逝ってしまった、大空の虹から送られた記憶の中で、彼女自身が言っていた言葉だった。

「変わったな……X世デーヂモ」

端的な言葉。こうなってしまったのは、彼だけの責任では無いとは分かっている。あの混乱の中、誰もこのような事態は想定出来なかったであろうことも。

(……ボンゴレリングの破壊を決断したX世デーヂモの力量では、ガラしか壊せなかった事だけ

は、僅かな救いか……!)

いや、それは力量だけの問題では無かったのかもしれない。そうジヨットは頭の片隅で思考を続けた。リングを巡つての争いを厭い、ボンゴレの有り様を嫌悪しても尚、^{デーチモ}X世はリングの中に息づく歴代のドン・ボンゴレと、それぞれの守護者のリングに宿る初代守護者達に対してでさえ、非情にはなれなかつただけなのかもしれないのだ。

リングに対する深い教養を持つ存在は、ボンゴレ本部にはいなく、全壊したリングがまだ生きている事に気付ける者はいなかつた。あの「神の采配」と謳われた九代目をもつてしてもだ。

^{デーチモ}X世には好都合だつただろう。

ボンゴレリングの破棄を決定し、守護者達のリングを全て集めて、^{デーチモ}X世は秘密裏に、ボンゴレに古くから仕える彫金師、タルボの元を尋ねた。

ボンゴレリングの残骸を預かってくれと頼み込んだのだ。

快く応じたタルボの好意によって、破壊された状態のまま、ボンゴレリングは保管された。

(破壊された残骸、成れの果て……その認識だからこそ、所在を知っていたらだろうかあの男も見向きもせず、まだ破壊されていない過去のリングの蒐集に拘つたのだから、皮肉としか言いようがないな……)

既に終わった事件の始まり、そのきつかけにさえ思いを馳せながらも、しかしジョットは横目で常にX世デーチモの動きを注視していた。

周りの者達はX世デーチモよりもジョット自身を警戒しているらしく、ジツと息を詰めて見守っている。

それを眺めながらも、ジョットは独りごちる。

(だが今となつては、このX世デーチモの決断には感謝しなければなるまいな……)

全壊していたからこそ、煩わしい騒ぎには巻き込まれなかった。

そして中が生きていたからこそ、今ジョットはX世デーチモに残る僅かな力の繋がりを辿り、この世界に立つていられるのである。

しかし観察を続けるジョットに対して、X世デーチモが向ける目には、嘗ての輝きは無い。予想は出来ていたとはいえ、悲しみは隠せなかった。

「やはり、正気では無いようだな」

「やはり、正気では無いようだな」

そう呟いて微笑むその人の空気は、明らかに戦いの中のそれではない。

敵であるはずのフレリアを見つめるその瞳にも、嫌悪や憎悪という負の感情は見られなかった。言うならば、子どもを見守る親のようと言うべきだろう。

この人は何なのだろう？

冷たいコンクリートに肌を着けながらも、出久の頭はぼんやりとした思考を続けている。

彼がここに現れてから、もう随分と長い時間が流れてしまったかのように感じる。

正確な時間を知る術は無いが、いつまで時間を稼げるのか、それは出久には分からなかった。

(大体この人、どう考えても正規のヒーローじゃないよな!?)

今更と言えるかもしれない事に改めて思い当たり、出久の額に冷や汗が伝う。

先ず彼はこの場に現れた時から尋常では無い雰囲気が強いのだ。強さとか、そのような次元とはまるで違う。

(最初はオールマイトが言っていたワン・フォー・オールに染みついた面影と思っただけ、面影なら現実の世界に現れるなんてことあるのか!?)

面影の事についてはオールマイトにも僅かにさわりだけ教えて貰った程度だった。最後には上手くはぐらかされたような感じさえ覚えたがあの時あまり重要には感じなかったので出久はそのまま流されたのだ。

(こんなことになるんなら、もう少し詳しく聞いておくんだっ……!!)

内心歯がゆく思いながらも、動けない出久には出来ることはなく、頭の中で考察しようにも材料が足りない。

現状を見守るしかない己に自己嫌悪にも走れない出久の頭に、その声は届いた。

“……この世界の継承者達のこととは知らないが、俺のことならこの事件が終わったときにくらでも話そう。だから今は落ち着け。IX世^{ノウジ}”

「うえっ?!」

突然聞こえたその声に、出久は現状も忘れて声を上げた。当然のように集まる視線に咄嗟に見える黒マントを見つめるが、彼は微笑み一つ浮かべない。

(もしかして幻聴? 僕そこまで疲れているのかな?)

“いや、俺がX世^{デーヂモ}から形成されている道を辿ってお前に思念を送っているだけだ。だから他の者には聞こえていない”

思わず己の正気を疑ってしまった出久の頭に再び声が届いた。それに再び声を上げそうになった出久は、その言葉の中にあつた気になる単語に意図的に頭を冷やす。

(……えっと、形成されている、道って? つまりこれは僕限定のテレパシーって事ですよね?)

声を出すと怪しまれるのは分かるので、こちらも心の中で話すように考える。どうやら相手には本当にそれで十分だったらしい。

“そうだ。思っていた以上に飲み込みが早いな”

返答には僅かな感心の色が含まれていたが、気にせず出久は思考を投げる。

(その道が僕とフレイア……あなたがX世と呼ぶ彼限定で？がっているって、どういふことですか?)

「理由は俺にも分からない。おそらくこの世界で独自に発達した力による物だろう。俺達の持つ力にはそのような性質は無いのだが、X世の場合はこの世界へ無理矢理連れて来られた時に、あの男によって入れられた器の中の力と、融合反応を起こし、力自体が変質してしまっているようだ」

平然とした声音で淡々と紡がれた言葉。だがその内容なすぐには噛み砕けない程の理解の範疇を超えた危険物の連弾だった。少なくとも出久にとつては。

「いえーちよつと待って下さい!!何ですか!?!それ!!なんかツツコミ所しか無いんですけど!!」

思わず声に出してしまった出久を一体誰が責められるだろうか。

「……お前、何をしている!?!」

その出久の反応に、怪訝な目を向ける飯田や、轟、グラントリノよりも先に、彼らへ手を出したのは、対峙していたフレイアだった。

「……全く。もう少し冷静さを身につけるべきだぞ? IX世。内緒話をしていたことが、X世に知られてしまったのではないか」

攻撃をしかけられる男の方も最早隠す気は無くしたのか、どこか茶化すような口調で

出久の方へ話を振り。

「……………?!」

それと同時に橙色の炎が横薙ぎに広がり、フレイアを弾いていた。

「随分と微弱な炎圧だな? X世^{デーチモ}。加減をしているわけではないな。おそらくお前の中に己を形作る確固たる覚悟が無いのが原因か」

涼しい顔でフレイアの戦いを検分すらしている彼は、その余裕を前面に押し出すかのような微笑みまで浮かべている。

(……………と言うか、あんな笑顔していたら、逆にフレイアの怒りに火をつけるんじゃない?!)

僅かに離れた男と、それとやり合うフレイア。二人の同色の炎を見ながら思考する出久の頭に再び男の声が響く。

「だからだ。X世^{デーチモ}が冷静さを欠けばその分、こちらもやりやすくなる……………時間もあまりとれそうも無いしな」

最後に付け加えられた意味深そうな言動に、再び思考で問いかけようとした出久はゾワリと体中を駆け巡った異変に目を見開いた。

「フム。やはりあの横薙ぎ程度の炎だけでも、IX世^{ソリー}にかかる負担は計り知れないな。最も、この世界では「死ぬ気の炎」があちら程発達していないのだから仕方がないとも

言えるのかもしれない。”

淡々と言葉を紡ぐ男には悪いが、出久には、その思考の意味はほとんど理解できなかった。

分かるのは、己の体の状態が先刻までと比べて明らかに悪化しているという事実である。

「フム。……やり合うだけでは正気に戻るとも思えんが、どうするのが吉となるか……」

何かに急かされるように力をふるうフレイアを紙一重で躲しながらも、男……ボンゴ
フリーモ
レI世こと、ジョットも訪れた膠着に眉を顰めていた。

元々あの世界でも既に死した存在である自分達だからこそ、ここまで早期に世界を越えることが出来たのだが、肉体の構築には思っていた以上にリスクが付きまとうようだ。

（あの様子ではX世デイチモの守護者達も遅かれ早かれ何人かはこちらとの境界線を越えようとするだろうが……果たして何人がこの世界におかしな影響を与えることなく来られる物か……）

そこまで考えたI世フリーモは、件の守護者達を思い浮かべ、あまりにも不毛な思考に終止符を打った。

（考えても無駄なようだな。おそらく来た者が皆例外なく、何らかの影響を及ぼすだろ

う……！）」

そして、彼らはそれをも覚悟の上で来るのだろう。たった一人の存在を取り戻すためだけに。

（せめて仲間の声が届くよう、正気だけでも取り戻してやりたかったのだが……どうやらそれすらも難しいようだな……）

そう思考するI世と対峙するX世は、おそらく視野さえ狭まっているのだろう。背後からの殺気に反応が遅れる程度には。

「世話になった。後はこちらに任せて貰おう」

X世の肩を掴んだ巨漢が、そのままX世を投げ飛ばし、大通りの反対側迄距離が開く。

「ご老人。今のうちに子供達を連れてここから離れるぞ」

こちらを凝視する高齢の老人からあえて視線をそらして、I世はさり気なくX世を担ぎ上げた。彼の炎を使ってこの世界の肉体を構築している以上、あまり離されると肉体が崩壊してしまう危険性があるからだ。

改めてX世以外の子どもに目を向ければ、皆が一様にI世に警戒心を抱いていることが見て取れる。

まあこのような状況下では致し方ないと言うべきだろう。

「あんたは何者なんだ……！ああのフレイアという敵と顔見知りなのか……!？」

強い眼差しでこちらを睨みつけるのは、X世デーチモの霧の守護者を彷彿させるような色違いの瞳を持つ少年だった。

疑われても仕方がない状況と割り切っているが故に、その反応には何の感情も動かない。それが相手には無言の肯定に見えたのだろう。敵意を向けて、身構えられる。

(これはまずいな……！)

咄嗟にそう判断してI世フリーモが口を開くよりも前に、その場に怒声が響き渡った。

《どこで油を売っている！フレイアっ!!》

通信機器越しに聞こえた声に瞬間思考は止まっていた。

暴れるな。暴れさせろ。

死柄木の命令が頭の中で蘇り、動きが止まったフレイアの体に、炎を纏ったエンデヴァアの拳が容赦なく命中したのである。

「……ぐっ！」

咄嗟に後ろへ下がったが、脇腹を掠ったのか、腹部にひりつく痛みが走る。

《フレイズが壊れた！遊びは終わりだ！さっさと戻ってこい!!》

こちらの状況など気にせず、発せられる命令に従い、踵を返そうとするが、それで逃がしてくれるほどNo. 2は甘くはなかった。

「逃がさん!!」

一声と共に巻き上がる炎にフレイアは苦い顔を浮かべる。

チラリと見やる裏路地への道は、二つの中間をエンデヴァーが陣取っているせいで向こうの良的になる。かといって大通りを挟んだ反対側の裏路地は、袋小路だ。逃げ場とするにはあまりにも危険であった。

(空へ逃げるか……う？だがあの男は……！)

懸念の元となるのは、いきなりあの場へ現れた一人の男。彼の橙色の瞳は、言い知れない何かをフレイアに与えていた。

言語化することは難しい。時折感じる感覚が、男から目を逸らすなど訴えてくる。

(戻らないと、死柄木が……先生が……!!)

命令に背く事は許されない。だが現状が命令の実行を阻害していた。

(どうすればいい……!? どう、すれば……っ!!)

知らず知らずの内に息が上がっていく。過呼吸が起きているのか、頭の中に霞がかか
る。

“本当に、分からないの？”

周囲には、既に確認した敵しか居ないはずだった。

しかしこの時フレイアの耳には、その誰とも違う声が響いた。

(……なんだ？この声は何者だ!?)

自らがIX世の元へ行くために使ったX世の力によつて作られた道。そこに混ざった雑音に、I世は目を見開いていた。

瞬時に浮かんだのは、X世を元の世界から連れ去った者による何らかの罫である可能性。しかしそれならば、同じ道の先にいるI世に何故被害が起こらないのか、あの者からしてみれば、I世達、世界の境界線を越える者は邪魔者に他ならないはずなのに。

「嘘だよ。君はもう……薄々でも、分かっているはず」

声はX世よりも明らかに幼かった。

声変わりもしていないだろう、高めな声。まるで幼子のような舌足らずな言葉。

「止めろ……！……！」

突然、X世が頭を抱えて叫び声を上げた。事情をわからない者達は、一様にその姿に

目を丸くする。

そして……対峙していた巨漢はその隙を逃すほど愚かではなかった。

「X世っ!!」

咄嗟に声を上げていた。

しかし、IX世を抱えたままであったI世には、助けに向かうことは出来なかった。

(思えば矛盾しているのかもしれない……！X世を助けたいと思いつつも、彼と敵対しているだろうこの世界のIX世を守ろうとしている……！)

しかし、I世の直感フリーモは訴えるのだ。どちらも諦めてはならないと。

そして己の直感の力を知っているが故に、I世フリーモは動けなかった。

「……………!?」

「……………え？」

ジョットが、背後に目を向け、出久が呆然と正面を見た。その時、いくつかの事象が同時に起こった。

「……………くそっ……………!」

「轟君?!」

轟の呻き声と、飯田の張りつめた声。グラントリノは地に力なく倒れた轟焦凍が握っていた縄の先に、誰もいないことに遅れて気付いた。

頭を抱えて、拒絶の声を上げていたフレイアは、反射的に目を瞑り……………それを見た。

黒鉛筆で塗り潰されたような真黒な空間。そこにいた、二人の、子ども。

そして……………。

次に頭の中に流れ込んできたのは、どこかの町中の映像だろうか。並んで歩く、三つの影。それらは皆、酷くぼやけて細部は分からないが、おそらくはまだ子どもだろう、未熟な体をしていた。楽しそうに歩く彼らの姿をどこかで見たことのあるような気がした。

(どこで、見た？俺は……彼らを、この光景を……)

それを知る前に、映像はぼやける。

……曖昧になる、それは。

(これは……俺の……！)

深く思考に潜っていたのはどれほどだっただろうか。微かな息遣いが、頬を撫で……俺は目を開けていた。

「お前は、奴らとは……違う……！」

そこに立つ血まみれとなった、ヒーロー殺し、ステインは、脇腹を炎に焼かれながら、それでもまだ強い感情のこもった視線で、フレリアを、そう呼ばれる子どもを射貫いていた。

「……っ!？」

そこにある確かな自我を認めたのは、この時彼の眼前にいた、ヒーロー殺しだけだった。

「本物であるお前には……生きる義務がある」

生きる事を強要しながら、ヒーロー殺しは笑った。

「お前と死柄木がどのような信念を持って生きるのか……俺に見せてみろっ……!!!」
その絶叫とも呼べる叫びに、エンデヴァーは動きを止めていた。

そして、フレイアと呼ばれる彼は知る由はなかっただろうが、それは轟、飯田をはじめ、^{ブリーモ}I世の傍にいた者達も同様であった。

(^{デーチモ}X世……)

唇を噛んで、その場から駆けだした彼を見ながら、^{ブリーモ}I世、ジョットの力は、最後の最後で、彼が正気を取り戻した事を教えてくれた。

(……俺は、これで正しかったのだろうか?)

ふと、この時彼の頭に浮かんだのは不安だった。

^{デーチモ}X世に不要な殺戮をさせたくない思いから、彼はこの世界の^{ノイ}IX世に手を貸した。

変質してしまった^{デーチモ}X世の力に弾かれ、彼の炎を使えなかったことも、^{ノイ}IX世に手を貸す

ことを決めた一助にはなったが、それは結果論だろう。

(周りに味方のいない^{デーチモ}X世の事を考えるのであれば、彼を手助けすることの方が、^{デーチモ}X世の心を守ることはなるのかもしれない……だが)

この時、^{ブリーモ}I世の心を占めたのは、未だ姿が分からない、元の世界から^{デーチモ}X世を連れ去り、今も良いように彼を利用しようとする者達への怒りだった。

(たとえ、俺が^{デーチモ}X世に恨まれたとしても、奴らから^{デーチモ}X世を救い出さなくてはいけない……！)

それが、この事件の、それが起こるきっかけとされてしまった、嘗ての戦いの元凶と

なったあのリングの最初の適合者であった、自分なりの責任だった。

「どこをほつつき歩いていた」

そう零した死柄木は、給水塔の上で炎を纏って飛んできたフレイアを睨めつけ……その瞳に宿る強い意志の籠もった光に眉を擡めた。

「済まない。……帰ろう。死柄木」

死柄木を見据えるその目には、はつきりとした意思が、ある。別れる前とはまるで別人のようなそれ。そこには死柄木よりも遙かに小さな物であったが、確かに微かな怒りと憎悪があった。

「……まあ。良いか」

それを見た死柄木が何を思ったのか、それは死柄木にしか分からないだろう。微かに笑みを浮かべながら、死柄木は踵を返した。

「明日が……楽しみだな」

そうして、保須で起こった一連の事件は幕を閉じたのである。

I世とIX世と……

「さて……では何から話すべきだろうか？ IX世^{ノイ}」

泰然自若。その言葉をその身で体現する男に、出久が感じたのは何だったのか。後から考えても出久にはよく分からなかった。

「約束しただろう？ 俺とX世^{デーチモ}に関するのなら、何でも話してやると」

そう言いつつも微笑む男の背後に見えるのは、見渡す限りの大草原だった。

しかし、出久の記憶が正確ならば、ヒーロー殺しが警察によって逮捕された後、負傷していた出久、飯田、轟の三人は、そのまま保須総合病院に入院した筈である。

いきなりこのような大自然の中に放り出される理由がわからない。

そもそも目の前にいる男は一体何者なのか。

その答えが明かされないまま有耶無耶になっていた事に遅まきながらも出久は気づいた。

敵連合の一角であるフレイアをX世^{デーチモ}と呼び、親しげな様子を見せていた男。

突然出久達の目の前に現れた彼が正規のヒーローで無いのは一目瞭然で、更に周りの話によれば、警察が現場に来るまでのざわつきの中で彼は忽然と姿を消していたのだと

言う。

入院してから眠りにつくまでの間に、周囲からそれとなく伝えられた内容を思い出して、自然と出久の警戒心が頭を出した。

彼らが出久にそのように、積極的に情報を伝えていたのは戦闘中に彼が出久に対してのみ気安い様子で話しかけていたからなのだが、それは出久の知るところではない。

「貴方は……」

警戒心から続く言葉を出久は紡ぐことが出来なかつた。

ここはどこなのか。敵なのか味方なのか。そもそも本当のことを相手は話すのか。何の情報も無い中で、自然とその口は重くなる。

「……まあ、信じられないと思うのも無理はないな」

僅かに口を開きながら再び口を閉ざした出久は、いきなり本心を言い当てる形となった男に、目を丸くした。

「驚かせてしまったようだな。済まないが、そういう血筋なのだ。多少心臓には悪いかもしれないが、諦めて受け入れてくれ」

出久のような反応に慣れているのか、薄らと苦笑いを浮かべてた男は、「まずは座ろう」と、右手を指し示した。

「……へ？」

示された方に目を向けると、そこにはお洒落なカフェテリアの野外席のような白い長足の脚の円卓と二脚の椅子の姿が。さつきまでは無かったはずの姿に、出久は首を傾げていた。男の方に気をとられて気づいていなかっただけなのか。それとも他に理由があるのか。

考え込む出久をどこか微笑ましそうに見つめながら、男は腰を降ろす。その男の様子に、座つても危険は無さそうだと判断して、出久もまた腰を降ろすと、男が突然居住まいを正した。

いきなり神妙な表情を作る男につられて、出久も背筋を伸ばす。両手を膝に置き、背筋を伸ばす姿はまるで面接試験に臨む受験生だ。

「まずは謝らせて欲しい。……非常時だったとは言え、お前の「炎」を無断で借用してしまい、本当に済まない事をした」

椅子に座ったまま、深々と頭を下げた男の潔い態度に出久は反応に戸惑った。

(……って、いうか)

「あの、炎って、何ですか?」

いや。出久とて、一般的な炎の意味は分かる。

しかし、男は出久の「炎」と言った。

爆豪と異なり、出久の個性に炎は出ない。父親から個性を受け継いでいれば口から火

を吹けたのだろうか、残念ながら出久は生まれたとき、両親どちらの個性も引き継げずに、「無個性」として生まれてきた。

オールマイトに見いだされ、彼の個性である「ワン・フォー・オール」を継承したが、その効果は単純な身体増強でこれまた炎とは縁の無い個性である。

「ああ、そうか……そこから始めた方が良かったな」

困惑顔の出久を見て、フムと頷いた男は改めて顔を上げ、出久と向き合った。

「死ぬ気の炎」と、俺達と呼んでいる。命ある全てのものに、等しく存在する、生命力の事だ。その生命力は波動となって体内に流れていて、俺達の世界では、それをリングに覚悟として宿すことで戦う為の手段として用いていた」

「せ……生命力って!?!」

あまりにも突拍子の無い話に、出久の声は裏返っていた。つまりこの男は、出久が気づかない内に出久の命を削っていたということだ。そこで出久は数時間前の戦いで、男が大量の炎でフレイアの炎を防いだときに急激に体の調子が悪化した事や、そもそも男が目の前に現れた直後、原因のわからない倦怠感に襲われていたことを思い出した。

「つまり俺の寿命が削れたって事ですか……?」

飯田や轟はおそらく疲労か何かだと言っていたのに、余りにも深刻になってしまった現状に、思わず泣きそうになる。

それに慌てて男が制止をかけてきた。

「いや！ そのような事になるのは「命の炎」を燃やした時だけだ！ 死ぬ気の炎を多少消費した程度では精々気力や体力が一時的に落ちるだけだ。しっかりと休養を取れば、大事には至らない!!」

酷く慌てた様子の男に一瞬呆気にとられた出久は次にホツと安堵の吐息を吐き出して……ふとそれに思い当たり、冷や汗を浮かべた。

(あれ? ……つまりその「命の炎」を使えば、そうなるつて事だよな?)

思い浮かべた想像があまりにも恐ろしかったので、それ以上考えることを止め、数時間前の戦いに意識を向ける。

「つまりあの時貴方が使っていた炎は、全部俺の持っていた生命力だったんですね? ……でも、死ぬ気の炎なんて、聞いたこともないんですけど」

つつい、いつもの癖でノートにメモを取ろうとするが、考えて見ればここにはノートも鉛筆も……。

「あつたあ?!」

確かに、さつきまで何も置かれていなかったはずの円卓の上には何故かノートが置かれている。しかも背表紙には「将来の為の……」と、それが僕の愛用の品であることをしっかりと示している。

「な……なんで?!まさか、僕の拉致と共に家から……じゃない、グラントリノの事務所から盗んできたんですか!？」

動揺から少しばかり支離滅裂になっている自覚はあったが、出久は止まることは出来ない。取りあえず、気を落ち着かせる為にも余白のページに男の話から得た知識を書き留めていく。

「別にお前は拉致したわけではないし、このノートも盗んだわけではない」

性急な様子でノートに書き付ける出久を、向かいの椅子に座って眺める男が釈明のように言葉を続ける。

「ここはお前の精神世界……心の中だ。現実のお前は今も病室のベットの所で眠っている。俺はお前の炎を使わなければ現実に干渉することは出来ないからな。お前は今、夢を見ているようなものだ」

「夢、夢か……成る程。じゃあここにあるノートも書いた内容も現実には反映されないって事だな。あれ?でもじゃあこの人は何なんだ?僕の夢の産物にしては……」

「俺は夢ゆめまぼろしでは無い。ただ既に死んでいる身なので、このような形でしかいられないだけだ」

出久のブツブツ考察を律儀に聞き取っていたのか、男は出久の質問に答えてくる。成る程と再び頷いた出久は再び男の言葉を反芻して……。

「それって……幽霊ってこと？」

「有り体に言えばそうだな」

恐る恐ると尋ねた出久に、何の気負いも無く言い切った男はどうした？と首を傾げている。

(幽霊にしては、人間味あり過ぎるんだけど……)

若しくは、生前の性格が、このようなものだったのかも知れない

そう己に言い聞かせながら、出久はある疑問を覚えた。

「それでどうして……僕に取り憑いているんですか？知り合いだったのなら、フレイア……貴方のいう、えーと……」

何とか疑問を口にしようとしたが、彼の言い放った外国語が分からずにつまってしま
う。

(あれ？外国語と云えば、この人。俺のことも似たような言葉で何やら言っていたよ
うな……)

内心で必死に思い出そうとする出久には気づかないのか、男は目を瞬いて軽く頷く。

「X世だ。俺はI世デーチモと呼ばれていた。お前はIX世ブリーモだろう？」

最後は何故か問い返された出久は思わず動きが止まった。出久としてはまずは、その言葉の意味が分からないのだが、違うのかと首を傾げる男はやはりどこかズレていた。

「えつと……まず、その呼び名は何なんですか？」

「何とは……継承の順番だが？俺はI世^{フリーモ}。一番……つまり始まりの継承者だ。お前達がフレリアと呼ぶX世^{デーネモ}は、俺から数えて十番目。お前は九番目だからIX世^{ノル}であっているだろっつー」

訳が分からないと首を傾げる男、I世^{フリーモ}さんには悪いが、出久にもよく分からなかった。

（それに、僕とフレリアには接点無いはずだ。継承つて、一体……。……っ！）
『九人目の継承者がこんな湿った男とは』

職場体験にグラントリノの事務所を訪れたその当日、グラントリノ本人から言われた言葉を思い出して、出久は血の気が引くのを感じた。

（この人……ワン・フォー・オールの事を知っているのか!?!）

オールマイトに絶対に他者に知られてはならないと言われた秘密。

今まで前例の無い「譲渡する個性」の存在を知れば、奪おうという輩が出ることは必死。

出久の安全を守るためにもと、言われていた言葉を思い出す。

（いや、でも一番目の継承者つて……つまり、譲渡をする前の最初の持ち主!?!でも……）

頭の中でグルグルと回りかけていた思考のままに、出久は言葉を飛ばしていた。

「待って下さい！俺は、フレリアにこの個性を渡す気はありません！」

この男……I世フリーモがたとえ、太古の昔、最初のワン・フォー・オールフリーモの所有者だったとしても、出久の次代を決める権利には彼にはないはずである。

たとえあつたとしても、相手は敵連合の一角、フレイア。以前のUSJの戦いでは相澤先生を始め、多くのクラスメートも危険に晒し、今回の戦いでも自分達を殺そうとした。決してこの個性を譲渡するわけにはいかない。

強い睨みでI世フリーモを見据えている出久に、当の本人はキョトンと、首を傾げていた。
「個性？……なぜこの世界固有の力の名称が出て来るのだ？」

首を傾げられた出久も訳も分からずに目を点にする。もしや出久の思い違いで彼の言う継承云々と、あの個性は全く関係ないのだろうか。もしそうなら、逆に尋ねられてはまずい情報を渡してしまったかもしれない。さっきまでとは違う理由で顔を青ざめていた出久の耳に、「ああ」と、どこか納得したような声音が返ってきた。

「成る程。この世界では「個性」として伝わっているのだな」

「……はい？」

「そうだな。考えて見ればあの時、お前の意識はここに非ずな状態だったのだから説明し直すのが礼儀というものだ」

一人納得するI世フリーモには悪いが、出久としては話について行けないと言うのが正直な所だった。従って、仕方なくも聞く態勢を取るとI世フリーモはどこから取り出したのか紅茶の湧

いたティーカップのセットを持っていた。

(いや、夢の中なんだから、聞くだけ無駄か)

コポコポと音をたてて注がれる色は黄みがかった琥珀色をしていた。

出久は紅茶の銘柄には詳しくないのでその茶葉の種類までは分からないが。

「さて改めて自己紹介からしよう。俺はI世。^{ブリーモ}こことは違う別の世界でお前と同じ、縦の時間軸を継承してきた者の一人だ。因みにおれの世界の今代の継承者がお前達がフレイアと呼ぶX世^{デーチモ}で、俺の直系の子孫に当たる」

「……はい?……はいっ?!」

ただ聞き役に徹していた出久だが、それでも与えられたその情報を聞き返していた。

「ベ……別の世界?!それに、縦の時間軸って、一体……!」

「……取りあえず、更に詳しい説明が必要なようだな」

先の長くなりそうな説明会に、どこか憂鬱なように溜息をつくI世。^{ブリーモ}

しかしその会話が進まない要因に己の下手な説明も一役買っていることに、彼はまだ気づいている様子は無かった。

フレイアの正体

「平行世界……と言う言葉を知っているか？ 出久よ」
バラレル・ワールド

あの後、混乱から立ち直った出久が最初にしたのはIX世ノイノと呼ぶのは止めてほしいという頼み事だ。

首を傾げるI世フリーモに、「譲渡する」個性である「ワン・フォー・オール」の詳細と、それが知られる事で起きる個性の強奪を企む悪しき者達の危険性を訴えた。

「成る程……隠蔽のみが確実な防衛手段となるわけか……」

そう、渋々ながらも納得してくれた。

「しかしそれでは、いざ明るみに出してしまった時はどうするつもりだ？ その言い分では、心を開ける仲間さえ、お前は作れないと言うことではないのか？」

それが力を受け取る者の宿命なのだから仕方がないのだと、出久が宥めようとするが、目に見えて彼の眉間の皺が増えていく。

「……機会があれば、一度お前の前任であるVIII世オウタケオと、しっかりと話をしてみたい所だな。

……その様な方針では、芽吹くものも芽吹かんぞ」

何とも含みのありそうな笑みを浮かべながら呟くI世フリーモの姿に薄ら寒さを感じながら

出久は素肌を摩る。

「さて、お前達の世界のことは分かった。……次は俺達の世界のことを話す番だな」
 場の空気を切り替えるかのように話題を変えたI世は、しかし次の瞬間、困ったように眉を寄せた。

「ふむ。これは困ったな……いざ話すとなると、どこから話したのか検討がつかん」
 そう呟き、悩むように唸り始めたのである。

「えっと……じゃあまず、貴方が言っていた、別の世界から来たって所を詳しく聞かせて貰えませんか？」

見かねた出久がそう助け船を出し、それに乗ったI世フリーモが発したのが今し方の言葉である。

「平行世界……超常が起きるよりも以前に提唱された世界概念の一つですよ。この世界は幾つもの可能性の集まりによって成り立っていて、その選択一つで全く異なる世界に行き着く……って言う……」

出久が引っぱって来た情報はネットの流し読みの副産物と言って良いガバガバな内容だった。このようなオカルト系にはまるで興味を持てなかったのもあって、詳しい事は改めて調べてみなければ分からないだろう。

その為、どこか自信なさげで届けられた出久の答えに、しかしI世フリーモは声色一つ変える

ことなく、頷いて見せた。

「その通りだ。この世界に起こりえる「もしも」の数だけ、分岐する世界が存在するとい
う考え方。……この時代で分かり易く言えば「超常」が起きたか否か。それだけでも全
く違う世界が生まれるだろう」

何かに思いを馳せるように言葉を紡ぐI世^{フリーモ}を眺めながら、出久も彼の話した情報を咀嚼し理解する。

「それで……その理論とその別の世界って、どういう関係が……。……あれ？まさか
……………」

自らの思考に浸っていた出久は一つの可能性に思い当たり、たちまちの内に顔を強ばらせた。

それを見ていたI世^{フリーモ}も、出久がその答えに辿り着いた事に気付いたようだ。

微かに咽を上下させた後、覚悟を決めたようにまっすぐに出口に視線を向けた。

「もしかして、I世^{フリーモ}さんの言う別の世界って……」

もたらされた僅かな沈黙に耐えきれずに、声を上げた出久にI世^{フリーモ}は黙って頷いて見せた。

「そうだ。俺は……この世界から見た「もしも」の世界の一つから来た……何者かの手によつて、この世界に浚われたX世^{デーネモ}を追つてな」

X世デーチモと、出てきた名前に目を見開く出久には当然気づいているのだろう。苦笑を浮かべたI世フリーモは沈んだ声音で続けた。

「誰の責任と、一概に名をあげることは出来ないことだ。おそらくこの世界に起きた超常によつて生まれた、何者かの個性によるものだろう。……本来ならあり得ない筈なのだ。平行世界バラレル・ワールドから人を連れてくるなどと言うのは、只人がやつてはならない神の領域を侵す行為。……当然、無理矢理連れて来られたX世デーチモもまともな状態にはなり得ない筈だった」

淡々とした口調で説明する彼の表情は俯いているせいも窺えない。

沈んだ声音も相まって、出久は言葉をかけることが出来なかった。

「しかし、連れ去つた相手もバカでは無かつたらしい。おそらく早い段階で、X世デーチモをただこの世界に連れてくるだけでは奴らにとつての使いがつの良いものにはならないと言ふことは予測できていたのだろう。……俺から見ればかなり非人道的な手段でX世デーチモを囲い込んだのだ」

「非人道的……つて」

沈痛な面持ちのI世フリーモに、出久も二の句を迷ふこととなる。

元々、出久は平行世界バラレル・ワールド云々には詳しくは無い。

個性が発達した世界であつてもそのような多次元的な世界の証明など出来ず、おとぎ

話のようなものとされている風潮がそれに拍車をかけていた。

「……平行世界とは、もしもの数だけ存在する似て非なる世界だ。……そこに住まう人々もな」

どこか論点がズレた所を話題にし始めたI世に、思わず首を傾げると、要領を得ていない事は分かっているのか、本人も苦笑する。

「平行世界と呼ばれる世界に住んでいるのは何も怪物では無い。その世界に違いは多々あれども、住んでいるのはお前と変わらない人間だと言うことだ。出久」

「……まあ。そんなんでしようね?」

未だに言いたいところの着地点が分からず、戸惑いを前面に押し出す形となつてしまった出久の言葉に、

「そう。何も変わらない。だからこそ、平行世界の間においては、「もう一人の自分」という物が存在し得うる」

あつさりと言いつつI世に、それでもまだ出久は話の方向性が理解することができず、生返事を返していた。

そんな出久の姿に、どこか懐かしそうな、それでいて悲しそうな顔を見せるI世が放つたその一言が、超弩級の爆弾だった。

「お前達が「吊空真黒」と呼ぶ存在。……それこそが、X世の「もう一人の自分」だ」

「……………へ？」

放たれた爆弾の内容を、数拍遅れで理解した出久は次の時点では、返す言葉を探す事さえ暫し忘れ、大きく目を見開いたまま、アングリと口を半開きにしていた。

「……………出久は少々、ポーカーフエイズとやらを覚えた方が良いのではないか？」

その様子を思いだす度に、I世プリモに何度もそう揶揄されるようになるのだが、それはまた別の話である。

「何だって!？」

同じ頃、出久達がすっかり寝入っている深夜、雄英高校仮眠室にて、「平和の象徴」と呼ばれるナンバーワンヒーロー「オールマイト」は彼曰く、一番親しい警察官、塚内から俄に信じがたい話を聞かされていた。

「「吊空真黒」が……………亡くなった?!」

突如伝えられた訃報に、しかしオールマイトが感じたのは悲しみではなく、釈然としない感情だった。浮かべた表情から、対面した塚内にもその感情は分かっただろう。

「敵連合」の貴重な手がかりとして部下に監視を任せていたであろう彼は、沈痛な声音で謝罪してきた。

「おそらく……………偽装だろう」

そう塚内が続けた根拠はいくつかあるが、一番はタイミングが良すぎるからだ。ヒーロー殺し逮捕のニュースは、夕方に速報が流れ、夜にはそこに敵連合との繋がりがあるのは明らかと、どの放送局も声高らかに取り上げている。

ヒーロー殺し、ステインは多くのヒーローに、被害を出し、その犯行が明るみに出る度に、正体や目的など、多くの推測が飛び交っていた。

当然、高視聴率が見込めるほどの内容を見逃すほど、テレビ局の人間も甘くは無い。そんな背景も手伝って、雄英を襲撃していた敵連合の一人と酷似した個性と類似する個性を持つ複数の者達が同時に、同じ保須市内で暴れ回ったこと。他ならない類似した個性を持つ敵連合の本人がヒーロー殺しと共に、ヒーローに目撃されたこと。更に、敵連合の主犯とされている男も市内で目撃されていることなどからヒーロー殺しと敵連合が？がつているだろうという憶測がまるで周知の事実であるかのようにテレビの電波に乗せられた。

夜が明ければ更に出回るのであろう情報を見越して、おそらくあちらが先に手を打ったのだろうと言うのが塚内の予測であった。

「フレイアに対する人質……今までそう考えていたんだが、この一件を調べて新たに分かったことがあってな。……伝えておくべきだと思う。警察の方でもおそらくこの子供に対する扱いが変わってくるだろう」

「それで突然、今から会えないか等と……でも良いのかい？ 塚内君。君の立場が悪くなるようなら、こちらとしても無理には聞かないよ？」

暗に重要機密だとのめかす塚内に対して、オールマイトは逆に戯けたような口調で語りかける。それが彼なりの友を案じての行動だと、塚内も分かっていた。

「心配要らないさ。それに……君も彼の存在には引つかかっていたのだろう？」

元から雄英の生徒を襲った敵連合の一人に？がる人物だ。甘い目で見えるわけでは無いが、同時に緑谷出久との繋がりを知っているからこそ、彼自身を悪とは言いたくは無かった。

「範囲自体はごく狭いものであるにも関わらず、焼け方が酷い。全焼だ。家具も黒焦げ。遺体も見つかっちゃあいない」

主観を入れずに状況証拠のみを連ねる。

そのやり方で説明を始めて改めて、塚内はその現状をおかしな事と思いついた。

「だが黒焦げにはなりはしているが、家具は原型を止めてている。それならば、遺体が残らず焼けているはずが無いんだ」

「つまり、証拠の隠滅のみ行い、本人は逃げたか、連れ出されたか」

塚内の言葉を引き継ぐように、思考を言葉に変えながらも、オールマイトは子どもの行方が、完全に行き詰まったという事実については消沈せざるを得なかった。

それはあくまで、敵連合の手がかりが潰えた事に対するものでしかなかったが、それは仕方ないことだろう。

オールマイトは子ども、吊空真黒とは面識を持たない。その為人も、不審の類も全て、己から、個性「ワン・フォー・オール」を受け継いだ少年、緑谷出久から告げられた代物でしかない。

また、そんな彼と何らかの関わりを持つていたと思われる、雄英の襲撃に関わっていたフレイアは、幼い生徒達や、同僚である二人に危害を加えた敵である。彼には間違えても、好感情は持ち得ない。

「確かに、行方についての手がかりは白紙に戻ったと言っても過言じゃ無いだろう。でも……全ての手がかりが潰えた訳じゃ無い」

消沈するオールマイトに向けられた塚内の声はどことなく高い音だった。

「新たに分かったことが有ると言っただろう。それは「吊空真黒」の……敵名、フレイアの身元だ」

敵予備軍。そう呼ばれる者達が存在する。

その多くは、「敵指定団体」と呼ばれる団体に属する構成員やその血族で、その危険度によつては警察組織などから監視を受けることもあった。

「最も、中には血族の中に敵が居ても、本人が警察組織に協力的なケースはあつてね。そ

ういう人には念のため、DNA……遺伝子や指紋の登録をして貰うんだ。敵予備軍の穏健派に当たる彼らは、得てしてその真逆にある、過激派……警察組織に非協力的な、敵に近い者達に狙われる事があるからね。吊空真黒……フレイアと名乗っている少年の母親も、その一人だったようだ」

「ちよ……ちよつと！待ってくれ！塚内君!!」

湯水が湧き出るかのように話し続けていた塚内の言葉に、漸くオールマイトは制止をかけた。構わず続けようとしていた塚内は、ん？と一声対面しているオールマイトに促してくる。

逸る鼓動を抑えながら、オールマイトは塚内の言葉を反芻し、聞き違いでは無いことを確認した。

その上でも、困惑は隠せない。

「緑谷少年の会った子どもと、フレイアが、同一人物だつて言うのかい?!」

あり得ない。オールマイトが反射的に抱いた感情は、その表情に要約されていた。塚内とて、その気持ちは分かる。

この結果を知ったとき、彼もまた、そう思った一人だったからだ。

どう見ても中高生でしかない容姿を持つ吊空真黒と、成年に達しているであろう「フレイア」。

しかし。

「保須にてフレイアとエンデヴァーが、対敵している。その時の戦闘で出たであろう血痕中のDNAと、その子どもが出入りしていた隣宅の緑谷家に残っていた指紋が、警察組織に登録されていたものと一致した」

確定事項のみを述べる塚内の表情は、一見いつも通りに見える。だが、長い付き合いのオールマイトには、あえて無表情を保っているようにも感じられた。

「何者、だったんだ？」

核心のみを問うたオールマイトに、塚内は無言で一枚の資料を手渡した。

それは簡潔に記されている、一件の未解決事件の資料だった。

「容疑者死亡の誘拐事件か？」

概要の部分を斜め読みしながら、オールマイトは塚内がその資料を出した意味を目だけで問う。

資料に書かれている事件は今から六年前、小さな町で起こった、個性を使われていない誰にでも出来そうな誘拐、及び殺人事件だった。

「六年前に、並盛町という町で地方医院を営んでいた佐和手夫妻が何者かに殺害、金品と共に当時七歳だった彼らの息子が連れ去られる事件が起きた。その町は過疎化も進んで住民も少なく、ヒーローは無住。警察の方も地域に根付いた交番が一件ある程度だ」

そこで一度口を閉ざした塚内は、何かを確かめるようにオールマイトに見せる為^レに置いた資料に目を向ける。

「……それから数日後、隣町の黒曜から一人の男が遺体となつて発見された。彼の所持していた刃物から、佐和手夫妻のものとのされる血液反応が検出され、状況証拠から、この男が佐和手夫妻殺害の犯人と確定された。だが……」

ふつと息を吐き出した塚内の言葉を引き継ぐように、オールマイトは言葉を連ねる。「誘拐された子どもは……見つからなかったのか?」

頷いた塚内に、オールマイトも反応は無い。資料に視線を向けたまま、ジツと何かを考え込んでいるようでもある。

「容疑者死亡で、この事件は迷宮入りした。……ここまでは今まで分かっていた表向き^{ウキ}の話だ」

その言葉は暗に、まだ続きがあることを語っている。

視線で促すオールマイトに、塚内は置いてある資料を掴み、語り出した。
目線ウイザラシで促すオールマイトに、塚内は置いてある資料を掴み、語り出した。
「自警団……と言う者達を知っているか?」

いきなり飛んだように感じる話題の転換に、流星のオールマイトも首を傾げる。だがジツとこちらを見つめてくる塚内に話題を変える気は無いと分かるようで、迷うこと一瞬、現在多くいるそう自称する集団を指して頷いた。

「ヒーローとは異なり個性使用許可を持たずに自らの私情だけで犯罪者を裁こうとする犯罪者集団の総称だろ？数は少ないが居ないわけじゃ無い。今は随分形骸化しているがね」

兇悪な敵で無い分、警察やヒーロの警戒心も少ないが、それは偏に彼らの活動は眉を顰める事こそあれ、どちらかと言えば愉快犯と言つて良いほど悪意が感じられないことも原因の一つだろう。

褒められる事では無いが、おおつぴらな事件とするには彼らの行動は弱すぎるのだ。そんな彼らが敵連合と関わっているとは俄に信じられないが、塚内を疑うと言う考えはオールマイトには無い。

塚内に目を向けると、彼は目を丸くした後……ほろ苦い笑みを浮かべた。

「ああ……済まない。言い方が間違っていたな」

ふっと息を溢した塚内は視線を外に向けた。暗闇に包まれている外からは、時間も時間だけに生活音さえほとんど聞こえない。ただ微かな風の音が拾える程度だ。

「「始まりのヒーロー」……そう称される、ヴィジランテ自警団と言う組織を、知っているか？オールマイト」

超常黎明期。原因も判然としない内に広がった個性を持つ存在と、持たざる存在の際に司法は意味を失い、文明は停滞した。

中でも個性の有無によつて起きる差別も凄まじい物であつたと聞く。

現在においては人口の八割が個性を持つ超人社会であるが故に起こらないそれらは、黎明期には歯止めをかけるものなどいなく、況してや政府もそれを後押しする部分さえあつたと言われている。

そんな中で、数少ない個性を持つ者達を救うために立ち上がった者、それこそが
ヴィジランテ
 自警団だつた。

数の暴力によつて個性を持つ者達を虐げようとする者達に個性の力をもつて応戦する、彼らの行動を正しいと言ふことは不可能だが、あの当時の世界情勢ではそうしなければ個性を持つというだけで、罪の無い人々が大量に虐殺されていたこともまた確かだ。

どちらが悪と言ひ切る事は出来ない。時代によつて生まれた矛盾の中で生きるしかなかった者達は、時の経過と共に世の中が落ち着けば、それまでの好意が一転、犯罪者という烙印を押された。

中でもその中心にいたジョット、Gジと名乗る二人には、かなり厳しい監視がつけられたと言ふ話だ。

しかし箝口令までしかれた彼らの存在は同時に、ネットや口伝で「始まりのヒーロー」と銘打たれ、人から人へ伝えられていった。

ジヨットは、叢も無い暴力によって荒んだ人々の心を護る「救い」のヒーローとして。Gは、暴力をふるう人々を打ち倒す「勝利」のヒーローとして。

「第一、第二世代の個性発現者にとつて、彼らは真実英雄だった。国から見放されていた分余計にね。第三世代では知る人も少ないが、それでも都市伝説のように語られることは無いわけじゃない」

それはまるで希望のように。たとえ公では敵とされようとも彼らの功績は悪と一刀両断するにはあまりにも救われた存在が多すぎるのだ。

「それが……件の誘拐事件とどういう関係があるんだ？」

一段落した昔語りを終止符を打つようにオールマイトが口を挟めば、塚内も心得ているように一つ頷いた。

「佐和手夫人の旧姓は火逆、火逆奈々。……ジヨットとGの孫娘だ」

「吊空真黒が……もう一人のX世さん?!……で。I世さんの世界から浚ったX世さんを

真黒君の体に入れたって……!?!」

掻い摘まんでされた説明だったが、それでも出久には訳が分からなかった。

「あれ?つまり……真黒君がフレイアって事ですか!!」

出久が驚愕も露わに言い放った言葉は、I世からすれば今更何をと、言わんばかりの内容だが、気づいていなかったのだから仕方がない。

「……と言うか、人の中に人を入れるって、どうやって……う？」

次いで再び疑問も露わに首を傾げる出久に、I世もなるべく、分かり易いようにと、嘸み砕いて話す。

「正確には、X世の肉体を分子状態にまで分解した形で保管していたものを、真黒……この世界のX世の体に注ぎ込んだのだと思う。理の異なるこの世界の中で存在を保つにはこれが一番危険度の無いやり方だったのだろうからな。最もそれが原因でこの世界のX世に元々あった人格がどうなったのか、俺にも分かりようは無いが」

「元々の……人格って……!」

その言葉の意味に思い当たり、出久の表情は青ざめる。

彼の実年齢が幾つなのかは出久には分からないが、生まれた時は少なくとも、どこにでもいるありふれた子どもだった筈だ。I世の世界のX世に体を奪われた、と言うのが適切とは言い難いだろうが、彼らの敵対者の狙い通りにX世の意志とは関係なく体を乗っ取らせられたと言うのなら。

「何で……何でそこまでして、X世さんはこの世界に連れて来られたんですか？死柄木が、死柄木の上にいる奴がそこまです程の何がI世さんの世界にはあるんですか!!」

たとえそれを聞いても、出久は己が納得できるとは思えなかった。納得できるわけが無いのだ。

フリーモ
I世の語った事が全て本当ならば、フレイアには、その肉体の持ち主の意志も、その人格の意志も何も作用されていない。

それを看過できる程、出久は人でなしではなかった。

「それはおそらく……X世デーヂモが、出久と、その師であるVIII世オッターグオと同じだからだ」

「同じ？」

唇をかみ締めるI世フリーモに、出久の鼓動も大きく脈打ったように感じられた。

コクンと、知らず知らずになつた嚙下の音が大きく聞こえた。それに視線を向ける事無く、I世フリーモは続けた。

「縦の時間軸……」「受け継がれし力」

端的な一言に、出久は目を見開いた。

『個性を』譲渡『する個性……それが私の受け継いだ『個性』！』

思いだすのは今から一年前。個性の譲渡を持ち掛けたオールマイトが己に向けた言葉だ。

「二つの世界の中で、どれほどの時を経て姿を変えることなく受け継がれていく力……それこそが、どの世界にも形は違えど例外なく存在する、「縦の時間軸」の本質だ」
淡々と言葉を吐き出すI世フリーモの心情に慮る余裕も無く、出久の思考は目まぐるしく回つていく。

同質の力。それは必ずしもその威力……力の大きさと同等になるものではない。それは分かつていたが、それでも出久は体が怖気で冷たくなるのをヒシヒシと感じた。

己の恐怖を宥めるので一杯一杯で、淡々と吐き出したI世フリーモが何を考えているのかまでは掴むことは出来なかった。

(縦の時間軸、トウリニセツテは世界を作った礎になったと言われているもの。その核となる大空が抜けた今、あの世界がどうなっているか、想像することも難しくはないがな)

難しくはないだけに、想像したいとは今は思わない。それが一種の逃げだと分かっているものの、それでもI世フリーモは自らの意識を逸らすためと言う理由も重なり、殊更明るい口調で出久への会話を続けた。

「まあ、この世界のX世デーチモの体を外殻に使った事で、敵には大きなハンデをつけたという点では、怪我の功名とも言えるかもしれないんだがな」

「……ハンデ？」

ピタリと忙しなく動いていた体が止まる。その動きに

目を瞬かせながら、I世フリーモは頷いた。

I世フリーモが転じる視線の先には何も無い。しかし、そこにある何かを見据えるように、I世フリーモは目を眇めている。

「X世はまだ……己の炎を使えていないのだ。この世界に来てから、一度もな」
デーチモ
「……………へ？」

その告白に、出久はどうとう思考の停止に陥った。

そこは、幾つもの医療器具が所狭しと並べられた、小さな部屋の中だった。

「結局、今回の試行も失敗と言わざるを得ないな。注入した以上の炎の放出が見られることは無かった。残念なことだ」

現状を確認するように溢すその声には、落胆の色は無い。

「これでは折角の血筋も、そこらの塵芥と変わらないね。体内の細胞活性に炎を喰う分、そこらの塵芥の方がマシなのかもしれない」

そう呟く男は、椅子に座った体に、幾つもの点滴を通していた。

その表情は窺うことは出来ない。……その男には顔が無かった。

顔面のほとんどが、焼け爛れたかのような引きつり跡のみを残し、顔にあるはずの器官がまるで見えなかったからだ。

「世界の壁を超えたことによる後遺症と言った所かの。しかし炎を灯すだけにここまで手間取るとは……折角道具を使う事無しに力を奮える唯一の血筋と言うのに……ここまで使い勝手が悪いのでは優位性も何も有ったものじゃ無い」

やれやれと失笑混じりに挟まれたのは、傍に立つ相手のしわがれたもの。年老いた声の主が向けた視線の先には、細長いガラス製のケースがあった。

嚴重に鍵をかけられたそこには、いくつかの機械と共に、棒状の機械に支えられた、一つの装置が鎮座していた。

「装置の維持費だけでも大層な費用がかかっている。……道具の方も手に入つたし、そろそろ見切り時かも知れないな」

そう言った男が目を向けた先には、テレビ画面があつた。その画面に映っているのは一人の子ども。それが仰向けで眠っている姿だ。年老いた声も同調するように続ける。

「そうだな。先日の戦いもPRとしては十分なものだった。そろそろ苦しまずに殺してやるのも手なのかも知れないね」

二人が画面に向ける視線には暖かみなどまるで無い。あるのは道具をどう使うか、それを見定めようとする計略家としての視線だけだった。

番外編

爆豪の職場体験

「正直、僕は君のこと、大っ嫌いなんだよね」

そう言い放った人物の背後の壁は一面ガラス張りになっていて、そこに呆気にとられた爆豪の顔が映った。しかしその顔は次いで眉を顰め、その後には苦々しい様子で言葉を発する。

「……指名したのあんただろうが……」

「そうだよ。大っ嫌いだから指名したの」

悪びれる様子もまるで無く、言い放った男の姿は若い。二十代前半だろうか、コスチュームできつちりとしている爆豪とは対照的に、白のジーンズと、薄紫のパーカー姿は、どう考えても休日若者だ。まかり間違ってもヒーローに……。しかも、国内で上位三人の内の一人に数えられるヒーローには見えない。

「こう言うのって、しっかりとした理念とか、目的とか無いと、大体指名先の有名度とかで選ぶでしょう？ ナンバーワンのマイト君は君たちの学校の教職に就いているんだから選択外。二位のエンちゃんは同学年に実子がいるからそれ以外は見向きもしない。

そうになると、君の指名先で一番有名度があるのは僕だと思っただけど……違うかな？
爆君」

「……その呼び方止めろ。なんかムカつく」

「目上の人間にはせめて敬語を使おうか、かつちゃん」

ギリギリと歯ぎしりしながら、爆豪勝己は己の選択が間違いだったのでは無いかと自問した。

戯けたような言動。人をおちよくった笑み。その上先刻から付けられるムカつくあだ名の数々。

どう考えてもうまくいける相手ではないだろう。

ナンバースリーというその知名度だけで選んでしまったが、元々彼本人の情報はほとんど外には出回らない。

メディアに出るのは彼のサイドキック達がほとんどで、彼らはファンクラブまであるほど情報は豊富だ。

だからナンバースリーも、彼らと似たような奴だと思っただけだ。

「白蘭^{びやくらん}さん。曲がりなりにも彼は貴方が指名したんでしよう？嫌がらせをしたい気持ち
は止めませんけど、話を進めてくれませんか？僕も暇じゃ有りません」

膠着しかけていた2人の間を取り持ったのは、白蘭……そう呼ばれたナンバースリー

の座る椅子の真横、秘書官のように彼の傍らに立っていた、茶髪に、眼鏡をかけた、地味な見た目の優男だった。

「酷いな、正ちゃん。僕としてはしつかりとおもてなし謙がらせするつもりだったんだよ？ 大体挨拶ぐらいはした方が良かったのは君だろう？」

本音を隠しもせずにはむくれる姿はまるで子どもようだが、正ちゃんと呼ばれた男の方は慣れたものだったのだろう。これ見よがしに溜息をつけてから、爆豪に向き直った。

「気分は悪くなっただろう。済まなかったね。しかしこれは必要なことだったから、気を悪くしないでくれ」

明らかに非を全て己に付けられる形になった白蘭は、納得は出来なかったのだろう。話を進めようとする男の言葉をこれ見よがしに遮った。

「ちよつとちよつと正ちゃん！気分悪くなったの明らかに僕でしょ！僕一応この所長だよね！その僕に対してその口の利き方はどうなのさ!!」

「文句があるなら僕らに丸投げしている諸手続、管理運営その他、全部自分でもできるようになってから言って下さい!!」

阿修羅も青ざめるほどの迫力で所長であるはずのナンバースリーを言い負かした彼は、このヒーロー事務所の事務処理を一手に担う運営の要の人物である。

「僕は入江正一^{いりえしやういち}。ヒーローでは無いけど、この事務所は一応、僕と彼の共同運営という形を取っているんだ。そしてそこにいる我が儘男は知っているとと思うが、国内ナンバーリーヒーロー白龍^{びやくりゆう}。本名は白蘭だが、それは特に覚える必要は無いよ」

きつぱりと言いい切った正一に、白蘭はさして気にする様子も無く、やれやれと肩をすくめた。

「まあでも、君に興味があるのは本当だよ。……君は昔の僕によく似ているからね」

薄笑いで呟かれた言葉の真意が分からず、眉を顰めた爆豪に気付きながらも、白蘭は大袈裟ともとれる動きで、爆豪に笑いかけた。

「……取りあえず、ようこそ。ファイオーレヒーロー事務所へ♪」

爆豪の職場体験 その②

「全くめんどくせーなあ。……何でガキの世話なんざ俺がしなきゃいけないんだよ。バアロオ」

引き合わされた男は炎のように赤い髪をぐしゃぐしゃとかき上げながら、眠たげな目でこちらを見つめている。

「……この人、ヒーローなんすか?」

ここまで案内してくれた入江と言う事務員へ問いかければ、彼は空笑いをこぼしながら、頷いてくる。

「『怪力フレイヤー』えんごうまる「炎剛丸」。このフィオーレヒーロー事務所の四人のサイドキックの一人で、持ち前の超人的な体力と四肢の丈夫さ、何よりも体からマグマを噴き出す個性を使って、人命救助と敵退治双方で活躍している、この事務所一番の稼ぎ頭さ」

しかし丁寧な説明に反して、その当人がとる行動はどう考えてもヒーローと言うよりはそこらの浮浪者である。

「ああつ……もう面倒臭え……所長は何でガキなんか取ったんですか? 何で教育係が俺なんすか? 手加減なんて性に合わないこと苦手なんすけど」

がに股状態でしやがみ込み、溜息を吐きながら頭を掻くその姿に、自然と爆豪の視線も険しさを増す。

「嘗めてんのか……テメェ!!」

突き刺さるかと感じられる程の鋭い気配に動じもせず、欠伸を溢すヒーロー炎剛丸の姿は爆豪の導火線に油は注げど火消しとはならない。

「ぶっ飛ばす!」

怒鳴り声と共に飛び出した爆豪を、事務員である入江が止めるのは無理な話であった。

咄嗟に足を踏み出そうとした彼を片手で制して、炎剛丸はゆっくりとした動作で立ち上がり。

「面倒くせえなあ。おい」

軽口と共に手首を掴み、爆豪の突撃を止めた。

「なっ……!?!」

BOM、BOMと小刻みな爆発は起きるものの、それらは炎剛丸の横数メートルに固定された手首……その先の掌から起こるもの。抑えている炎剛丸に届く筈がない。

「……まで弱くて良く俺に売ったもんだなあ……喧嘩」

ジロリと向けられた視線に歯を食いしばった爆豪が睨みつける。

ぶんと、振るうように炎剛丸えんごうまるに投げ出され、それを僅かな爆発の空圧だけで姿勢を整え、爆豪はそのまま炎剛丸えんごうまるへ駆けだした。

狙うなら先手必勝。己よりも遙かに強い相手だと見抜いたからこそ、爆豪に手加減の言葉は無かった。

それ位は投げた時から炎剛丸えんごうまるも分かっていたのだろう。事務方の正一を手振り下からせ……ニツと正一に笑いかけた。

「手え出すなよう？入江。俺が教育係だつてんなら」

その直後、炎剛丸えんごうまるの体から大量の蒸気が噴き出した。

「俺の好きにやらせて貰う」

ニヤリと笑みを浮かべた顔だけで無く、体中の皮膚がまるで炎症を起こしているかのように赤く染まっていく。それは、それほどにまで彼の体内温度が上昇し、体内に貯蓄するマグマが造られている証。

はあつと、吐き出した吐息すら湯気に近いものになっている事実、己の戦闘準備が整ったことを確かめ、炎剛丸えんごうまるは笑った。

「……ここは耐熱性においては国内においてもかなりのもんだつてお墨付きの場所だ……全力でやり合おうぜ！」

ヒーロー名炎剛丸えんごうまる……仲間内ではザクロと呼ばれている彼の体験生いびりに背を向

けて、訓練室から逃げた入江はキリキリとした胃の痛みと共に後悔に襲われていた。

(職場体験なんて……許可するんじゃないかかもしれない！)

新人教育など無関心と言って良い白蘭が指名を入れたいと言った時点で妙だとは思っていたのだ。

しかし彼が白蘭の思惑の全容を知ったときには彼は既に所定の用紙に名前を書いて雄英に送ってしまった。

(あの人達絶対、育てようって気は無いだろ！)

いや、むしろその気概をへし折ろう位には思っているかもしれない。そう考えながら正一はガクリと肩を落とした。いや、考えてみれば分かることだ。

ファイオーレヒーロー事務所には良くも悪くも超一級のヒーローしかない。よく言えば最強軍団だが、言い方を変えれば加減が出来ない面々の集まりであり、下手に弱い敵では、逆に命の危険に晒してしまう結果となることもあるのだ。

(少なくともザクロ……彼は間違いなく出来ない方だ。出動だつて救助要員がほとんどだもん)

だいたい爆破の個性を持つ爆豪相手に上位種に位置するプロヒーローを訓練相手に宛がう時点で白蘭は鬼畜としか言えない。

(……)は他の相棒……その中の拘束に特化した種子系統の個性の彼ならこつちもこつちま

で心配しなくて済むのに)

はあと零す溜息にまで悲壮感が漂うのだから今の正一の状態は相当と言って良かった。

「あれえ？正一。こんな所でどうしたの？」

「か……奏さん」

そこにいたのはちようど正一が脳裏に浮かべていた相棒の一人で、水難救助、及び水中戦闘の専門家、ヒーロー名「ブルーベルン」こと、涼代すずしろ奏かなでだった。身長150と、小柄な体で一見するとヒョロヒョロとしているように見えるが、そこは単に着やせしているだけであり、雑誌片手に素足という、何とも子供染みた格好ではあるものの、その目は忙しなく周囲を見回し……得心したようにクスツと笑い声をたてた。

「やっぱりびゃくらん。容赦ないね」

それは何に対しての言葉か。一瞬間に出そうになった問いかけを敢えて正一は呑み込んだ。

正一はヒーローではなく、当然「個性使用許可証」も所持していない。

共同経営者であるが、それは事務作業が苦手な白蘭が何とか事務所を回せる人材として正一に目をつけたに過ぎないのだ。

(小学、中学と白蘭さんとは同じクラスで仲も良かったから、向こうも誘っただけなの

に、……ヒーローの育成にまで口を出すのはお門違いなのかな?)

胸中を過ぎった躊躇い。しかし次の瞬間、扉の向こうから響いた強い衝撃で咄嗟に正一は踵を返していた。

(ダメだ! 口出さないと本当に死人がでるっ!!)

「ザクロさん!」

内向きの名前で呼びかけながら扉を開けた先には、子どもの形に凹んだ壁と。

「うおっ!」

「死ねクソがあ!!!」

断続的な爆発音を響かせながら鬼の形相で殴りかかる少年と、それをするりと交わりながら軽い動作で手首を掴み……重力の動きに従い床に押しつける、プロヒーローの姿があった。

「楽しそう! ねえねえ! 次私もその子と遊んで良い?」

ひよこりと正一の背後から顔を出した少女には年相応とも呼べる笑みしかなく。「ちっ! うるせえのが来やがったな……」

舌打ちするザクロは忌々しげに吐き捨てた。

爆豪の職場体験 その③

ファイオーレヒーロー事務所には、四名の相棒がいる。

剛腕フレイヤー炎剛丸。えんこうまる 本名はザクロ。

マーメイドヒーローブルーベルン。本名は涼代奏。すずしろかなで

リーフヒーローSEED。本名は植継桔梗。うえつぎ

ホロウアイズヒーロートリカブト。本名は不明。

彼らがミルフイオーレヒーロー事務所の稼ぎ頭達であり、同時にファイオーレヒーロー事務所を立ち上げた白蘭の家族でもある。

家族と、相棒を呼ぶプロヒーローは、正一は白蘭しか知らない。その理由は白蘭には本当の家族を作るつもりが、今に至るまでの過去にも、これからの未来にもないからだろう。

(……いや、それは白蘭さんだけじゃ無いな)

小さく溜息を零しながら、彼は本日体験日一日目の雄英生、爆豪勝己に包帯を巻いていた。

公にはされていないがファイオーレ事務所のメンバーは、正一以外、家族と呼べるコ

コミュニティーを持った経験のないヒーローの集まりである。

社会の最底辺とも呼べる、劣悪な環境にいた孤児や、組織犯罪に巻き込まれ、実験体等という形で利用されていた被害者を、救けた白蘭自らがスカウトして、ヒーローの道へ導いた。

言い方を変えれば、彼らはヒーローとなつてからファイオーレ事務所に所属したのではなく、事務所に所属するために、ヒーローとなつたのだと言っても、過言では無い。

(そう言うところは抜け目ないと言うか……侮れないというか……)

正一が吐き出したそれは、諦観を含んだ溜息だった。

彼との付き合いはまだ正一が義務教育を受けている最中からになる。正一自身の視点からするが、その当時から彼はその読めない相手だった。

同年ではあつたものの、良くも悪くも平凡である己とは釣り合わない容姿端麗、非凡秀才……そしてそれ以上に型にはまることのない変人でもあつた。

無個性でないことは分かっていたが、個性をはつきり見たのは彼がヒーロー科に進学してからだ。

元より大抵の事はそつなく熟せてしまう白蘭は、それまで人前で個性を使う必要がなかったとも言える。

小学校時の「個性教育」に至つては、何だかんだと指導する側である筈の教師を口先

だけで丸め込んですらいた。

そんな姿を見ていたからか、当時の正一は、白蘭にはヒーローになるという願望が無いのだと思い込んでいた。

だからこそ、彼が雄英高校のヒーロー科を第一志望にしたと話したときは、思わず聞き返したほどである。

しかも彼は、それを打ち明けた時点で、既に正一の経営科受験の根回しを完璧に行っていたのだから質が悪いなんてものじゃない。

(それ以来の腐れ縁とは言え、よくもまあ事務所まで共同で立ち上げたものだ)

賞賛を送るべきは己の我慢強さにか、白蘭の計算高さにか。

それは今となっても判断は出来ない。

共同経営者にかなり酷い言葉の数々を与えられていたヒーロー、白龍こと白蘭は、現在、一人の客人を迎えていた。

「成る程ねえ。だから僕に爆豪勝己君を指名してほしいって頼んだっていうわけかい？」

椅子に座った白蘭は、クルクルと、指先に引つ掛けた一つの指輪を回していた。

「それで……具体的にこれは、裏のマーケットでは幾つぐらい出回っていると思う？」

そう白蘭が問いかけたのは、明らかに彼より年下の、十五歳かそこらの少女だった。「その指輪の形では、量産はされていないと思います。あちらからどれほどの数が持ちこまれたのかは分かりません」

そう答えた少女は、艶のある黒髪を肩まで伸ばした少女だった。薄金色の瞳はやや楕円を描いており、その目は注意深く、白蘭の一挙手一投足を見つめている。

「警戒しているのかい？ ユニちゃん」

「分かりません」

即答。迷い無く答えたその言葉は、ただただ頼りないものである自覚はあったのだろう。

僅かに視線を逸らしてから、言葉を選ぶように少女は続けた。

「私は貴方とは初対面です。ヒーロー「白龍」」

「うん」

コトリと、クルクルと回していた指輪を机の上に置いて、白蘭は静かに耳を傾けた。無言の承認に僅かに頭を下げ、少女は話を続ける。

「私が知っている記憶は、彼の世界の「私」から送られてきた、彼の世界の「貴方」の事
でしか無い。同一視する事は誤りです」

彼女はただただ正論を述べる。

だが、それは彼女の警戒を解く理由にはならないのだろう。

それを理解した上で、白蘭は笑った。

「ありがとう。でもね、やっぱり僕のことには信頼しない方が良いよ」

投げられた言葉と共に浮かべられているものは、自嘲の色が強い。

「あれも僕の一面だ……あるヒーローの言葉でもあるけれど「ヒーローと敵は表裏一体」。育つ環境、関わる人物によっては、僕も同じ道を辿っていた可能性は否定出来ないんだよ」

上っ面の笑み、と分かる表情を浮かべてみせるヒーローに向けて、微かな笑い声を零し、少女は否定した。

「貴方は大丈夫ですよ。きつと」

次いで加えられた言葉には、最早苦笑するしか無い白蘭であったが。

「自覚が出来ているなら、道は踏み外しようは無いでしょう?」

閑章 一 辿り着こうとする者達

“大空”のいない世界

誰が間違っていた訳では無いと思う。

あの人を止めるにはあれ以上の最善は無かつたし、運が味方しなければ、彼女があれほどの決意を持つていなければ、きっとこのような奇跡は起きなかつた。

それに見合うだけの代償は確かにあつたけれど、これ以上の結果を望むのは贅沢と言うものだろう。

だけど、こうなつてしまった今だから思う。

こうなる結果を、彼はどこかで分かつていたのでは無いかと。

だからこそ、彼はあの時、敵であるはずのあの人に、あんな言葉を言つたのだ。滅多に見せなくなつた彼の、何の含みも無い笑みで。

「大丈夫だよ。白蘭」

(笑つて仮死状態死を逃になつた君は、この状況のどこまでを読んでいたんだい?……綱吉君)

「俺もお前も……落ちるのは地獄だ」

その答を僕は未だに見つけられない。

「……っ！どういふことだ!? 入江正一!!」

獣の咆哮のように声を荒らげ、掴みかかってきた嵐の守護者には、真剣以上に鋭い殺気が宿っていた。

「落ち着け！たこヘッド!!」

絞め殺さんばかりの嵐の守護者を力尽くで押しえつける晴の守護者にも、困惑の色が濃い。

圧迫され、急激に拡張された気管支の動きを落ち着かせるように、膝をついたまま咳き込むのは、入江正一と呼ばれた男だった。

彼……入江正一と、嵐と晴の守護者達のボスであるボンゴレの「大空」、沢田綱吉。そしてボンゴレの守護者の中では最強と謳われる雲の守護者、雲雀恭弥が協力して、この時代から十年前の世界の彼ら……ボンゴレの十代目ファミリアを呼び、世界を滅ぼそうとしていたミルフィオーレファミリアのボス、白蘭を倒そうと画策したことは、今ここにいる彼ら……現在の十代目ファミリアにも既に共有されている情報である。

作戦が行われていた当初は、何一つ知ることもなく、煙に包まれた記憶を最後に、気づけばこの場所に立っていた。大空のアルコバレーノ、ユニの残した記憶がなければ、目の前に立っていた入江を視認した直後に、何らかの攻撃を加えようとしていた事だろう。

作戦の詳細がボンゴレ内部では雲雀にしか明らかにされていなかったことには不服を覚えるが、それが十代目の決定と言うのなら責めることは出来ない。紆余曲折は有ったものの、元凶である白蘭は倒れ、彼の悪事は全て歴史を遡り白紙になったというのなら、万々歳な筈なのだ。……本来は。

「何で……何で十代目がいねえ!!」

晴の守護者、笹川了平に羽交い締めにされたまま、牙をむくように、嵐の守護者、獄寺隼人は叫んでいた。

「装置の中に内蔵されていた筈の分子貯蔵装置が、十代目のもんだけ消えているなんて……どういふことだ!?!入江っ!!!」

怒り狂うように、縋りつくように吠える彼の言葉に答えられるだけのものを、入江正一も持つてはいなかった。

「落ち着け。おめーら」

鶴の一声。その役割を果たしたのはかん高い、子どもの声だ。しかしその声はファミリーのボスである沢田綱吉がない今、この場では最も強い決定権を持つ存在のものである。

「アルコバレーノ」

その時、彼らの背後にある大きな機械と向き合っていた唯一人の存在、金髪に眠りか

けているような半開きの碧の瞳、口に自作の棒付きキャンディーを啜える青年、元ミルフィオーレファミリーのメカニック、スパナが端的にその存在を呼び表した。

「リボーンさん……」

入江正一に掴みかかっていた獄寺も、毒気を抜かれたかのように、呆然としている。

そんな彼を含む綱吉の守護者達……その大なり小なりの腑抜け顔を眺めやって、やれやれと黄のアルコバレーノ、リボーンは溜息を吐いた。

「全く……揃いも揃ってボスがいねえだけでこの有様か」

端的に言い放った言葉には何よりも明確な呆れと失望が籠もっていた。そこにいる六人の守護者達全員に思い当たる節があったのか、全員が神妙な顔つきに変わる。

「小僧……」

咄嗟に、謝罪の為か。リボーンに向けて言葉をかけようとしたのは、綱吉の雨の守護者、山本武。しかしそれを視線だけで制して、リボーンはスタツと一人の少女、この場にいた数少ない一般人の一人、三浦ハルの肩から飛び降りた。

「今京子の奴が他の奴らに事情を説明するために並盛基地に走ってくれてる。雲雀は既に風紀財団を動かせるように並盛の基地へ戻った。……んで、テメエらはいつまでここに立ち往生しているつもりだ？」

ギロリと、全員を睨むその姿は、十年前から変わることの無い赤ん坊のもの。しかし、

この場にいる面々の中では、誰よりも現状を理解しているのもまた、彼である。

「スパナ。その装置の中には、もう誰もいねえ。それは間違いねえな？」

睨む視線を逸らさぬまま、問いかける赤子の姿の王者に、スパナは、微かに声を漏らす。

「ここにはいない。ただ……システムとしてはまだ？がっている可能性があることは否定できない」

ピクリとリボーンの眉が動く。それを画面越しに見たのだろう、スパナは淡々と現状分かっている装置の状況を説明した。

「この装置の中には、確かにボンゴレの肉体を構成していた分子の貯蔵装置は入っていないけれど、その装置の電源はまだ入っている。……起動状態。つまり、現状はまだ装置の中で分子状態を維持している可能性がある」

「ちよつ……ちよつと待つてくれ！スパナ!!」

血相を変えてスパナの説明に割りこんだ入江は、目を見開いたまま、信じられないと言うように首を振った。

「十年前の世界に綱吉君を帰すために、確かに僕は全ての装置の起動状態を解除した。十年前の世界に綱吉君達が帰れているのだからそれは間違いない筈だ！つまり綱吉君の装置だけ起動状態を維持している筈はないんだ！それならば十年前の世界に綱吉君

だけが帰れていないと言う事になってしまふ……!」

十年前の世界に十年前の沢田綱吉が、彼のファミリーと帰った事は、見送りの為に来ていた者達と、一時的に十年前の世界のマーレリングを封印するためにその世界に行つた五人のアルコバレーノ達が証明出来ると言えるだろう。つまり、スパナのその仮説は入江の視点では眉唾以前に巫山戯ているとしか言えないものだった。

「だが現実には装置は起動状態の数値を示している。データは嘘をつかない。それは正一も分かっているだろう?」

スパナのはつきりと見開かれた瞳が正一のそれとぶつかる。

しかし、それが明確な火花を散らす前に、リボーンが二人の視界に飛び込んだ。

「その状況の可能性としては、何が上げられる? 正一」

トンと、着地したのは装置の前に座するスパナの肩。

「……リボーンさん?」

言外に、スパナの肩を持つような素振りを見せるリボーンに、正一は疑問の色を浮かべる。

それを読み取りながらも、リボーンは言葉が続けた。

「本来なら消えるはずがねえと思つていたもんが、実際に消えてんだ。常識はこの際置いといて良い。ヴェルデの奴も言つてたろう? トリニセツテが関わる時点で、人の理解

の範疇は超える。俺はスパナの考えも入江の読みも間違っているとは思ってねえ」

あえて両者に言い聞かせるかのようない方に、自然と正一の頭は冷えた。

そう。この装置を作ったのは他ならぬ正一自身だ。己が作ったこの装置に、世界の命運を託し、綱吉を説得した。その装置のデータを己が信じなければ何を信じる。

「……そうだね。済まない。スパナ。僕も冷静じゃ無かったみたいだ」

軽く頭を下げた正一に、スパナも冷静さを取り戻したのか軽い様子で頷いている。そんな彼の様子に安堵を覚えて、改めて正一はリボーンに言われた条件を満たす可能性に思いを向ける。

「よしっー」

沈黙を破ったのは、嘗てボスである大空に、どっぴーかんと呼ばれた男だった。

「腹が減ったな！基地に行つて食事にするぞ！山本！たこヘッド！ランボー！クローム！！」

その場にいたいきなり呼ばれた四人は、その予想外の言葉に思わず目を点にした。

「なっ！芝生頭！テメエ十代目の安否も分からねえこんな時に何言つてやがる！！」

「こんな時だからこそだ！たこヘッド！！腹が減つては戦は出来ん！！」

唸り声まで上げそうな獄寺と、鼻息荒くする了平にクロームがオロオロと二人を見比べる。

「……小僧、俺等どうすりゃあ良いのな？」

考え込むエンジニア二人を見つめていたリボーンに縋るような視線を送る山本のらしく無い気弱な言葉に、リボーンは思わず眉を蹙める。

(……今までは感じてなかったが、ツナ一人いねえ事態がここまで影響しちまうとはな) それはボスがいきなり生死不明で行方不明になったからだけなのか。

(……いや、地味にアイツが決行したミルフィオーレファミリーによる殺害偽装が未だに尾を引いているのかも知れない)

あの事件は正一がすり替えた特殊弾によつて仮死状態になっただけの茶番劇だが、知らなかった守護者達には関係は無い。

その上今回は実行犯も手がかりも未だに無いのだ。

彼らの不安も尤もだが。

(……いい加減、うぜーな)

それもまた偽りないリボーンの本心であった。

「リボーン！俺達は一度基地へ戻って食事にしてくるぞ！それで良いか！」

「待て！勝手に決めんじやねえ芝生バカ!!俺は十代目の傍にいんだ!!」

彼らが呆けている間に穴を埋めていた晴の守護者は気鬱の心など感じさせない晴れやかな声音でリボーンに尋ねる。

それに言い返す獄寺の言葉に、リボーンは思わず溜息をついた。その溜息は、思った以上にその空間に反響した。

「……小僧？」

「……り、リボーンさん？」

山本と獄寺。沢田綱吉に最も近かった二人が、思わず声を揃えた。

沢田綱吉に近いと言うことは、即ち彼の家庭教師であつたりリボーンとも、近い距離を保っていたと言うことである。

そしてそれは、その分彼の怒りに触れる頻度も多かつたことを指す。

そんな彼らの観測装置が警報を鳴らしていた。

今彼がこれ以上無いほどに起こっていることを。

「……てめえら」

次の瞬間、発せられたリボーンの声に、他の二人も息を？み……その場にそのまま居合わせていたハルもびくつと体を震わせていた。

「……一度基地に戻って体を休めろ。ここにいた所で邪魔になることはあつても、役には立たねえぞ。それと……獄寺」

名指しされた瞬間、獄寺の体を襲つたのは突き刺さるような冷たい気配だ。

「……に、ツナはいねえ……！それ位分かれ!!」

「よしっ！行くぞお前らっ!!」

決断が一番早かったのは、了平だった。

生まれながらに鋭い本能……所謂野生の勘から、ここにいてはまずいと察したのだから。

固まっている獄寺、山本を引くように歩きながら、クロームとランボにも目配りをする。

リボーンの本気の殺気に当てられた二人は泣きかけのハルを連れながら、せき立てられるようにして、その空間を出ていった。

「……………チッ」

流石のリボーンも、らしく無い事をした自覚はあったのだろう。特にあの場所には守護者だけで無く、一般人だった三浦ハルも居たのだ。常のリボーンならばあそこまでの殺気は出さなかつただろう。

「……………焦っても変わらんない」

機械に残されているデータから視線を逸らさずに呟くスパナに、答えることも出来ずに、リボーンはボルサリーノを被り直す。このまま己も一度ここを出ようかと、まだ結論が出なさそうな二人を眺めたりボーンは、口元を手で隠したまま、大きく目を見開く正一の姿に、目を丸くした。

「入江? どうした?」

何かに気づいたのか、明らかにさっきまでと異なる入江の姿に、リボーンが声をかけると、漸くスパナも異変に気づいたのか、「正一?」と問いかけてくる。

「そうか! それならば、矛盾は生じない……!」

こちらの声は届かなくなっているのか、小さく呟きながら

正一の目はその不安定な感情を表すかのように不規則に揺れる。

「いや……ただ……そうなると……」

ピタリと、入江の目の揺れは止まった。先刻までとは異なる、ミルファイオーレファミリーの六甲花の一角を担っていた時を思いおこさせる据わった瞳。深慮を湛えた目の色で、入江は、一つの結論を出した。

「……スパナ。その装置は、止められない」

「……何が分かったんだ?」

チラリと視線だけで尋ねるスパナの問いをくみ、リボーンが尋ねるも、正一はそれに答えず、呟き続ける。

「いや、正確には出来ない。綱吉君を見つけるまで……連れ戻すまで、現状を保つていなければ危険すぎる……!」

「正一!」

「入江！一人で納得すんな！要点を話せっ!!」

完全に一人の世界に入り、そこで完結させてしまっている入江の姿に、取り残された二人の行動は早かった。

掴みかかり、言い募る二人に、構うこと無く、漸くとつかかりを掴んだ入江正一は、大きく声を張り上げる。

「いないんだよ！リポーンさん！スパナ!!」

「は？」

「……？」

しかし、端的すぎるその言葉は、全く意味が分からないものだったが。

「簡単なことなんだ！……おそらく、今の綱吉君は……」

本来なら、考えもしないこと。それを行える見えない相手に入江が感じたそれは、間違いなく怖気に近いものだった。

「……分子状態のまま、装置の外に出されている……!!」

リポーンの怒りによって守護者を含む数名が装置の置かれた空間から並盛基地へと追い立てられた頃、並盛の町に入る一つの影があった。

「……なるほどの。あやつは無事に、辿り着いたか」

そう呟くのは一人の老人だった。人気の無いながらも綺麗に整備されている街並みの中で、まるで一人だけどこか違う場所から紛れ込んだかのようなボロボロの着衣を纏っている。しかもそれはこの国ではあまり着る者のいない、異国風の衣装であった。そんな目立つ出立ちの老人はブツブツと一人手元の何かに向けて呟きながらも杖をつきつつしつかりとした足取りでどこかへ向けて街の中を進んでいく。

「しかしながら、流石に「理」の異なる異界……一筋縄じゃあ、行かぬじやろうて」
呟くその言葉の中にはどこか哀れみのような、憐憫の色があつた。

漸く視線を僅かに上向けた老人の目には黒い布が巻かれている。

……そう。彼は目が見えていなかったのだ。

しかしそれにしては迷いの無い足取りで、老人は再び歩き出す。

その手元には古ぼけた布袋。そこには細かい破片が入っているのか、歩く度に細かな音がる。

「さてさて……楽しみじやのう」

ククツと、その老人は布の巻かれた目で笑う。

「あやつらに……リングを蘇らせるだけの覚悟があるか……のう？ お主ならば何というたかのう？……X世^{デーヂモ}よ」

笑いながら歩き続ける老人が並盛基地に辿り着くまで、あと少し。

これからの話

「何ですか。この空気は」

ボンゴレファミリーアジト、並盛基地。並盛町の地下に広がるその地の会議室に足を踏み入れた綱吉の霧の守護者の片割れ、六道骸の開口一番がそれであった。

「君たち、また沢田綱吉の通夜でもするつもりなんですか？」

何とも不穏な単語を呟いた彼に、声を震わせて噛みついたのはやはり獄寺だった。

「バカも休み休み言え！十代目の通夜なんざ古今東西開いた覚えはねえぞ!!」

「おやそうなんですか？棺桶まで用意したのだから、通夜と葬式位開いているものだ」と心底意外と言う心情を隠そうともしない相手に、流星に他の守護者達も苦笑いだ。

「まあ、正確にはする暇もなかったんだよなあ。「ボンゴレ狩り」とか起こったし」

頬を掻きながら説明する山本であったが、それ以外にも守護者の誰もが当時その開催を言い出さなかった理由はある。

皆、その事実を認めたく無かったからだ。

だからこそ、入江正一から事のあらましを聞いたときは歓喜と、それを上回る安堵に襲われた。

失われていなかった事が、ただ嬉しかったのに。

「何か……繰り返してみたいなのな」

ぼつりと呟く山本に、クロームとランボも顔を俯ける。

「それより悪いだろ」

吐き捨てるように続いた獄寺の言葉は真理だった。

以前は、「白蘭」と言う明確な敵が居た。

しかし今はそれすらいないのだ。

自然と重く漂う沈黙に、うんざりとしたように骸は溜息を吐いた。

「バカらしい」

その言葉は、重い空気を纏った沈黙の中で、鋭い刃物のようにその場にいた者達の耳に届いた。

「……………はっ」

しかし、その場にいた誰もが、一時、その言葉を理解できなかつた。そこまで骸にはしっかりと伝わったのだろう。吐き出す溜息を隠そうともせずに、骸は続けた。

「バカじゃ無いですか？あなた方は」

その言葉に、真つ先に動いたのは獄寺では無かつた。

鬼のような形相で掴みかかる山本に、骸は余裕の笑みを崩すこと無く、薄笑いを浮か

べている。

「入江正一如きの言葉に振り回され、一喜一憂、ピーチクパーチクと。今時、野生の鳥でももう少し自我をもって行動しますよ？」

常にはない、饒舌なその姿は、自覚していなかったとは言え、骸が彼らに対して、怒りを抱いていたことの証左であった。

（綱吉君が共犯者に雲雀を選んだ理由……あの作戦を雲雀にしか打ち明けなかった理由……分かるような気がしますね……）

山本に対して薄笑いを浮かべたまま、骸は彼らのボスに思いを馳せた。

今まで復讐者の牢獄にいたことで、物理的に距離をとっていたからだろうか。気づかなかったことではあるが。

（何ですか？彼らのこの、お気楽なまでの思考停止状態は……）

昔はどうだったか。そう明言できるほど、元より骸と他の守護者達の距離は近くない。

元々の間柄は綱吉の体を狙った相手という敵同士であり、ボンゴレの守護者となったのも、復讐者に狙われる犬と千種の保護を得る為だ。

いわば、利用し、利用されるだけの関係。

だからこそ、必要以上のなれ合いをするつもりは当初から無かった。

そんなこちらの事情を、あの男は……沢田綱吉は最初から悉く無視しきつて来たけれども。

(本当に……彼が謝罪する必要など、始めから無かったというのに……)

骸が思い出すのは、ボスになった当初に、ボンゴレの上層部に対して己の守護者である六道骸を復讐者の牢獄から解放したいと言う要求。それをすげなく彼が断られた時の事だ。

その時は前触れも無く、クロームの元を訪れ、泣きながら己の無力を詫び続ける綱吉に対して、骸は憮然とした態度で彼を眺めていたように思う。

骸からしてみればそれはいちいち知らされる事などでは無く、当然の結果と言えただろう。

ボンゴレファミリーの中でも暗殺独立部隊ヴァリアー所属のマーモン……霧のアルコバレーノであるバイパーと並ぶほどの実力を持つ骸、その依り代であり、霧の守護者の代理であるクローム。彼の弟子であるヴァリアー所属のフランはともかく、二人がボンゴレに所属し続けている理由は、偏に骸の体が牢獄に繋がれているからだ。

その大前提が無ければ、骸とてマフィアであるボンゴレに協力する義理は無い。

仲間意識等と言う無駄なものを抱く綱吉とは異なり、上層部の者達はそれをよく理解していたのだろう。

黒曜組の頭である骸の存在は、彼らからすれば繋いでいるからこそ使える存在なのだ。

(マフィアなどにそこまで期待を抱くことも、元より無い……)

だからこそあの時は、そんなことで涙を流す綱吉がただ滑稽だった。

(あの時は本当に……その程度だったと言うのに、僕もよく絆されたものですね……)

自覚しているが故に、このような形でも彼らを立ち直らせる為に言葉を紡ぐようとしている自分を、滑稽と嘲る事はもう出来なかった。

「骸？」

ここに来て漸く、理由は分からないながらも、骸が立腹している事は分かったのだろう。

彼が向ける以前は無かった視線の意味が分からず、困惑から眉を寄せる了平に、氣にした様子も無く、骸は続けた。

「敵が誰かも分からない？ 沢田綱吉の安否が不明？……だからどうしたんです？」

グルリと見渡した守護者達の、一様に不安げな表情を、当たり前散らすかのように鼻で笑っていた。

「心配したところで、何か変わるんですか？」

もしそう思うのなら、それは救いようのない阿呆でしかない。

最後にあの装置の中で、沢田綱吉の分子貯蔵装置を確認したのかがいつかは知らないが、アルコバレーノの言うとおり、既に浚われた事は確定なのだ。

今更、何も変わりはいらない。

「だいたい、と常に己の喉元を塞いでいた異物がいきなりとれたのかと思うほど淀みなく、骸は言葉を紡いでいた。

「抗争初期に敵が分からないのは当たり前でしよう？ 沢田綱吉の安否など白蘭の手にかかってからはずっと不明だった。それを突きつけられただけでしよう？ それで今更取り乱すとはあなた方は頭のねじでも緩いんですか？」

説教等己の柄では無いと、分かってはいたが止められなかった。

突然始まった骸の怒濤の口撃に、その場にいる守護者達が皆啞然としているのが分かるが、今更止められるものでも無い。

「……てめえは……十代目の事が心配じゃねえのか？」

呆然とした様子そのまま独白のように呟く獄寺に、骸はフンと鼻をならしていた。

「生憎……僕は自分の目で見たものしか信じませんよ」

並盛基地、その一角にあるコンピュータールームにて、一人の青年が作業をしていた。

現在のボンゴレ十代目ファミリールームと共に、十年前の世界から過去の自分を呼び出す為に彼らと同じ装置に送られていたチェデフ所属の青年、バジルである。

「今の所は……」ここまでが限界か」

現状の報告を終えたバジルは、緊急暗号文とした報告書の送信を完了させて、ふうと息を吐き出した。

しかし、その表情に、やるべき事をやりきったと言う達成感は薄い。

（寧ろ、今体の中を巡っているこれは、何も出来ない事への焦燥感や無力感かもしれないな）

冷静な部分では、己は何も出来ていないわけではないと思う。

それを言うのは、一般人である笹川京子や三浦ハルの方だろう。

チエデフにて情報の取り扱い方に秀でた己にできるこれが、己の持つ一番の力だと言うことも分かっている。

守護者やヴァリアーのように武器を振りかざし敵を倒すことだけが戦いでは無い。迅速な情報のやりとりが勝機を分けることもあるのだから。

それを理解している己がここまで無力感に苛まれるのは、今回のあまりの情報量の少なさにも理由はあるのかもしれない。

最初の一報を受けてから並盛基地ではジャンニーニが、例の装置の前では制作者である入江正一が必死で手がかりを探していると言うのに結果は芳しく無いのだから余計にだ。

(沢田殿……)

己の思考の中に沈み込んだバジルは、自らの不甲斐なさに唇をかみ締めていた。

今回の計画、雲雀、入江正一以外の全ての者が蚊帳の外であった事が、そのまま十年前と比べて、沢田綱吉との間に開いてしまった溝なのでは無いかと、バジルは感じていた。

十年前は、当然ながらもまだ、沢田綱吉はドン・ボンゴレでは無かった。ボンゴレ十代目とは呼ばれていたが、それはあくまで候補筆頭、と言うだけで何かしらの権威がある訳でも無く、責任もそこまで大きくなく……己も、守護者達も今よりずっと気安かったように思える。

(もしかしたら、だからこそ……沢田殿は十年前のご自分達に、この世界の命運を託されたの知れませんか)

無意識下に壁を作った自分達では無く、壁など一つとしてなかった、意見する事への躊躇いも、目上の存在となつてしまったボスに対する無意識下の遠慮も無い彼らだからこそ、その真価を發揮できると思ったのか。

(それは……沢田殿にしか分からぬ事)

今のバジル達に分かるのは、起きてしまった現実だけだ。

(立ち止まることは出来ない……!)

己に言い聞かせるように、バジルは他には誰一人として人のいないここで、己の心を鼓舞していた。

(立ち止まったら本当に……!)

沢田綱吉に、手が届かなくなってしまう。

己の中の直感が囁くそれに勇気づけられるように、再び強く領いた時……まるでその動きを待っていたかのように、今まで……海外のある地点で倒れてから、装置から目覚めて現在までの間、腕に装着したままになっていた通信機から、連絡が入る。

「何だ?……これ」

この通信機に情報を送るやり方を知っている者はそう何人もいない。ほとんどはチエデフ所属の面々であるが。

「……え?」

開封した連絡の内容に、バジルは目を見開いた。

正確には、そこに隠語で書かれていた、宛先のだ。

連絡自体は、一件単なるエリアメールの類である。

しかし、この通信機はそんな凡庸な電子手紙が送られてくるような代物では無く。

「……本部、から?」

隠語によって隠されていた宛先はさつきまでバジルが報告書を送っていた己の上司。

門外顧問の沢田家光からで。

そこに書かれていた事はたった一つ。

間もなくから、ボンゴレ本部の九代目より、十代目ファミリーに向けての暗号通信が届く筈だと言うものだった。

明かされる真実

入江正一は頭を抱えていた。

自らが開発した装置の状態から、失踪……何者かに拐かされた沢田綱吉の身体状況は解明出来たものの、それが現状を打破する具体策に全く結びつかないものであったからである。

「……仮に、正一のことまでの仮定が正しかったとして」

画面に目を向けたまま、スパナが常と変わらない平淡とした声で、状況の復習を始める。

「現在のボンゴレの状況は、二つには分けられると思う」

二本、立てられた指にリボーンは黙ったまま、口を挟まない。

専門家では無いが為に聞き手に回っているのだろう。それが分かっている話し手二人も、それを理解した上で言葉を続けた。

「まず一つ」

人差し指をまつすぐに伸ばし、誰に目線を向けること無く、スパナは続けた。

「装置から出され、空気中に放置されている。でもこの場合、分子状態の肉体は空気中に

分散してバラバラになるんだが……この場合はどうなるんだ？ 正一

「正確な分子量の不観測により物質への再構成は不可能になる。……この場合は不可逆的な死へと向かうはずだ」

「そうか。じゃあこの選択肢は可能性は低いな。では二つ目」

正一の意見を引き継ぐ形で続けるスパナには先程の会話から感じる不安や焦燥、何より何も出来ない事に関する躊躇いなど一切無かった。

また、敵の詳細を知らない筈のスパナが動揺さえ見せなかった事実には、リボーンはジツと視線を注いでいた。

（まるで敵の胸中を理解出来ているようなもの言いだが……）

もしや、綱吉を拐かした何者かと？ がっているのかと、リボーンから、スパナに向けられる警戒心はそのまま、リτζジョネロが前身であるブラックスペルとは言え、元ミルフィオーレの一員でありながらこちら側となったスパナへの不信感が起因している。雲雀恭弥と協力関係を築いていた為に背景がはつきりと確認できる入江と異なり、スパナがボンゴレに味方したのは良くも悪くも過去の綱吉がいたからと言う理由だ。その人がいない以上当然スパナの立場は微妙なものだ。スパナ本人もそれは分かっている筈だ。

そう思いながらもまるでこちらを気にすることなく、見向きもせず作業を続けよう

とするスパナに、今まで黙っていたリボーンは声を上げた。

「なぜそれを断言出来る？ 相手が装置の性能を熟知せずに、誤ってツナを殺しちまっている可能性は考えられねえって事か？」

言葉を続けようとしたスパナを遮り問いを挟むと、漸くスパナは画面からこちらへ視線を移した。

「何を焦っている？ アルコバレーノ」

しかしそれは問いに対する答では無く、新たな疑問。しかもその内容はリボーンからすれば予想していないもので。

「俺が、焦っているだど？」

こちらを侮るかの内容に、リボーンは眉を顰め、僅かに殺気を漏らしていた。

思わず唾を飲み込む正一を双方気にする様子など無く、更にスパナは続ける。

「自覚が無いなら言うが、さっきの問いはあり得ない。あの装置はチョイスが開催される前に手に入れた匣兵器の雷モグラを使って正一が割り出した安全と思われる地点に隠した。掘り進める過程でも確認したが、あの場所は並盛基地の地下と同じように公共の地下施設や配電の混線でも入り組んだものになっていたから雑なやり方だと公共機関に障害が出る。しかしうちらの様に掘り進めるとすると何らかの跡は残るんだ。全く同じように掘って、同じように埋める。……そんな芸当が出来ない限りは」

だけれど、とスパナは淡々と分かっている現状を言い聞かせる。

「装置を隠した地点にはこれと分かる異変は無かった。周辺も掘り返された形跡は無い。その上、装置にもボンゴレの分子貯蔵装置以外の欠如は愚か、僅かな損傷も無かった。……にも関わらず、分子貯蔵装置とそれに付随するものだけが綺麗になくなっていく。まるで最初からそこに何もなかったかのように。これがどういうことか分かるか？」

「……相手が、装置の事を熟知している。……ツナが入っていた装置がどれか、正確に分かっていたって事か？」

自業自得と言うものか。自他共に認める頭の回転率の良さから相手の言わんとしていることを察したりボーンは、不本意ながらも己の意見の誤りを認めた。

焦っている、と言う問いについては無言で流すが。

(だがまるで動じる様子のねえ、その余裕の有り様はやはり気に入らねえな)

そう毒づく事は止める気は無い。

「それで、一二つ目ね。」

まだ何か言葉を続けようとしたスパナを遮るように、しかしそれを気取られぬように仕切り直すかに見せかけて、こちらから言葉を投げると、今度は入江が言葉を引き継いだ。リボーンのスパナに対するやや婉曲した嫌がらせには気づいていないようだ。

「装置から何らかの方法で、綱吉君を構成している分子が移されている可能性だね？」

問いの形こそ取っているが、ほとんど確信に近かったのだろう。流れるような首肯に僅かに笑みを浮かべて、入江はでもと問いかけた。

「具体的な物はやはり分からないままだ。……八方塞がりも良いところだよ」

情け無いなど、肩を落とす正一に、「焦る必要は無い」と、言葉が返ってくる。

画面に向けた目線を変えることなく、スパナの言葉は滑らかだった。

「敵はボンゴレをかなり用意周到なやり方で連れ去っている。必ずそれ相当の目的があるはずだ。……僅かな例外さえ除けば、放っておいても敵の方から尻尾を出してくるだろう」

「……僅かな、例外？」

淀みの無い言葉とは反比例するように内容を濁したスパナの態度に、入江は珍しく、己の鼓動が高鳴るのを感じた。それは決して良い予感では無い。寧ろ、その真逆。

「例えば……白蘭がゴーストと呼んでいた雷の守護者にしたように、何者かの手によって、別の平行世界へ連れて行かれた可能性」

「バカな！」

その言葉に、真つ先に反論したのは、今回の綱吉と共犯関係となった事に加え、白蘭と「友人」であったが故に、入江だった。

「あり得ないよ！白蘭さんでさえ無理だったのに!!」

「今の先端科学では、な」

淡々と言葉を返すスパナのあまりにも内容の突飛の無さに、しかし、白蘭というやろうとした前例がある事実には、リボーンの背筋に怖気が走る。

平行世界はその分岐の数だけ存在する。ここより科学の力が発展し、白蘭のように他に数多の平行世界が存在する可能性に誰かが気づいている可能性は、零とは言いきれない。

「だが……そうなれば」

その先の言葉を発することが出来ずに、正一は口を噤んだ。

打つ手が無い、そう言葉に出してしまえば、本当にそうなってしまうかも知れない。

それはここにいる三人、全員が同時に抱いた恐怖だった。

「打つ手は、有るぞい」

……その声を、聞くまでは。

「久しぶりだね。皆元気だったかな」

発せられた声は囁くように微かな物だったが同時に誰よりも強い存在感があった。

「九代目……」

言葉として出したのは誰だったか。その言葉に目を細める彼は好好爺然としている

が、それが彼の人の一面でしか無い事は疑いようもない。

綱吉がボスの座を継いだことで先代と呼ばれるようになったとしても、現実として実権の半数はまだ彼の手の中に有る。

高齢となったが為にボスとしての役割を十分に果たすことが出来なくなつたと言う名目で綱吉にボスの座は譲りはしたが、若年である綱吉ではまだ海千山千の大狸の巣窟である上層部を一人で相手取る事が出来ないからだ。

並の組織ならこのような方法を取れば組織の中での派閥が生まれ、分裂が避けられない事態になるのだが、そこは呆れるほど権力欲のない十代目と穏健派と呼ばれた九代目。

九代目を十代目の指南役としてボンゴレ本部に在住させ、十代目本人は生国である日本と、本部があるイタリアを交互に行き来することで何とかバランスを保っていたのである。

「まずは、ご苦労だったね。ミルフィオーレとの戦いの記憶は天空のアルコバレーノから受け取っているよ」

映像を介して聞こえる声はどこまでも穏やかだった。

しかしその瞳は未だ戦いの最中のように鋭い。それだけでここにいる全員がこの戦いが単に抗争を終えた者達を労う為の物ではないと分かった。

「そして、今そちらで何が起こっているのかは、チエデフのバジル君から報告は受けている」

映像を間に挟んでさえも隠されない鋭い空気に、その場にいた全員が自然と背筋を伸ばす。マフィア嫌いを豪語する骸でさえも、顔を顰めながらもそこに立ち尽くしたままだ。

「だが……私に綱吉君の事について教えてくれたのはバジル君だけではない」

敢えてその言葉を強調しながらも、九代目はその視線をこの室内全体に行き渡らせた。

「私は……そこで教えられたことを、綱吉君の連れ去られた場所に関する情報を、君たちに伝える為にこの通信を送っている」

ある者は驚愕に目を見開き、ある者は不安から目を伏せ、唇をかみ締める。その一方で言葉もなく、歓喜に体を震える者もいた。

その言葉を聞いた守護者達の表情は、見事にバラバラなものだったが、その奥に共通していたのは恐れだった。

何者かによってボスである十代目が、綱吉が浚われていた事にも気づかず、のうのと眠り続けていた自分たちに、果たして九代目のいう情報を聞く資格はあるのか。

答えが出ることの無い恐れを抱えたまま、彼らは誰一人九代目の言葉に返答を返せな

いのだろう。

しかし九代目、ティモツテオはことこの事に関して彼らに何かを咎める資格など無かった。

なぜなら彼は、彼ら以上に何も出来なかったのだから。

彼の後継者である綱吉は、彼を始め、他のボンゴレ本部の者達を、上層部を何一人巻き込むことなく、関与らせる事無く、一連の抗争を終わらせた。

それほどにまで、ボンゴレ本部の面々は、十代目の信を得られていなかったと言うことだ。

(彼らを咎めるのは、筋違いと言うものだろう)

彼とともに計画の主軸を担った雲と、外部協力者である入江正一は勿論、他の守護者達も彼らに出来るやり方で、最後の最後までボスの信頼に答えたのだ。

その上で過去の、十年前の世界の己自身に、全てを託した綱吉の気持ちも、九代目は分かるわけではない。勿論、残された守護者の気持ちもだ。

(しかし、これだけは伝えなければならぬ)

彼らへの通信を送ると決意した時に行った選択。それを思いおこし、九代目は決意を固めるように、僅かに瞬いた。

それは時間にすれば僅か一瞬。

しかし画面越しにも分かるほど、その瞬間、九代目の纏う気配は変わっただろう。

「私は綱吉君の現在の居場所、そして彼の置かれている状況について、大空のボンゴレリングに宿る歴代のボンゴレボス達から見せられた」

その言葉の意味を理解した者達の顔つきが瞬時に変わる。その変化を見つめながら、ティモツテオはそれを事実として断じた。

「綱吉君はボンゴレリングを破壊した。しかしそれは、ボンゴレリングを失わせたと言わねばならなかったのだよ」

最後の記憶は、崩壊していくボンゴレ本部に自分自身が呑み込まれていくことだった。

そこから気が付けば、己は長い夢の中にいたような気がする。

それはやけに鮮明な夢で、俄には信じがたい内容だった。

そこで見たのは、懸念していた敵対ファミリーのボスと、後継者である彼の過去の姿が戦う姿だったのだ。

その力は今より決して強くはないが、己の知る同じ年頃からすればとても強い。

(夢にしては……現実味があり過ぎる……！)

沸々と湧き上がる予感彼の持つボンゴレリングが形を変えた事で確信に変わる。

ここにいる彼は異なる世界から来た過去の後継者なのだ。

その彼と彼のファミリーが、この時代の為に戦っているのだと。時間としてはどれほどだったのかは分からない。

長かったようにも短いようにも感じた記憶の奔流が止まった直後、現実に戻されると思っていた己は再び、どことも知れない空間に立ち尽くしていた。

(今度は……ここは一体?)

軽く目線を走らせるが、分かるのがそこが数人の人が立ち尽くしている狭い空間だと言うことだけだ。

橙色の死ぬ気の炎が灯る仮面を被った彼らは一様に小さな穴から零れる光の下で目をこらして、その穴の向こうを見つめているように見える。

(彼らは一体……)

穴から零れる光だけを頼りにそこに集う者達を観察するが、目を隠す仮面のせいか、表情を読み取ることが出来ない。

「つながりましたね」

無音に満ちていた空間で直後、まるで水面に波紋を立てるように呟いたのは若い男の声だった。

「ギリギリといったところですがの」

男の言葉に返すように言葉を零したのは彼よりも幾分か老いた男だろうか。

男が溢した言葉の裏には、何かに安堵しているかのような、柔らかな空気が含まれて
いる。仮面の隙間から僅かに覗いた口髭に己の目は釘付けになっていた。

(いや……まさか。しかし彼は……！)

何故だろう。己は言葉を発する彼に既視感を覚えた。

(……いや、彼だけではない)

思い直すように否定すると、今度は若い女の声が耳に届く。

「本当に行かれるおつもりですか？」

その声に導かれるように顔を上げると、彼らが覗き込む穴の傍らに、彼らと同じよう
に死ぬ気の炎の仮面を被る、若い男の姿があった。

そこ男の額に灯る死ぬ気の炎に、その全てを見透かすような瞳に、漸く己はここがど
こなのか、この場にいる彼らが何者なのかを確信した。

(ボンゴレ一世……^{ブリーモ}……ここにいるのは……歴代のボンゴレボス？……ここは大空のボン
ゴレリングの中なのか!?)

そこにいる人数は己を含め九人。

歴代のボンゴレボスの数と一致している。信じがたい事であるが、あり得ない事では
無い。それを己は知っていたけれども。

(どういふことだ？彼らを宿すボンゴレリングは綱吉君によつて破壊された筈……！)

己の後継者である十代目、沢田綱吉は己の手で大空のボンゴレリングを含む全てのボンゴレリングを破壊している。その変わり果てたボンゴレリングの姿は、綱吉が処分するリングを一目見せるためにボンゴレ本部を訪れた際に、間違ひなく確認している。

だからこそ、大空のボンゴレリングに宿る彼らが健在だとは思えなかった。

ではこれは夢か。その胸中の問いかけも、己の持つ直感が、明確な答を示してくる。

(……夢でも、幻覚の類でも無い。なら、これは……一体どうなっている?)

必死に現状を理解しようと思いを働かせる九代目を置き去りにして、ここに揃う歴代のボンゴレボスの会話は続いていく。

「……X世をあのままにするわけには行かぬ」
デーチモ

X世と届いた言葉に九代目はその発言者であろうI世に目を向ける。
ブリーモ

その視線を受け止めたI世は柔らかな笑みを浮かべ、凜とした声で己以外の七人のボンゴレボスに視線を走らせる。

「それに……守護者の持つボンゴレリングに宿るのは俺の守護者だ。俺が行けば道が繋がる可能性は更に高まる」
ブリーモ

I世が視線を向けるのは、穴の向こう。そこには良く見れば数人の小さな人影が見えた。

(……誰だ?)

詳細な情報を掴もうとよくよく目をこらせば、どうやら厄介ごとの最中なのか。一对多数で、向き合っている人々が見えた。

(待て……あれは……！)

そこで九代目は驚きで目を見開く。一人の方が纏う微弱な何か、死ぬ気の炎であると言ふことに気づいたからだ。何より。

(あれは……綱吉君?)

炎を纏うその相手が、己の選んだ後継者であつたからでもある。

(だが何だ?……これは)

しかし次いで大きな違和感が九代目を襲う。

直感はあるが綱吉だと訴える。しかしその姿を見れば見るほど、あれは沢田綱吉には見えなかつた。

(何かが……おかしい。彼とは明らかに……身に纏う空気が違う……！)

モヤモヤと胸の中に蟠るそれは漠然とした不安だつた。

その原因をはつきりと断定出来ぬまま観察を続けていると、彼が纏う炎が常とは異なる事に気づいた。

「分かるかⅨ世……あれはⅩ世の炎ではない」

驚くほど近くから聞こえた声に顔を上げると、そこには薄い笑みを浮かべるⅠ世の姿

があった。

いつの間にか己は、I世フリーモの傍ら、穴の目の前に移動していたのだ。

「気配を凝らせば尚のこと。X世デーチモの炎ならば、あのような濁った色には絶対にならぬ」

確かにその通りだった。

X世デーチモが纏う炎はその量こそは多いが、確固とした纏まりがなく、炎の色も鮮やかさがない。それはそのまま炎の純度の低さとして見て取れる。

(だけど、この穴は一体……綱吉君がいるあの場所は……)

「よせ。IX世ノリ」

伸ばした手を押さええつける。おそらく無意識だろう。視線を上げるIX世ノリは混乱から瞳を揺らしながらこちらを見据えている。綱吉に手を伸ばそうとして、彼は穴へ身を乗り出しかけたのだ。

「肉体を持つお前では危険すぎる。X世デーチモの二の舞になるぞ？」

二の舞。己で発した言葉に自嘲が過ぎった。

「待つてくください。一体、綱吉君に何があったのですか？あの穴の向こうは……二の舞とは一体……」

口走るIX世ノリも、何から尋ねれば良いのか分からなくなっているようだ。それは仕方のないことだろう。だが、悠長に話していられるほど時間は残されていなかった。

「悪いが時間が無い。一から全てを説明する事は出来ないのだ」

すまないと、謝罪の言葉を吐き出しながら、目線は穴の向こうへ注ぐ。

どうやら穴の向こうでは役者が一人増えたらしい。

既に成人していると見られる男はどう鼻屑目に見ても、冷静とは言い難い。

しかし、現状で戦いに入ることは双方……X世にとつても、あの場にいる者達にとつ

ても良策とは言えないだろう。

（それに現状において、あの世界に住まう者の身に何かあれば、こちらの世界にも何らかの影響は出る……！）

それだけは、あつてはならない。そんな強い決意を胸にI世は現状を変えるため行動を起こす。

額に燃える炎が勢いよく燃え始める。それにつられるように、仮面の炎も勢いを増し、それと同時に、I世の肉体その物も淡い橙色の炎に包まれていく。

事情を知らないIX世だけが、驚愕を隠しきれずに目を見開いているが、他のボス達は既に承知している故か、皆冷静を保ったまま、しかし強い感情を視線に込めている。

「……皆、後は頼むぞ」

言葉も少なく言い放ったI世に、誰も口を開くものはいない。IX世も、口を開く事は出来ないようだった。

事態への理解が追いつかなくなっているのだろう。IX世（ノイ）に苦笑を溢しながら、I世（フリーモ）はこの先に彼らにかかるだろう負担を思い、内心で謝罪する。

他のボス達にも迷惑をかけるが、現世で生きるIX世（ノイ）への負担は計り知れないものとなるだろう。

（だが……やるしかない……!）

決意を胸にI世（フリーモ）は既に不安定に揺らぐ炎の塊としか認識できなくなった己の肉体を見渡し、意識を穴の向こうへ集中させた。

（目を覚ませ……! X世（デーチモ）!!）

それはまるで、一筋の光明のようだった。高所から低所へ流れる水の流れのように、I世（フリーモ）の体だった炎が穴の向こうへ流れていく。

「これは一体……どうやってこのようなことが……」

穴の向こうへ目をこらせば、おそらく綱吉だろうと思われる相手の元へ、I世（フリーモ）の炎が、か細い軌跡となつて伸びている。

「ボンゴレリングの継承者、と言うだけではない」

II世（セコーンド）のぶつきらぼうな厳つい声が補足のように説明を加える。

「ここに居る者の中で、I世（フリーモ）が唯一、X世（デーチモ）に血を連ねた者。理の異なる異界においても、血脈は強い力を備えると言うことだ」

説明の間も彼らの視線はX世と、そこに流れていくI世の炎から離れない。

炎と、言つても理の異なる事が原因か、今のI世の炎はその場にいる者には視認できないようだった。

己がI世や歴代ボス達に意識を向けている間に、どうやら穴の向こうの事態はかなり緊迫していたらしい。増えていた一人の能力なのか、一目で高火力と分かる炎が綱吉を含むその場にいた者達へ向かつて放たれた。

どちらとも敵対する第三勢力か。

そう結論づけたのと、綱吉が回避行動をとつたのは同時。しかしそれによつて、そこにいた他の面々が炎に照らされ、各々の表情が見えたのは必然だったのかも知れない。

驚愕。それを上回る絶望。

はつきりと見えた顔立ちはまだ彼らの幼さを鮮明に表していた。

成年には達していないだろう。それらが死の恐怖に怯えている。

「……あ」

しかし、それ以上に目を引いたのは、一人安全な空中に身を置く綱吉の瞳だった。

超死ぬ気状態に到っているのか、その瞳は橙に色づいている。しかし、己の記憶しているそれとは異なり、その瞳の中は驚くほど空虚だった。

怒りも悲しみも無い、感情の高ぶりを表さない凜いだ瞳。

まるで人形のように微動だにしなかった彼だが、^{フリーモ}Ⅰ世の炎僅かに彼の体に触れた瞬間、その表情が動いた。

僅かに響められた表情。微かに強ばる体。炎となった^{フリーモ}Ⅰ世が何を行おうとしているのかは分からなかった己に、^{セコンド}Ⅱ世か言葉を加える。

「^{フリーモ}Ⅰ世は^{フリーモ}X世の精神世界に入り込み、一時的に^{フリーモ}X世が囚われている肉体の主導権を握るつもりなのだろう」

普通ならば不可能だ。それこそ^{デーチモ}X世の霧の守護者、六道骸のように特殊な体質の人間でなければ。

「^{デーチモ}X世を収めている肉体は厳密には^{デーチモ}X世の肉体ではない。だからこそ、^{デーチモ}X世自身も完全な主導権を持ち合わせていないのだ。

やり方はかなり強引なものになるが、このまま^{デーチモ}X世の意識を異界においておけば、この世界もただではすまない」

淡々と語る^{セコンド}Ⅱ世の声には抑揚が感じられない。おそらく内心を悟らせないように敢えてそのような語り方をしているのだろう。

漸く冷静さを取り戻してきた所で、先程の言葉を反芻して、一瞬異界の現状へ意識が向かったが、直ぐさまそれを気にすることではないと片付けた。

^{セコンド}Ⅱ世や^{フリーモ}Ⅰ世が動いているのだから、己が心配する必要など始めから無かったのだろう。

己が何故ここに集められたのかと言う疑問が僅かに脳裏を過ぎったが、それこそ些細なことだろう。

展望が開けかけていたことで気を緩めたことは失策だったのか、悲鳴にも似たVIII世オウターウオの声が上がったのはこの時だった。

「一体何が……I世フリーモつ!!」

綱吉の体を包むように覆っていたI世フリーモの炎が、風で煽られるかのように不安定に揺らめいている。

「何が起きている……これは、まさか……」

II世セコンドが、現状に思い当たる何かがあったのか、僅かに息を?む。

「まさか……ブラッド・オブ・ボンゴレ」……肉体の違いがそこまで影響を与えているのか……!?!」

それはI世フリーモにとっても予想外な事だった。

炎となった己には、己から始まった縦の時間軸……それが作ったのだろう軌跡の跡がはつきりと見えていた。

それを辿って直ぐにX世デーチモの精神世界に入ろうとし、眉を寄せる。

X世デーチモの精神世界へ向かう為に、I世フリーモが使おうとしたのは広義で言えば「ブラッド・オブ・ボンゴレ」……細かく言うならばボンゴレボスとなる者が、ボンゴレリングを継承する

ために受ける試練。それを乗り越えたものに結ばれる、ボンゴレリングとの強い結びつきだった。

未だ現世に生きるIX世（ノリーノ）とX世（デーチモ）には伝えられていないことだが、その結びつきこそが死後、その魂をボンゴレリングの内部に彼らを導く因果となる。

I世（フリーモ）から始まりX世（デーチモ）へ続くそれはリングを介しているとは言え、……いるからこそ、何よりも強力な縁と言えるだろう。

（その筈、なのに……これは何だ？）

眉をしかめるI世（フリーモ）が、注視するのはボンゴレリングを介してある筈のその強力な因果だ。

I世（フリーモ）から他の八人の歴代ボスを繋ぎ、X世（デーチモ）で収束しているはずのそれが、X世（デーチモ）の精神世界、それに、触れるか否かの所で途切れている。

まるでそこから先へ進むことを妨げられてしまっているかのように。

（不味い……このままでは、X世（デーチモ）の精神世界には行き着けない……！）

予想していなかった事態に無意識に唇をかみ締めたI世（フリーモ）は直ぐさま意識を切り替え、打開策を捜す。

I世（フリーモ）は既に穴を越え、本来の己の世界とは異なる異界へと入ってしまった。生身では無いとはいえ、理の異なる世界に置いて、器を持たないまま存在することは危険すぎ

た。靈體、死ぬ気の炎の塊とは言え、意識を保つためにはそれ相応の力は必要となる。何もしくなくても力が潰えて消滅という展開だけはごめんだった。

^{デーチモ}X世と共有する因果を用いて、彼の精神世界に入り込むことは最早難しい以前に不可能に近いが、それならばそれとして他の方法で^{デーチモ}X世か、若しくは他の人間の精神世界へ入るしかない。

(しかし今の状況では……^{デーチモ}X世にしろ他の者にしろ、精神世界にまで干渉するのは容易い事では無い)

それに加え、現時点での状況も、^{ブリーモ}I世を？気な思案に浸らせて暮れるものではなかった。

迫り来る炎によって躲した^{デーチモ}X世と、炎を放った第三者以外の者達が、丸焼けにされるのも時間の問題だろう。

(^{デーチモ}X世の精神世界に入れぬのならば彼らの誰かしか……しかし、何の手がかりも無いでは精神世界までは辿り着く事は不可能……)

打つ手は無いのかと、咄嗟に彼らへ目を走らせた^{ブリーモ}I世がそれを見つけたのは単なる偶然か否か。

それは小さな糸屑のようだった。

因果に比べては随分か細いそれ。しかしそれははっきりと、^{デーチモ}X世の精神世界と一つの

子供とを繋いでいる。

(……俺はX世デーチモの精神世界に入ることには出来ない。……しかし、X世デーチモの精神世界を中継ぎにしてあの子供の精神世界に行く分には……)

それは少しばかり賭けだった。しかし、出来ないことではなかった。

その子供……緑谷出久が何なのかをI世ブリーモが知ったのは、精神世界に入った直後の事である。

九代目から聞かされた事柄の数々に、彼らは咄嗟に反応が出来なかった。

「道ダウが繋がる……I世ブリーモは確かにそう言ったんだな。九代目」

その声が聞こえたのは、彼らの更に背後。新たに増えた人員に、画面越しの九代目が目を見開いたのが分かった。

「間違つてはおらんよ。しかし、夢枕に迄現れるとは、奴らも相当、X世デーチモを好いているよ
うじやのう」

始めに口を開いたのは、リボーン。

黄のアルコバレーノにして、X世デーチモ……沢田綱吉の家庭教師だ。

次に口を開いたのは見慣れぬ老人。リボーンを肩に載せ、杖をつきながら入ってきた老人は、しかし常人では感じない威圧にも近いものがあった。

「タルボ爺様……」

画面上の九代目の声に、老人は画面越しである事を感じさせない声音で呟いた。「老いたのう、九代目の小僧よ。儂がここへ来ることまでは分からなかったかの?」

嬰鑠と笑う人物は両目を布で覆っている。盲目なのか、他に理由があるのか。

そもそもこの人物が何者かも分からないその場の者達は、自然と老人を遠巻きにしなから、その肩に乗る知己であるアルコバレーノに視線を寄せる。

視線を集めたりポーンはと言うと、彼らの問いたげな視線を気にする素振りも無くグルリと見渡し、ふつと顔を緩めた。

「揃いも揃って……情けねえ面してやがるな」

「ちよつと待ちなさいアルコバレーノ。それ何で僕も含んでいるんですか?」

間髪を入れずに口を出したのは骸のみ。

他の面々はいつもと変わらぬ……沢田綱吉がいた時と同じようなニヒルな笑みをこちらに向けて浮かべるリポーンに、言葉を告げられなかった。

「……小僧」

漸く口を開いたのは呆然と二人のやりとりを見ていた山本武。

「何で……いつも通りなのな?」

やや躊躇うように一、二度開閉を繰り返した口から飛び出した言葉は、そんなありふれた物だった。

しかし、山本含む、骸以外のこの場所にいる者達は多かれ少なかれ、同じ思いを持っているのだろう。

彼も、沢田綱吉の消失に動揺していたはずだ。自分達と同じように。……少なくとも、さつきまでは。

その場に立つ者達の、そんな八つ当たりにも近い感情を察したのか、軽く肩を竦める動作をして、リボーンはクツと笑みを深める。

「当たり前だぞ？あのバカツナ連れ帰んなきやいけねえときに、いつまでもクヨクヨしてられねえからな」

「……………へ？」

その声は、やけにはつきりと、その部屋の中で木霊した。

発せられた言葉を理解できない面々に構うこと無く、いつものように、突拍子も無い口調で、リボーンは言い切る。周りに起こる混乱を素知らぬ顔で無視をして。

「あいつを連れ帰るぞ。……その為の方法は分かった。……後は動いて、あいつの首に縄をかけるだけだ」

世界を渡る方法

「十代目を……連れ戻す方法が分かったって……」

「本当か!?小僧っ!!」

その言葉に、真っ先に反応したのは嵐と雨の二人の守護者。

それに対し、同じくその場にあった晴と霧は微動だにしない。

しかしそれは、彼等が無情にも何も感じていないと言うわけでは無い。

霧の守護者は片や有るか否かの微笑みを薄らと浮かべているし、もう一方は瞳を閉ざしたまま、口元を微かに緩めている。

晴の守護者はおそらく、言われた言葉を即座に理解できなかつただけだろう。もしかしたら幻聴かと疑ったのかも知れない。

そのどちらでも無いと漸く飲み込めたのか、固く握りしめた拳に力を込め、グツと歯を食いしばっている。

「それで……俺達は何すれば良いのだ……!」

しかしそこで叫び出すのではなく、冷静さを保っていることに、霧の片割れ、六道骸は僅かに瞠目した。

今までの己を変え、明確な意思表示にも見えたのだ。

「お主等には、説き伏せて貰わなければならぬ」

それに答えたのは、リボーンを肩に乗せていた盲目の老人。

彼の言葉にリボーンもひよいつと肩から降りる。それを確認して、老人はゆつくりとした動きで背中に括り付けていた袋を手を持ち、長机の上にそれをのせた。

「このリングの中に宿る……初代の守護者達をのう」

袋の中から取り出されたのは、彼等のよく知る、そして変わり果てたリングの姿だった。

タルボ爺。そう呼ばれる彼は、初代ボンゴレから仕えていると噂される彫金師……金属を加工し、アクセサリーを作れる職人である。

無論、噂されるボンゴレと関わり始めた時期は謎に包まれており、現在は本人しか知るものはいない。

少なくとも、九代目がドン・ボンゴレとなった時、彼は既に今と変わらぬ姿でⅧ世に仕えていたのは事実だ。

「ちよつと待て！何でそれをあんたが持っている!？」

動揺からだろう。幼い頃のように噛みついた嵐の守護者に、通信越しで九代目が制止をかけた。

目上である九代目の言葉で、口を閉ざしはしたが、その瞳は未だに納得が出来ないと物言いたげな視線を送ってくる。

「これは儂が十人目のボンゴレ……お主等の「大空」から、預からせて貰っておったんじゃよ……当人は捨て場所だと言うとつたがのお……」

呵々と笑うその姿は、声だけを聞けば老爺の物とは思えないだろう。それほど澆刺とした物だった。

「捨て場所としては適任と思うたのじゃろうな。下手な場所に置き去りにしては、何者に利用されるか分からぬ。場合によれば新たな火種をも生みかねん。その点儂ならば野心は無く、こやつ等の扱いも心得ておるしの」

並べられた言葉の数々は、不満はあるものの、獄寺には納得の出来る物だったらしい。小さく口の中で何事かを唸りながらも、ひとまずは引き下がった。

「それでよ。さつき言つてた「説き伏せる」ってのは、どういう意味なのな？」

引き下がった獄寺と入れ違いに声をかけたのは山本武。社交性に優れ、誰にでも気安い空気は彼の非常時であつても効果を発揮していたようだ。

「その言葉の通りじゃよ。お主らは彼の世界へ行くためにはそれぞれのリングの守護者を協力を仰がねばならん」

彼の世界。獄寺が話の内容を整理しようとするように、小さく呟いている。おそらく

そこそこが、自分達のボスである綱吉が連れ去られた場所なのだろう。

「何故そこへ行くのにボンゴレリングが必要なのだ？極限に大勢で行ってしまえば良いでは無いか？」

不満を露わに訴える了平に、タルボは気分を害する様子も無く、呵々と笑った。

「異なる世界に入るのじゃぞ？並大抵の力では世界と世界を繋ぎ、その上渡ることは出来ん。よしんば渡れたとしても、どうやって再びここへ戻ってくるつもりじゃ？」

「成る程……さっぱり分からんぞ！」

自信満々に言い切る言葉ではないと感じるファミリー一同の心情には気付くことなく、呆気からんと笑う了平に、自然と張りつめていた空気が緩む。

脱力するとも言えるだろうが。

「つまり……行つたは良いが帰りが困るといふ事態になりかねないと言うことですよ。ボンゴレを見つけ、いざ戻ろうとなつた所で、元の世界がどれか分からなければ話にならないでしょう？……平行世界パラレルワールドと呼ばれる世界はもしもの数だけあるのですよ？」

僅かに眉をひそめながらも、骸は幼児に言い聞かせるような口調で、了平に言い含めていく。

「成る程。つまり目印だな！」

呆気からんと簡潔すぎる結論を出すこの男は本当に理解できているのか、思わず額を

抑えた骸を見た者がいたか否かは定かでは無い。

「成る程。それでボンゴレリングが必要なことも、行けんのが俺達守護者だけだったのも分かった……。だがそれで、リングの中に宿っている初代の守護者達を説き伏せるって言うのはどういう事だ？」

平静を保ちながら一時的に黙って話を聞いていた獄寺がようやく口を開く。

その簡潔なまでの質問に、タルボも簡潔その物で応えた。

「簡単なこと。初代守護者の承認は、そのまま主等への守護となる。……それが無ければリングが耐えきれぬのじゃ。何せ、平行世界を渡る等という荒技は、本来ならば横である「マール」の領分……「ボンゴレ」の役割ではないからのう」

言外にそれほど異例で且つ、危険度の高いと言われたそれを、意図せず、何者かによって無理矢理と言う形で行われたであろう十代目の状態に思いを馳せてしまい、獄寺はグツと眉間に力を込めた。

彼を案じて泣くのは早いと分かっているからだ。

心配して泣くのは無駄でしかない。骸の言葉通り、彼の人は既に連れ去られた後なのだから。

彼の元へ行くための手がかりが掴めた事での嬉し泣きは早すぎるだろう。

そんなことは同じ世界に降り立ってからすることだ。

それを理解しているからこそ、獄寺がやったことはひどく明瞭なものだった。

「分かった。……どうすれば良い？」

その言葉を聞いたタルボは僅かに目を眇め……面白いというように笑う。

彼は当初、そこまでして追うか否かを尋ねるつもりだった。

しかし言葉にした嵐の守護者を始め、他の守護者達も皆、その方法があると知った時点で、迷いなく、その先の決断を導き出したのだ。

（十代目よ……たとえお主が信じられずとも、こやつ等はお主を信じ続けるようじゃのう……）

大空と天候……守護者とボスを繋ぐ確かな絆を認めて、

タルボは頬を緩ませ……答を呈した。

「炎を灯せばよいだけじゃよ。……儂が破片から新たに鍛え直す、新たなボンゴレリングにのの」

通信機越しにその答を聴いたボンゴレ九代目は、はっきりと己の表情が強ばっていることを自覚していた。

「本当に……そのようなことをするつもりですか？タルボ爺様」

問いかける声も、明らかな硬さを滲ませている。

「本当も何も……砕けたボンゴレリングでは、世界を越え、ボンゴレに辿り着くまで形を

保てんよ。十人目のボンゴレを救うというのならば、鍛え直す事は避けては通れぬ」

嬰鑠とした口調で突きつけられた事實に、九代目は、目を伏せた。

分かつているのだ。己の超直感も否定はしない。

しかしその行為は、下手をすればボンゴレの至宝たるボンゴレリングを完全に失わせる愚行になりかねない。

成功すれば確かに綱吉を救える道は開けるだろうが、未だ精神的にも盤石とは言いきれない年若き守護者達で、必ず成功するという見込みはなかった。

寧ろ失敗の確率の方がずっと高いだろう。

「九代目よ。どちらにしろ、選択肢は残っておらんのじゃよ」

駄々をこねる子どもに言い聞かせるような口調で、タルボは続ける。

「十人目のボンゴレがこの時代によんだ若きボンゴレによつて、マールレの小僧が沈んだ。そやつ等か戻るべき過去の時代にあるマールレリングを封じるために巫女姫が命を落とした……残っているのはボンゴレだけじゃ」

トウリニセツテ。世界の礎と呼ばれるその三つの秘宝の核たる大空の所有者が誰一人いない。それが何を引き起こすのか、九代目には予測が出来ない。だがそれは、九代目だけの事では無いだろう。

人の寿命は短い。

昔に比べれば長命となったとは言え、僅か百年。

およそ百年前、ボンゴレを創設したジョットがボンゴレリングの一角を担ってから、枷を嵌めた状態とはいえ、そのリングは仮の所有者を代替わりしながら時を紡ぎ続けてきた。

当然のことながら、それ以前の世界を知る者など、もうほとんど生き残っていないだろう。

(そう……だからこそ、それらの全てが眠っている時代の悲惨さなど、理解は出来ない……)

無論それは、誰に責められる事でも無い、当たり前のことだ。

体験していないことを理解することは難しく、その時代を未だ知る者がいたとしても、進んで見聞を広めるようなことはしなかっただろう。

それは今となつては悔やんでも詮無いことではあるが、それでもタルボは危機感を感じつつある。

(I世^{ブリーモ}が先行したとは言え、X世^{デーチモ}が降り立った時点でおそらく、既に何らかの異変は起こっているとみてよい。……そしてそれは、おそらくX世^{デーチモ}という異物が消えぬ以上、悪化こそすれ改善はせん……そう)

ふと、タルボは見えない目線を空へ向けた。

日の光はいつもよりも弱く感じる。

雲が太陽を覆っているのか、それとも。

(それは……こちらの世界とて同じ事……)

目に見えない、しかし、確かに何らかの形で、異変は起きつつあるだろう。

一抹の不安を胸に抱えながら、それでもタルボは己の出来る「最善」の為に、動きだそうとしていた。